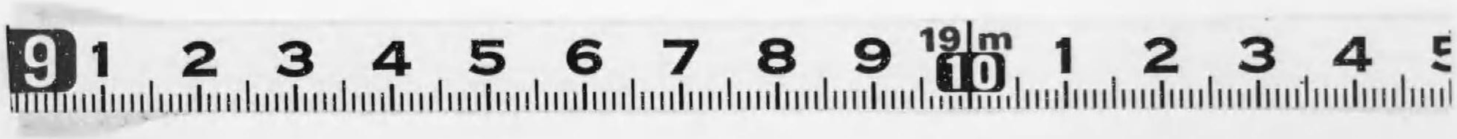


500 52

0 複写

ト工-5F-13

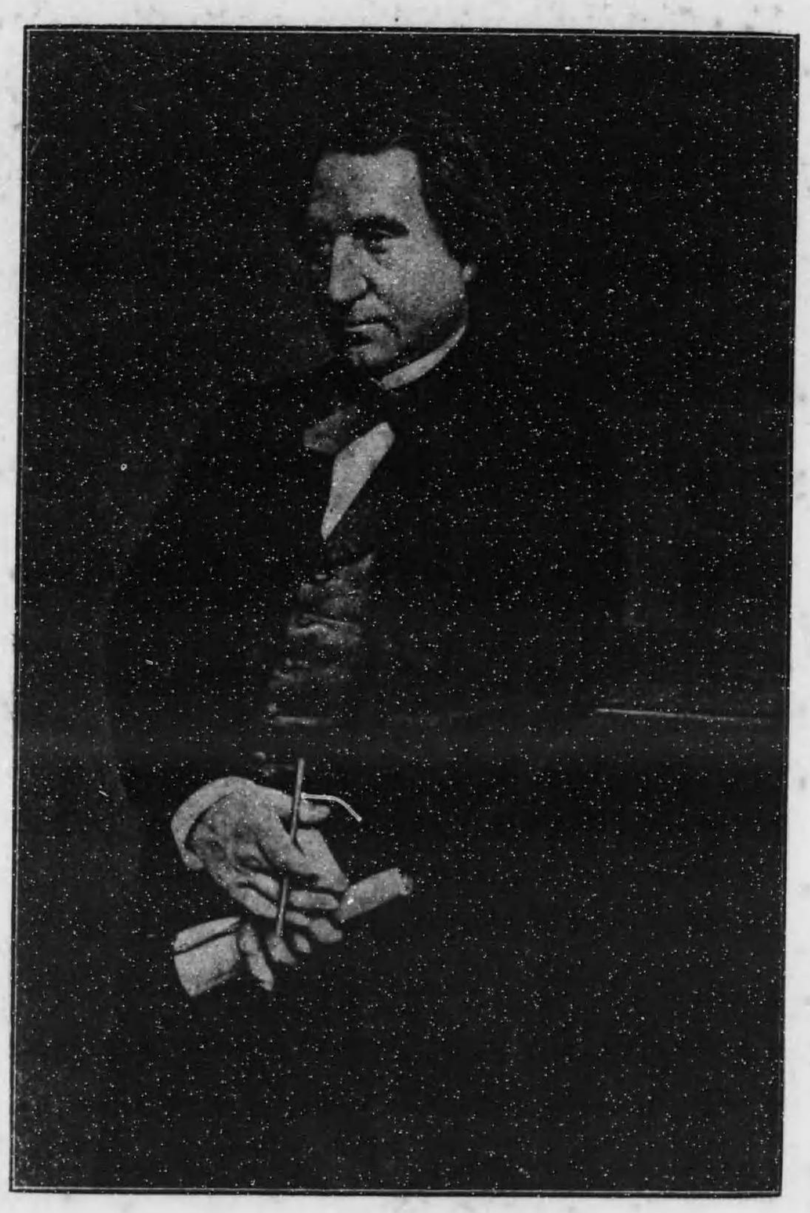
500-52

世界名著叢書
第四編

耶蘇

ルナン著
廣瀬哲士譯

大正
11. 12. 21
内交



ERNEST RENAN

はしがき

此譯書を公けにするに就いては一言述べて置きたいことがある。本書は原名を Vie de Jésus といつて、エルネスト・ルナン（Ernest Renan）の基督教起源史の第一書である。既にわが國に於ても明治四十一年に綱島梁川安倍能成兩氏によつて『ルナン氏耶蘇傳』として譯出されたものと、大正十年一月加藤一夫氏によつて『耶蘇の生涯』として公けにされたものとの二種がある。この兩書は何れも特色があつて、前者は文章體の美文をもつて譯されてあり、後者は口語體をもつて譯されてある。尙前者は英譯から重譯したものであることを明かに斷つてあるが、後者には譯者の序文もはしがきも載つてゐないから原書によつて譯されたものか、英譯によつて成されたものであるか、或は其他のものによつて成されたものか解らない。しかしながら、前二書を比較して見ると何れもルナンの原書に載つてゐる序文及び序論が省かれて居り、主と

して聖書の引用文に關する註譯のみを添へてあるところからして、恐らく後者も英譯によつたものでは無いかと想像される。自分は不幸にして英譯を手許に持つてゐないから、前二書が俱に英譯から譯されたものとすれば、二書の甲乙何れが正確であり、何れに原著者の精神思想がよりよく移されてゐるかを識別し得ない。しかし兩書とも基督教に興味を有ち耶蘇共人の生活思想を顧慮したことのある人々には、ルナンの述べようとした思想の內容を略了解し得るもののやうである。

しかしながら、それにも拘らず、今自分が第三の譯書として敢て本書を公けにするのは多少理由の無いことでは無い。第一は前にも述べたやうに、既に公けにされてゐる譯書には原著者の重要な序文及び序論の略されてゐることであり、第二は前二書の臺本とされた作品を手許に持つてゐない爲めに譯の當否について語る資格は自分に無いのであるが、尠くとも自分の見た佛蘭西の原著を前二書の譯の內容と較べて見ると、其間にかなり夥しい差異のあることを發見したことである。尙其他の理由としてこれに着手する理由となつたものもあるけれども、それは必ずしも重要なことでは無いから略して置く。とにかく斯樣な理由からして自分は全く新しい飜譯に着手したのである。さうして取掛つたのは、例年に無い今年の暑さの始まるのと殆ど同時であつた。それを終つたのもまたその暑さの終るのと殆ど同時であつた。從つて非常な暑さのためと、殊に自分の淺學の故によつて如何はしい個所が多少あるかも保し難いが、しかしながら、讀者は餘程原作と接近して本書を讀み得られるであらうと敢て自分は信じてゐる。固より原作者は近代の佛蘭西文壇及び學界に於て類の少い偉大な人であるから、それと同一の境地に達して譯書を作り上げることは到底望み得られないことである。それ故眞にルナンの作品をさながらに味はうとする人にとつては直接原書につかれるより他に良法の無いことはいふまでも無いことである。しかも、さうする爲めには、啻に佛蘭西語を十分讀みこなす能力を必要とするばかりで無く、基督教猶太教に關する相當な知識と、廣く歐羅巴の神學的世界及び一般就中佛蘭西の文化に通じてゐることを必要とするのである。けれども、さう多くの素養は外國人たるわれらには到底希望し得られることでは無く、またさうする必要も無いであらう。假に本書を十分理解する上には、右に述べたやうなことが必要であるにしても、しかし、幸にして本書は知識的に理解すべき內容以外に他の內容をも具備してゐる。のみならず、その知識的

理解以外のものこそ恐らく本書をして最も價値あらしめ、永久に光を放たしめるものであらう。それは取りも直さず、本書を實證主義的の一個の歴史的述作と見ないで、永久に亡びざる偉大な人格の生活の記錄として、又はヒュウマン・ドキュメントとして見られる點である。また他の言葉でいへば一種の藝術的作品としてである。現に佛蘭西の優れた或批評家は、本書を批判して、從來神學的研究のものとのみ目せられてゐた世界を文學の領土としたことに於て佛蘭西文學史上の新紀元を作るものであると論じてゐる。恐らく本書の現れてから以後多少の神學的研究及び史的研究の進歩が成就せられたことであらう。しかしながら、それあるが爲めに本書は果して何れだけの光を失つたであらうか。佛蘭西の本國に於て、本書の現れてからずつと後になつて、原著者の手によつて作られた普及版の世に出る必要があつたばかりで無く、今日ではその普及版が二通りも普く世に行はれてゐるくらゐであり、また譯者が僅に普及版のみを持つてゐた時、島崎藤村氏の好意によつて譯者に貸與せられた原著は一九一四年前後のものであらうとおもはれるが、それは第四十八版であり、最近自分の手にしたものは更に五十八版になつてゐる。原著初版の現れたのは一八六三年で既に半世紀以上を經過してゐるにも拘らず近年益々

本書の迎へられる所以は、決して本書が單に事實を事實として傳へる史書の類では無くして、それが藝術的クラシックの作品として存在の理由を有つてゐることを實證してゐるものと見なければならぬであらう。

けれども、かやうな立場からすれば、この譯書はまた前とは異つた不十分さを感ずることになる。美文が必ずしも藝術で無く、往々それが非藝術の甚しいものであることを了解してゐる現代日本の讀者界も、恐らく自分の惡文には眉をひそめられるであらう。しかしながら、それは自分の持前で今更致方の無いことであるから、それに不快を感ぜられる人々には、既に過去の人となつてゐる原著者に對してお詫びすると同時に幾重にも寛恕を乞ふこととする。

尚この譯書の名を耶蘇傳としなかつたのは既に綱島安倍兩氏の譯にその言葉を用ひてあつた爲めにそれを踏襲することを遠慮すべきものであるとおもつたからであり、また一つには Vie といふ言葉は必ずしも傳といふ言葉でつくせるもので無いと考へたからである。生涯といふ言葉も同じ理由でそれを用ひることを避けたのである。加ふるに本書の內容は決して單なる傳記では無く、基督教起源史を論述する上に第一に現れて來る主人公を中心とし、大體を傳記體の

順序によつて作つてあるに過ぎないのであるから、かたがた自分はこの譯書を敢て『耶蘇』と題したのであり、別に他意は無い。

最後に尙斷らなければならぬことは、原書には附錄として第四福音書のヨハネ傳に關するかなり詳細のものが載つてゐるが、これは神學專攻の人にとつては興味あるもののやうであるがしかし本文とは殆ど無關係のものであるから略して置いた。註釋についても同樣であつて、一々それを添へることはあまりに專門的となり徒らに煩はしいものであるから、その中を勝手に譯者自身が取捨し卷尾に附することとした。原語の發音に關しては、歷史及び地理並びに傳習的用語から來る困難と譯者の好惡からして極めて雜多の發音にして置いた。しかしながら、主として拉丁風の發音か聖書（邦譯）風のものか或は佛蘭西語の發音に則つて置いた。その爲めに參考として卷尾に片假名と原語（佛蘭西語）との對照表を附することとした。

序に極めて簡單に原作者ルナンに就いて述べると、彼は十九世紀佛蘭西の代表的思想家の一人であつて、殊に七十年の普佛戰爭前後の思想界の中でイポリイト・テエヌと相並んでの大立物であつた。彼が如何に一世に重んぜられたかを外的に證據立てるものは、死んだ時彼に國葬をもつて敬意を表せられたので想像することができ、また彼が如何に青年及び後輩に影響を與へ、また學界の上に功獻したかは種々の作品及び思潮によつて證據立てられるが、殊にポオル・ブウルジエの小說（最も近代佛蘭西の心理及び內的生活を描寫してゐるものとの定評のある）などを讀むとよく首肯されることであり、また今日の佛蘭西の思想家が近代の代表思想家といへば直ぐにルナンの名を第一に擧げるのでも窺はれる。

ところで、かやうな重要の地位を占めてゐた彼は一八二三年に佛蘭西の西北で、最も英國海峽中に突出してゐるブルタアニュの寂しい海岸のトレギエといふ所に生れてゐる。一體ブルタアニュといへば、佛蘭西の中で最も宗敎的な地方の一つであつて、また極めて想像力の豐富な人を生む地方である。それは風土の所爲であるか、或は偶然のことであるかも知れぬが、文學史上の一事實であつて、ルナン自身の生活及び作物によつで矢張この事が裏書されてゐる。殊に十九世紀當初に於て『ルネ』『アタラ』『殉敎者』『基督敎精髓』等を書いたシヤトオブリアンを出した地方に、同じ世紀にこのルナンを出したことは、唯それのみによつても何等かの因緣が其處にあるのでは無いかと想像されるであらう。貧しい家に生れたが學問を棄てるにはあまり

に彼の頭腦が秀でてゐた。田舍で中學の課程を了つてから、イツシイの神學校、次いで巴里のサンシユルピイス神學校に入つた。彼がかやうに學問をすることができた背後には稀らしい美しい心の彼の姉アンリエツトのあつたことを記憶しなければならぬ。彼はかやうにして神學校に學び宗教界の人となる筈であつたが、理性に明敏であつて好い加減に事を所理して行くことのできなかつた上に、それかと言つて職務の爲めに二重生活をも敢て辭しない凡庸な學者で無かつた彼は、次第に正統派の神學者の生活から遠ざかつて遂に神學校を退かねばならぬことになつた。啻に聖經に奇蹟的物語があつて無理にもそれを信じなければならぬからといふやうな事から、彼は神學を捨てて俗學に就いたのでは無い。極めて荒唐無稽なことを信じなければならぬといふやうなことであつたら、あまりにその無邪氣なのに微笑を洩して、甘んじて彼は辛抱したであらう。しかしながら、彼が苦痛として止まるに耐へなくなつたのは、もつと眞摯な、もつと微妙な內的生活からであつたことは、彼の告白文學として名高い『思出の記』の中に委しく叙述してある。この方面に於ては彼は或意味に於てルソオの後繼者であつた。とにかく斯くして宗教から離れた彼は既に餘程進めてゐた近東語の研究を熱心に續け、また一方

では獨逸哲學を熱心に研究した。さうして軈て彼は大學教授の資格と學位とを獲るやうになつた。古代研究の使命を帶びて一八四九年には伊太利に派遣せられ、一八六〇年にはフエニキヤ探險の委員長としてシリヤに派遣せられた。フエニキヤから歸國して『コレエジユ・ド・フランス』の希臘語教授に任ぜられ、『耶蘇』の著述が大問題となつて罷免せられ、その後再就職を切に慫慂せられたけれども固辭して應じなかつた。然るに普佛戰後奈翁三世が沒落し、佛蘭西が共和國になつてから再び希伯來語の講座を擔當することを承諾した。いふまでも無く、彼はアカデミイ・フランセエズの會員に擧げられてゐた。彼は姉の勸めによつて妻帶した。しかしながら、弟を愛して小亞細亞迄も同行し竟にその地で熱病の爲めに死ぬやうになる迄弟の事業を終始助けた姉のアンリエツトこそ、實に彼の人格、性情、精神、乃至才能をも作り上げた勝れた女性であつた。恐らくこの女性は佛蘭西の有つてゐた最も美しい女性の中に算へらるべき稀な一人であつたらう。彼は一八九二年に巴里で死んだ。彼の作物の或物はデイレタンチスムのものとして批難されたこともあるが、しかしながら、彼自身をさう見るのは單に彼の態度を一面のみを見た者の言葉であつて、彼の生活其物を見、殊に學者としての彼、書齋

の人としての彼を見ると如何に彼の操守の堅かつたこと、學問の爲めに献身的の情熱を有つてゐたか十分に窺ふことができよう。彼は殆ど理想的の學究の人であつた。と同時に彼は立派な藝術の人であつた。それかと言つて決して彼は藝術に溺れる人では無かつた。彼は決して藝術の理解とその才能とをあらゆる方面に濫費する人では無く、唯それを自己の天職を定めたものにのみ限つて適用したのである。從つて彼の學問は專門家の學として實に立派なものである以上に、更に專門以上の或物を有つてゐる學問であつた。彼の成就したものは或意味の綜合科學であつたといひ得るであらう。

彼の著述は非常に大部なものである。第一期の主なる作品は『セミチツク言語史』『宗教史研究』『言語起源論』、第二期の主要なるものは、茲に譯出した本書を劈頭の作物として、『使徒』『聖パウロ』『アンテクリスト』『福音書』『基督教會』『マルク・オオレエル』をもつて終る基督教起源史であり、第三期のものは『イズラエル史』五卷より『思出の記』に至るもので中には若干の創作もある。その全集は巴里カルマン・レヴイ社から出てゐて通計四十五卷ある。

目次

献辭……一
はしがき……一
第十三版原序……一
序論……四〇
第一章　世界史上のイエスの地位……一
第二章　イエスの幼年時代と青年時代、彼の最初の印象……一八
第三章　イエスの教育……二五
第四章　イエスの發達當時の思想界……三六
第五章　イエスの最初の訓言、神父及び純粹宗教に關する思想、最初の弟子……五八
第六章　洗禮者ヨハネ、ヨハネ訪問のイエスの旅行、洗禮の採用……七七
第七章　神の王國に關するイエスの思想の發達……九二

第八章　カペナウムに於けるイエス……一〇八
第九章　イエスの弟子達……一一三
第十章　湖畔の説教……一一五
第十一章　貧者の天下としての神の王國……一一七
第十二章　囚はれ人ヨハネよりイエスへの使、ヨハネの死、兩派の關係……一一六
第十三章　最初のエルサレム攻撃……一一七
第十四章　イエスと異教徒及びサマリヤ人との關係……一一八
第十五章　耶蘇傳説の起原、彼の超自然的任務に對する歡念……一一九
第十六章　奇　蹟……一二〇
第十七章　神の王國に關するイエスの思想の決定的形式……一二二
第十八章　イエスの制度……一二九
第十九章　熱心昂奮の增進……一二三
第二十章　イエスに對する反對……一二五
第二十一章　エルサレムへの最後の旅……一二七
第二十二章　イエスの敵の計略……一二九
第二十三章　イエスの最後の一週間……一三〇三
第二十四章　イエスの逮捕と裁判……一三〇
第二十五章　イエスの死……一三九
第二十六章　墳墓に於けるイエス……一三八
第二十七章　イエスの敵の運命……一三四
第二十八章　イエスの事業の根本的性質……一三六〇
註　釋
片假名と原語との對照表

一八六一年九月二十四日、ピブロスで死んだわが姉

アンリエットのきよき靈に、

御身の息ある神のふところから、御身は想ひ出してくださるか。私どもが一緒に訪ねた場所から感興を得て、たつた御身と二人きりで、私がこれらの頁を書いた、あのガジイルの長い日々のことを。私の傍で、默したまま、御身は一枚一枚讀み直したり、それが書けると、直ぐ書き寫したりしてゐたのであつた。その間、海、村落、窪地、山々が、私どもの足許に展開してゐた。堪へがたい熱い光が、無數の星の群に位を讓つてくれた時、御身の細かい優しい質問が、また御身のつつましやかな疑惑が、私どもの同じ思ひの崇高な對象に、私を立ち歸らせてゐた。この本は、第一には御身と俱に作つたのであり、また、御身の思ひ通りのものであつたといふ理由から、御身はこれを愛しなつかしむ旨を或日語られたことがあつた。偶に、御身がこの本のために、つまらぬ人々の窮窟な批評をおそれた

時、何時も御身は、眞に宗教的な人々は、竟には欣んでくれるやうになるものと信じてゐられた。それらの物柔かな冥想の最中に、死が雙の翼を擴げて私ども二人を襲うた。熱病の睡眠が、私どもを同じ時刻に捉へたのであつた。私一人だけの目は覺めた。御身は、今聖きビブロスに近い、また昔の神秘の婦人が來て涙を流した聖流に近い、アドニスの地に眠つてゐられる。おお、よき靈よ、死を治め、死を怖れしめないで却てそれを愛するばかりにさせるその眞理を、私に、御身の愛してゐたこの私に洩してください。

第拾參版原序

本書の十二版迄は各版に極めて些少の變化があつただけである。之に反して、此十三版は最大の注意をもつて訂正增補されたものである。四年前に本書の現れてから以後、自分は絶えず改訂につとめてゐた。本書の受けた幾多の批評が、或點に於て自分のこの仕事を容易ならしめることになつた。自分は幾分でも眞摯のこもつてゐたものは悉く讀み通した。その中に混入してゐる侮辱惡口のあるがために、それらの批評の中にあつた良い考察を、自分が利用し得なかつたことは一度も無いと、良心から自分は斷言し得ると信じてゐる。自分は何れをも衡にかけて見、何れをも檢證して見た。但、或場合に、定まりきつたこととして、また恰も承認せられた間違であるかのやうに提示された批難を、自分が是認してゐないのに訝かられる方があるかも知れぬが、それは、それらの批難を自分が知らなかつたからでは無く、それらの批難を自分が首肯す

ることの不可能であつたからである。さういふ場合には、多くは註釋に出所を附加するとか、理由を附加することをして、自分の意見を變へない所以を明かにし、或は多少編纂上に手心を加へて、抗論者の誤解を明かにしようとつとめた。極めて簡潔に、且殆ど第一史料の出所を指摘するだけに止めてあるが、自分の註釋によつて、教養ある讀者は、本文を書きあげる上に自分を指導した推理を十分諒知せられるであらう。

自分を目標として放たれたあらゆる批難を、委しく論駁するには、本書を三倍四倍にする必要があるであらう。また、既に佛蘭西語によつても十分說明せられてゐることを繰返す必要があるであらう。尙、自分の絕對に禁物としてゐる宗教上の論議をする必要もあつたであらう。また、自己のことをも語る必要があるであらう。しかし、それは決して自分の敢てしないことである。自分は眞理を求める人達に、自分の思想を提供する爲めに筆を執るのである。信仰上の立場から、自分を無知の者とし、誤つた頭腦の人とし、惡心を有つてゐる者とすることを必要とする人々に對して、その人達の意見を變更させようとする所志は自分には無いのである。若しこの意見が或敬虔な人達の休息の上に必要であるなら、自分はその人達の迷を解くことを眞實濟まないこととおもふから斷念してもよい。

それに、一旦論駁を始めると、往々歷史的批判と沒交涉の諸點にも必ず及ぶことになる。抑も自分に對して發せられた抗議は、相反した二派から來てゐる。或物は超自然をも、從つて、聖經の天啓をも信じない自由思想家によつて、或は、唯理論者も十分共鳴し得る程の廣い教義の觀念に達してゐる自由な新教の學者によつて發せられてゐる。これらの反對者と自分とは、俱に同一地盤の上に立つて居り、同一の原理から出發して居り、歷史、言語學、考古學のあらゆる問題に於て、定つた規則によて討議することができる。超自然を信じ、新約舊約の聖書の神聖を信じてゐる舊教新教の、正統派の神學者によつて成された本書の反駁——これが最も數が多い——は如何かといふと、それらは、何れも根本的に誤解を含んでゐる。若し奇蹟が多少でも現實性のあるものであつたら、自分の書物は誤謬の產物たるに過ぎない。若し福音書が天啓書であり、從つて徹頭徹尾文字通りに眞實のものであるとしたら、極めて重複し、極めて矛盾した全體を作りあげさへすればよいことにして、ハルモニストのするやうな、四書の切斷されたものを補綴することだけで滿足しなかつたことが、自分の大なる過失である。之に反して、

若し奇蹟が許しがたい事柄であるとしたら、奇蹟的物語の多い、架空事の混入せる歴史を含んでゐる書物を、不正確、誤謬、系統的偏見のある傳説と看做すのが正しいことになる。若し福音書が普通の書物であれば、希臘學者、アラビヤ學者、印度學者が各研究してゐる傳説資料を取扱ふのと同じやうに福音書を取扱ふことが正當である。批評は無疵の典籍を認めない。その第一原理は、研究資料に誤謬の可能性のあることを承認することである。懐疑主義をもつて批難されるどころで無く、その反對に、自分は溫和的批評家中に列せらるべきである。何となれば種々の關係から薄弱となつてゐる資料を一纏めにして排斥しないで、自分は微妙な近接方法(アプロクシマシヨン)によつて、歴史的の或物をそれから引出さうとする者であるからである。

かういふやうに問題を提出する其態度の中には、一々證明を要するものをアプリオリに豫想してゐる、即ち福音書によつて語られてゐる奇蹟は現實性が無いといふこと、福音書は神性の參與のあつて書かれた書物で無いといふことを豫想する不當前提が含つてゐるなどとは云はるべき筈のもので無い。この二つの否定は、われらから見れば、聖書を解釋した結果では無く、聖書研究よりも以前から存してゐるのである。それは打消すことのできない。經驗の結果で

ある。奇蹟は到底實現されない事實に屬するものである。輕信の徒だけがそれをあると想ふのであり、それを認識し得る程度の能力ある實驗者の前で明示された例は、一つだに無いのである。ある書物を作製する上に、或は何事にしろ、神の參加などといふことは、證明されることでは無い。超自然を認容するといふことだけで、人は既に科學の埒外にあるのである。それは毫も科學的で無い説明を許すのであり、天文學者、物理學者、化學者、地質學者、生理學者等の無視する説明、史學者も亦無視すべき説明を許し認めるのである。われらは馬人鷲馬の存在を拒否すると同じ理由によつて、超自然を排するのである。それは嘗てそんな物を見たことが無いといふ理由からである。自分が福音書の記載する奇蹟を排するのは、福音書作者が絶對に信用すべからざるものであることの豫め證せられてゐる爲めでは無い。自分が『福音書は傳説である、それには歴史もあるかも知れぬ、しかしながら、それにあることが悉く史實であるとは必ずしもいへない』といふのは、彼等が奇蹟を物語つてゐるからである。

それ故、正統派と超自然否定の唯理論者とが、互にかういふ問題に助力し得ることは不可能のことである。神學者の目から見れば、福音書及び聖書全體が無比の書物であり、最良の歴史書

である。それは何等の誤謬をも含んでゐないからといふのである。之に反して、唯理論者は共通の批評法則を適用すべきものと福音書をも目するのである。それらの點に於ては、コオラン及びハヂトに對するアラビヤ學者、ヴエエダ經及び佛典に對する印度學者のそれがわれらの態度である。アラビヤ學者がコオランを無謬のものとするであらうか。彼等が回教神學者と說を異にして回教起源を述べるのを見て、彼等を目して歷史を撓める者として批難するであらうか。印度學者がラリタヴイスタラ(佛陀一代記)を史傳と受取るであらうか。

反對の原則から出發して、如何して相互に啓發することができやうか。批評のあらゆる法則は檢討せられる資料に對して、唯相對的の價値のあること、その資料には誤があるかも知れぬこと、もつと優れた資料によつて改正せられるかも知れぬことを豫想する。過去がわれらに引渡した書物は、悉く人間の作であると信ずる俗學者は、本文に矛盾があるとか、或は、もつと權威のある證據によつて明白に駁せられ、乃至不條理と認められる時には、その本文を誤謬のものとするに躊躇しない。之に反して、聖書には誤謬も矛盾も無いと頭から定めてかかつてゐる正統派の人は、困難を切拔ける上に、最も亂暴な最も向見ずの手段方法を辭しない。正統派

の註解は、それ故故事つけの織物である。故事つけでも引離して見ると、眞實のこともある。若しタキツスやポリビウスに、クイリニウスやトウダスに關してルカのしてゐるやうな酷い誤謬があるとしたら、人々はタキツスや、ポリビウスの誤謬であるといふであらう。希臘拉丁の文學について、人のせぬやうな推理も、ボアソナアドやロランの夢想だにしない臆說も、聖書作者を辯護する必要のある時には根據のあるものであるとするのである。

だからして、唯理論者が正統派の神聖とする史料を一言一句遵守しないからといつて、唯理論者を以て歷史を曲げる者と批難をする時、正統派の方こそ不當な前提を置いてゐるのである。ある事柄が記されてゐるといふことから、直ちにそれが眞實であるといふことにはならぬ。マホメツトの奇蹟はイエスのそれと劣らぬ程多く書かれてゐる。しかるに、マホメツトのアラビヤ傳記は、例へばイブン、ヒシヤムのそれの如きは、慥に福音書よりも多くの史的性質を有つてゐる。ではその爲めに、われらはマホメツトの奇蹟を承認するであらうか。われらが彼から遠ざかる理由の無い時、われらは多少信賴の念をもつてイブン、ヒシヤムに從つて行ける。しかしながら、一旦信賴の全然出來無い事柄を述べてゐる際には、彼を放棄する事をわれらは毫

も苦慮しない。若し一部分架空のもので、福音書間にあるやうな互に一致の無い釋迦傳四種があるとしたら、さうして或學者がその釋迦四傳中の矛盾を無いやうに試みたところで、誰もその學者に對して本文を曲げるものだとして批難しないであらう。寧ろその學者が一致しない章句を聯絡させるやうにしたこと、調和を求め、不可能を含まない中間の物語を求めたことを至當と人々は認めるだらう。後に佛教徒がそれを欺瞞である、歴史を變改したものであると叫んだとしたら、その人は當然次のやうに答へるであらう。『此處は歴史の問題で無い。また時に本文を離れることのあるといふのは、それは本文の罪であつて、それには信ずることの不可能なことが含まつて居り、或は互に矛盾してゐるところがあるからである。』と

かういふ問題についての議論の根柢には、すべて超自然の問題がある。若し或書物の奇蹟や靈感が、現實事實であるとすれば、われらの方法は唾棄すべきものである。若し書中の奇蹟靈感が、現實性の無い信仰であるとすれば、われらの方法は善良である。しかるに、超自然の問題は、何等實驗的痕跡を世界の提供してゐない事實は信ずる餘地無しといふ理由だけからしてわれらにとつては、全然確定的に解決されてゐることである。われらが幽靈惡魔魔法占星を信

じないと同樣に、われらは奇蹟を信じない。星の人事に影響の無いことを證するために、占星學者の冗長な推理を一々反駁する必要があるであらうか。否。全然否定的な、しかし最良の直接證據と同樣に證明的な、即ち人は嘗てかやうな影響を指摘したことが無いといふ經驗だけで澤山である。

神學者が科學につくした功績を、われらは否認するやうなことを決してしない。此歴史に資料となつてゐる聖典の研究構成は、大抵正統神學者の事業であつた。批評の事業は自由神學者の事業であつた。しかしながら、神學者は到底歴史家となり得ない一事がある。歴史は本質的に無私のものである。歴史家は唯一つの懸念、即ち藝術と眞理（この二つは引離すことのできないもので、藝術は眞理の最も內的法則の秘密を握つてゐるものである）との懸念しか有つてゐない。神學者は無私になれないものが一つある。即ちその教義である。その教義を存分減少せよ。尙それでも藝術家及び批評家にとつては堪へられない重量がある。人は正統派の神學者を籠の鳥に比較することができる。あらゆる獨自の運動がその身に禁止されてゐる。自由神學者は、翼の若干の羽毛を切られた鳥である。その身を自分では支配してゐるつもりである。さうして事

實飛ばねばならなくなる時迄さうである。その時になつて始めて完全に空中の鳥で無いことを知るのである。それを我等は大膽に宣言しよう。基督教の起源に關する批評的研究は、希臘學者、アラビヤ學者、サンスクリット學者、乃至教育を與へようとも墮落させようとも想はない、また教義を辯護しようとも顚覆させようとも想はない、卽ちあらゆる神學と沒交渉な人達の方法に從つて、純粹に俗人的の精神をもつて研鑽される時、それがその最後の言葉をいふのである。

日夜これらの問題について自分が反省したことを自分は敢ていはうとするのである。その問題は理其物の本質となるもの以外の一切の偏見無しに究められなければならぬ。就中最も重要なことは、第四福音書の史的價値のそれであることは異論の無いことである。かういふ問題に關して、說を異にしない人達は、その人達が問題の難所を十分理解してゐないものと信ぜしめる餘地を與へる人達である。この福音書に關して存する意見を四種に類別することができる。次にその概略を述べよう。

第一說は、第四福音書をもつて、ゼベダイの子、使徒ヨハネによつて書かれたものと見るものである。從つてこの福音書にある事實は悉く眞實であるとするのである。作者がイエスの口をもつて言はせてゐる言葉は、現實にイエスによつて成されたものとするのである。これが正統派の說である。合理主義の批評的見地からして、それは全然信賴することのできないものである。

第二說は、第四福音書はヨハネの弟子達によつて編纂され、補綴されたものであるが、要するに使徒ヨハネの作であるとするのである。この福音書中に述べてある事實はイエスに關して直接相傳されたものである。その言葉は往々作者の解するやうにイエスの精神を表現したもので、自由な製作のものがある。かういふのがエワルドの說であり、また或點はリユツケ、ワイセ、ロイス等の說である。本書の初版に於て自分の採用したのがこの說である。

第三說は、第四福音書をもつて使徒ヨハネの作で無いとするものである。それは紀元百年頃ヨハネの弟子の或一人によつてヨハネの作とされたものである。そのイエスの言葉なるものは殆ど全然想像的のものである。しかしながら、叙述の部分は貴重な傳統を含んでゐる。その一部は使徒ヨハネから出たものである。これがワイズゼツケル、ミシエル・ニコラスの說である。今では自分の左袒する說である。

第四説は、第四福音書を以て、如何なる意味に於ても、使徒ヨハネの物としないものである。その中に載せてある事實からしても言葉からしても、それは歴史的意義のある書物で無いとするのである。それは想像の作品であり、一部は比喩的のものであり、百五十年頃に出たものであつて、作者は確實にイエスの傳を語らうとしたのでは無く、イエスについて作者の抱いてゐた思想を尊重させようとする目論見のものであつたとするのである。これが多少相違點はあるけれども、バウル、シュウエエグレル、ストラウス、ツエレル、フオルクマアル、ヒルゲンフエルド、シエンケル、ショルテン、レヴイル等の説である。

自分はこの過激黨に全然與みすることはできない。自分は常に第四福音書をもつて使徒ヨハネと現實な或關係のあるものと信じて居り、また第一世紀の終頃に書かれた物と信じてゐる。けれども、自分の最初の著述の或章句にあまり公正説に傾きすぎたところのあつたことを告白する。自分の主張した或論義の證據力は今日薄弱のやうにおもはれる。自分は最早聖ユスチヌスが使徒備忘録中に於て、共觀福音書と同程度に第四福音書を置いたとは信じてゐない。使徒ヨハネとは別人のものとして、プレスビテロス・ヨハンネスの存在したことは、今日自分にとつて、非常に問題となつてゐる。ゼベダイの子ヨハネがこの作を書いたとする説――嘗て完全に自分の認容したことの無い臆説、しかし時に其説に自分が弱味を見せた臆説――を今度は有り得ざることとして自分は排斥した。最後に僞作が使徒時代後になつて、使徒のものとされたといふ臆説を自分が排斥したのは間違であつたことを認める。ペテロの第二書――何人もその公正なものであることを理論的に主張し得る者は無い――は、無論第四福音書より重要視されることの少いものであるが、上に述べたやうな條件の下にあるものと想像されるものの一例である。固より其處に重要問題が今あるのでは無い。重要なことは、イエスの生活を叙述しようとする時、第四福音書を如何樣に取扱ふべきものであるかを知ることである。自分はこの福音書に共觀福音書のそれと平行した、時としては、それらよりも優れた價値のあるものであることを何處迄も信ずる者である。この點を詳かにすることは多大の意義あることであるから、自分は卷尾に附錄をつけたのである。第四福音書についての序論中の部分は訂正增補して置いた。

以上述べたところの結果として、本論中の或章句も改訂して置いた。第四福音書が使徒ヨハネのものであるとか、福音書の事實を目擊した者の作であるといふやうなことを意味してゐた

個條は、悉く改めて置いた。ゼベダイの子ヨハネの人格を描寫する爲めに、自分はマルコのポアネルジュや默示錄の幻覺者を聯想し、愛の福音書を書いた溫情のこもつてゐる神祕家を聯想しなかつた。自分は第四福音書の供給する或詳細の事實にはさう信賴しない。この福音書中のイエスの言葉を限定して藉りたことも、今度は一層少いものになつた。聖靈の約束については、自分は以前あまりにヨハネ――と稱せられてゐる――に賴りすぎてゐた。同樣に、自分は最早イエスの死んだ日について、共觀福音書と矛盾のある個所に關して、第四福音書の方が正しいといふことをも斷言しない。之に反して、最後の晩餐の個所では、自分は自說を固執する。聖餐式の制度をイエスの最後の夜會に持つて來てゐる共觀福音書の話は、半分奇蹟に相當するやうな虛構性を含んでゐるやうにおもはれる。自分の意見によれば、其處には記憶の空映に基する虛構の文章があるやうである。

共觀福音書の批判には根柢から改訂したところは無い。或點、殊にルカに關するところのある個所に就いては修補し明確にした。フェニキヤ研究の使命の爲めに自分の成した、バアルベクにあるツエノドオル碑銘の研究が、リザニアスに關して、福音書作者に巧妙な批評家のさう想つてゐる程重大の誤謬無きことを信ぜしめるやうになつた。之に反して、クイリニウスに關しては、モムゼン氏の最近の記錄が問題を第三福音書の不利の狀態にして解決した。マルコが共觀福音書的叙事の原始的典型であり、最も權威のある聖典であると、益々自分に想はれるやうになつた。

經外書に關する章は敷衍して置いた。チエリアニ氏の公にした重要な史料が有益であつた。エノク書については大に自分は躊躇した。自分はワイセ、フオルクマアル、グレツ等のやうに、この書をイエス以後のものとする說を排した。その書の重要な部分、卽ち三十七章より七十一章に亘る部分について、この部分をイエス以後と看做すヒルゲンフエルド、コラニの所論とそれを以前と看做すホフマン、デイルマン、ケストリン、エワルド、リユツケ、ワイズゼツケル等の所說と、その何れにも自分を決定しかねる。如何にもこの重要な著述の希臘版を發見することが望ましいことである。何故かこの希望が徒勞で無いと自分の信ずることが强いのである。要するに、前述の各章から取出した歸納的結論には、自分は疑問の記號を附してゐる。之に反して、共觀福音書の終の章中にあるイエスの言葉なるものと、エノクのものとなつてゐる

默示錄の言葉との間にある奇異な關係、それは聖バルナバのものとされてゐる書簡の完全な希臘文の發見されたことによつて明白になつた關係であつて、ワイズゼッケル氏の十分指摘した關係を自分も示して置いた。フオルクマアル氏によつて、エスドラ第四書について獲られた或結果、さうして、それは殆どエワルド氏のそれと一致してゐる結果を、同樣に考慮の中に加へた。新たにタルムッドから若干の引用を採用した。エッセネ主義に與へた地位は稍擴大することにした。

參考書類を排斥する自分の決意が往々誤解された。自分は獨逸の學問全體に於て大家に隨分負ふところあることを、かなり大聲に宣言して、沈默の爲めに忘恩を課せられないやうにしたつもりである。參考書の列擧は、それが完全につくされてゐて始めて有益なものである。しかるに、福音書批判の方面に於ける獨逸の頭腦は、甚だ活動的であつて、若し本書で論じた問題に觸れてゐる述作を悉く列擧しなければならぬといふことになると、註釋の範圍を三倍にもしなければならず、自分の書物の性質を變へることになつたかも知れない。人は一時にすべてを成すことはできない。それ故自分は第一史料の引用だけを許すといふ法則を主としたのである。

それでも其數が非常に增加した。其他これらの研究に通じてゐない讀者の便宜の爲めに、佛蘭西語で書いてあり、自分の省かねばならなかつた微細の點を發見し得るやうな書物の簡單な表を引續き作製した。それらの著述の多くは、自分の思想と遠いものであるが、しかし、何れも教養ある人士をして反省せしめ、われらの議論に通曉し得られる性質のものである。

物語の筋は殆ど變更して無い。あまり共產主義的精神についての强い言葉は柔かくなつた。イエスと關係のあつた人々の中で、福音書には出てゐないが、信ずべき證據によつてわれらに知れてゐる若干の人を取入れた。ペテロに關するものは變へてゐない。自分は尙アルパイの子レヴイ、及び使徒マタイとの關係についての別箇の臆說を採用した。ラザロに就いては、ルカ傳の譬喩の善良な貧民はヨハネ傳中の復活者と同一人物であるとするストラウス、バウル、ツエレル、ショルテン等の學說の方に自分は遲疑すること無く與みする。それにも拘らず、癇病のシモンと彼とを結合するところに多少の現實性を何故自分が認めるかを人々は本論に入つて認めるであらう。尙イエス臨終の日に近い頃のイエスの言葉——一世紀に擴がつてゐた述作から引用したものらしい——なるものに關してはストラウス氏の臆說を採用した。イエスの公

生活の期間についての本文の議論は一層明確なものとなつた。ペトフアアゲ、ダルマヌタの地理については修正した。ゴルゴタ問題はヴオオギユエ氏の勞作によつて再論した。植物史に極めて精通した某氏によつて、千八百年の昔にガリラヤの果樹園にあつた植物と、其後になつて始めて移植されたものとを區別する方法を教示して貰つた。尙十字架に刑せられた者の飲料について、若干の注意を與へてくれた人があつた。自分はそれを記した。概してイエスの死に近い時の叙述中には、あまり史實的と見られさうな言葉づかひを緩和して置いた。此處にこそストラウス氏の親切な解釋が最も多く適用されるところである。教義的信條的意向が一々指摘される。

既に言つたことを反覆するが、若し人々がイエスの生活を叙して、唯確實な事だけに限るとしたら、僅か數行に止まるべきものであらう。彼は生存した。彼はガリラヤ、ナザレの人であつた。彼は魅力のある說教を行ひ、その弟子達の記憶に深く刻記される訓言を遺した人である。彼の弟子の主要な二人はゼベダイの子ヨハネとケパスであつた。彼は正統猶太人の憎惡を排斥し、猶太人は當時猶太の代官であつたポンチウス・ピラツスの手を藉りて彼を死刑に處することを敢てした。彼は町の門外で磔刑になつた。暫く經てから人々は彼が復活したものと信じた。以上は、福音書が無いにしても、また虛僞のものであつても、聖パウロの明白眞實な書信、希伯來書、默示錄、其他衆人の認容する他の史料などのやうな、公正な、年月にも疑の無い史料によつて、確實にわれらの知り得る事柄である。これ以外には疑問がある。彼の家族は何うであつたか。殊に彼の死後主要な役目をつとめる『主の兄弟』ヤコブと彼との關係は何うであつたか。彼は實際にバプテズマのヨハネと關係があつたか。また彼の最も有名な弟子達は彼の下に來る迄にヨハネ派の者であつたか。彼の救世主的思想は如何なるものであつたか。彼は自己を救世主（メシヤ）と自認してゐたか。彼の天啓思想は如何なるものであつたか。彼は雲間に人の子となつて現れると信じたか。彼は奇蹟を行ふと想像してゐたか。生前から人が彼をさう目してゐたか。彼の所謂御一代記は彼の周圍で始まり、彼がそれを知つてゐたか。神の王國に異邦人を許容する彼の思想は如何なるものであつたか。彼の內的性格は如何なるものであつたか。彼はヤコブのやうに純粹な猶太人であつたか。それとも後の彼の教會の最も活潑な部分がさうであつたやうに、猶太教と絕緣してゐたか。彼の思想の發達は如何なる順序であつたか。歷史に唯疑無き物のみ

を要求する人々は、すべてそれらについて沈默を守るべきである。これらの問題に對して、福音書は不確實な證人である。何となれば、それらは往々二個の反對せる問題の議論を供給して居り、編者の教義的見解からイエスの面目が變更されてゐるからである。自分はかういふ際に、推測として提出するといふ條件で、それらを推測することが許されるものと信じてゐる。史料が史實的で無い時には確實性を與へない。しかしながら、何物かをそれが與へるものである。盲目的にそれに追從してはならぬ。不當な侮蔑を加へてその證據を無視すべきでは無い。それらが含んでゐる物を、到底絶對的確實に發見したと主張するのでは無く、唯それを推察するやうに努めなければならぬ。

不思議のことには、殆どすべてのこれらの點に關して、最も懷疑的な解決を提供するのが自由主義の神學派であることである。基督教の聰明な辯護は、そこで發生期の歴史的事情中に空虚なところを設けるのが有利であるとおもふやうになつた。昔基督教辯護の根柢であつた奇蹟や救世主の豫言などが、却て今日障礙となつた。人々はそれらを遠ざけようとしてゐる。この神學の黨派——その中から多くの優秀な批評家や高貴な思想家を指摘することができる——のいふところによると、イエスは何等奇蹟の主張をしたことが無いのである。また彼はメシヤを信じなかつたのである。人々は終局の大事變に關してイエスのものとしてゐる天啓的思想の言葉を彼自身は夢にも考へなかつたのである。極めて善良な傳統主義者であり、イエスの言葉を拾集するに熱心であつたパピアスが、熱心な千年期説信奉者であつたとしたところで、また福音書作者中最も古く最も權威のあつたマルコが、飽く迄奇蹟に熱心であつたにしたところで、それは關せず焉である。イエスの任務が、何うであつたかをいふのすら大變煩いことであるくらゐに、人々はその任務を輕減してゐる。彼が死刑に處せられたことも、運がよくて救世主的天啓的運動の領袖となつたからであるといふやうな臆説になつて、さう存在理由も無いものになつてゐる。イエスが磔刑になつたのは、精神的訓戒の爲めか、山上の説教の爲めかといふに、決してさうでは無い。それらの金言は疾くの昔から猶太會堂（シナゴグ）の流行語であつた。それを繰返して言つたからといつて、決して誰をも死刑に處するものでは無かつた。イエスが死刑に處せられたのは、彼がそれ以上の何かを言つたからであるといふことになつた。これらの問題に沒頭した或學者が最近に自分に書を送つて次のやうに言つた。「昔は何とかしてイエスの神なること

を證明する必要ありしと同樣に、今日の新教神學派にとりては、啻に彼の人間に過ぎざることのみならず、常に彼自身然か自認せし旨を證明することを要するものに御座候。人々は彼を以つて常識の人、傑出したる實行家として紹介せむと切に希望し居るものに御座候。近代神學の思想感情によつて何人も彼を改造致し居候。小生は最早そは歴史的眞理を是とする程度にては無く、その本質的一面を閑却するものなることを貴下と倶に信じ申候。』

かういふ傾向は、既に再三論理的に基督教の中に生じたものである。マルキオンは何を要求したか。二世紀のノスチツク教徒は何を要求したか。傳記の中の人間的事實の感心しない外的狀況を排斥することを欲したのである。バウル、ストラウスも、同じやうな哲學的欲求に服從したのである。人類によつて發達する神性のエオンは、逸話的事件や個人の私的生活と浚交渉のものである。ショルテンやシエンケルは慥に歴史的現實のイエスを狙つてゐるが、しかしながら彼等のイエスは救世主でも無ければ、豫言者でも無く、猶太人でも無い。如何なることを彼が希望してゐたかも解らず、彼の生活も彼の死も理解できないのである。彼等のイエスは獨特のエオンであり、觸れることも感ずることもできない存在である。しかしながら、純粹の歴史はさういふ存在を知らぬのである。純粹の歴史はその建造物を二種の與件、或はいはゞ二要素をもつてしなければならぬ。即ち第一には與へられたる一國一時代の一般精神狀態、第二には一般的原因と結合して事變の進行を決定する個人的事件である。個人的事件によつて歴史を説明することは、純哲學的原理によつてそれを説明するのと同樣に間違である。雙方の説明が相輔け相補はなければならぬ。イエス及び使徒の歴史は、何よりも第一に思想感情の一大混融で無ければならぬ。しかも、それで十分といふ譯には行かぬ。幾多の偶然不思議鎖事が、思想及び感情に混じてゐる。今日、それらの偶然不思議鎖事の精確な物語を描くことは不可能である。傳説がその點に關して傳へることは、眞もあれば、眞で無いものもある。最良の法は出來るだけ原始的談話に賴つて、不可能を避け、隨所に疑を存し、推測として事の成行に幾通りのものをも提出することである。聖パウロの改宗が、使徒行傳に記されてゐる通りに起つたことであると自分には十分斷言ができない。しかしながら、さう甚しく差異の無い徑路をもつて行はれたものであらう。といふのは、聖パウロが自身で復活したイエスの幻を見たことを語つて居り、それが彼の生活に全然新しい方向を與へたものであるからである。聖靈降臨節に聖靈が下降し

たといふ使徒行傳の物語は、さう史實的のものであると斷言することはできない。けれども、火の洗禮について普及してゐた思想が、使徒等の小社會に、幻覺の或場面のあつたことを自分に首肯させる。その場面では、シナイ山に於けるやうに電火が或役を演じたものである。復活したイエスの幻影も、偶然の原因として、既に囚はれた想像によつて解釋されてゐた猛烈な突發の事情があつたのである。

自由神學者が、この種の說明に慊らないのは、取も直さず、彼等が基督敎を他の宗敎運動に共通な法則の下に從屬させることを欲しないからである。また、それは、多分彼等が十分精神生活の理論を知らないからである。かういふ見當違ひが大抵の宗敎運動に大役をつとめてゐる。それどころか、新敎の篤信者や、モルモン宗や、舊敎の修道院などの如き小さい宗敎團體に於ては、見當違ひが常態であるとさへ言ひ得るのである。かういふ熱狂的社會には、感激した精神が、神の意志を實見する何かの事件からして、多くの改宗が行はれるのである。その事件には、何か知ら兒戲に類したものがあるのであるが、信者はそれを隱蔽してゐる。それが天と彼等との間の秘密である。偶然は、冷靜な者やぼんやりした者にとつては何でも無いが、神がかりの精神の者にとつては神聖な證徵である。聖パオロやロヨラのイグナチウスを根柢から改造し、或は彼等の活動に新しい應用を與へたものは、物質的事件であると言つたら、それは確に正鵠を獲てゐない言葉である。雷擊を準備したものは、强烈な精神の內的運動である。しかし、その雷擊のあるものは外的原因によつて決定されたものである。すべてそれらの現象は、つまりわれらのとは異つた精神狀態に還元されるものである。古代人は、前夜見た夢や、彼等の第一に目に觸れた偶然の物から得た歸納や、耳にしたと信ずる物音などによつて、行爲の大部分を決定したものである。世界の運命を決したものに、鳥の飛翔といふこともあれば、氣流もあり、柘榴の實もある。誠實完全たらむとするには、それをも言はなければならぬ。さうして普通な程度の確實な資料がこの種の事件を語るのであれば、それを默殺しないやうに注意しなければならぬ。歷史には、殆ど確實な枝葉事といふものは無い。しかしながら、その枝葉事が常に多少の意義を有してゐる。歷史家の才能は、半信半疑のものを集めて眞實の一體を作りあげるところにある。

それ故、舊派の唯理論者ポオリュスの弟子となること無くして、個的事件にも史中の地位を與

へなければならぬ。ボオリュスは、できるだけ奇蹟を尠くし、傳說の聖話を取扱ふことを避け、すべてを自然らしく說明しようとして聖話を解した神學者である。ボオリュスはそれを以て聖書の權威を維持し、聖經作者の眞意に徹しようと主張したのである。自分は俗的批評家である。一切超自然的の物語は、文字通りに眞實のものでは無いと自分は信じてゐる。百の超自然談の中に、八十迄は俗間の想像から出たものが集つて生れたものであると自分は想つてゐる。福音書や使徒行傳によつて物語られてゐる、超自然的事實の集りの中から、自分は五つ六つを捉へて如何なる理由で錯覺の生じ得たかを示さうと試みるのである。常に體系的に行かうとする神學者は、唯一の說明を聖書に徹頭徹尾適用したがるのである。批評家は、すべての說明を試むべきものと信じ、或は順次にその一々の可能性を示さなければならぬものと信ずる。甲の說明のわれらの趣味に合はぬところのあるといふことは、それを排斥する一理由には毫もならぬのである。世界は地獄的であると同時に、神のやうな喜劇であり、善惡醜美が神秘な目的を成就する爲めに、與へられた列になつて行進し、天才のある指揮者に指圖せられる奇怪な輪舞である。若し人が歷史を讀んで興味と反感と悲哀と慰安とを順次に感じないやうであつたら、その

歷史は歷史で無い。

歷史の第一の任務は、その物語る事實の經過する舞臺を十分に描くことである。しかるに宗教的起源の歷史は、婦人小兒熱狂迷誤の頭腦の人の世界にわれらを運び行くのである。それらの事實を實證的精神の人の所に持つて行けば、それは不條理不可解のものである。それ故英國のやうに理解鈍重な國に於ては、それを理解することの全くできないやうなことになるのである。昔甚だ有名であつた議論、卽ち復活に關するシャロック或はギルバアト・ウエストのそれや、聖パウロの改宗に關するリッテルトンのそれにある過失は、それは推理で無く、推理は確實を以て勝つてゐる。其過失は舞臺の異なるところを批判する上の正確か否かの點である。われらの明白に知つてゐるあらゆる宗教的企圖は、崇高と奇怪との混合を示してゐる。殘存せる弟子によつて正直に公けにされたサンシモン主義の創始時代の調書を讀んで見ると、唾棄すべき職務や下劣な誇張語と並んで、感激の柔かな、最初の光によつて啓けた心からの率直な告白をもつて民衆の男女が舞臺に上つて來ると、何といふ魅力、何といふ誠實さであらう。奇異な兒戲に類する事柄に基礎を置いてゐるしかも永續的の立派な事實の存在する例は、一二で無

い。火災と火災の原因との間に決して比例を索ねるべきものでは無い。サレツトの信仰熱は現代の大宗教的事實の一である。シャルトルやラオンの敬すべき伽藍は、同種類の幻覺以上に聳えてゐる。フエエト・デイユウは、常に小さな缺隙のある滿月を、自己の口演中に見ると信じたリエジュの修道尼の錯覺が原因である。欺瞞者を中心として眞摯の溢れる運動の起つた例も幾らも列擧することができる。虚僞といふことは明白であるが、アンチオキヤで神聖な槍を發見したことが十字軍の運命を決定したのである。起源の汚らはしいモルモン宗は勇氣と献身とを鼓吹した。ドリユウズの宗教は、頭を混亂させるやうな不條理の網の上に基礎を置いてゐるが、それでも信徒がある。世界史中の第二の大事件たる回教も、アミナの子が癲癇で無かつたとしたら、存在しなかつたかも知れぬ。溫和清淨のアッシジオのフランシスコも、兄弟のエリヤがゐなかつたら、成功しなかつたであらう。人類は、最も純潔な者が、最も不純な助手の協力を必要とするくらゐに、精神の薄弱なものである。

われらよりずつと高く、またずつと低い、これらの異常な事實を批判する際に、あれらの冷靜明白な頭腦の推理、質實な差別の法を適用することは避けるべきである。或者はイエスをもつて賢人とし、或者は道德家とし、或は聖者としようとおもふであらう、しかし、彼は毫もそんな人では無かつた。彼は一個の魅力ある人であつた。われらの現在をもつて過去のものとしてはならぬ。亞細亞が歐羅巴であるとおもつてはならぬ。例へば、西歐に於ては、狂人は常規以外の人である。人々は狂人を常規に復せしめようとして苦める昔の瘋癲病院の怖しい取扱は煩鎖哲學的デカルト風の論理の結果であつた。東洋に於ては、狂人は特權の所有者である。彼は何人にも逮捕せられること無く、最高會議に出席し、人々はその言葉を聽き、それと相談する。人々は狂人を以て神に最も近いものと信ずるのである。何となれば、その個人的理性は消失して居り、神の理性に參與してゐるものと人々が認めるからである。皮肉な嘲笑をもつて、推理のあらゆる缺點を指摘する精神は亞細亞に存在しない。回教の傑出した一人物が自分に次の如く語つたことがある。數年前メヂナのマホメツトの墓を緊急に修繕しなければならなくなつたことがある。その時泥工を募集し、且、この怖しい場所に降りて行く者は、昇る時首を斬られるかも知れぬと告げた。其中の一人進んで其選に當り、墓穴に降りて修繕を了し、さうして首を斬られた。『人々はこの場所について一定の想像をしてゐる。それを異つた風に說明する

者があつてはならぬのであるから、このことは必要であつた」とその人が自分に説明した。

混亂せる意識には常識の明確が無いであらう。然るに、有力な基礎を置く者は常に混亂せる意識の人だけである。自分は繪具が自然に於けるが如く融けてゐる繪畫――それは人類卽ち大小共存の姿に類似した、さうして神の本能が幾多の偏奇を通じて確實にその道を描いて行くところの見える――を描かうとおもつたのである。若しその繪畫に陰影が無かつたら、それが間違つてゐる證據である。その資料の狀態では、如何なる場合には錯覺が自己意識をするかをいふことができない。その言ひ得る全部は、時にその錯覺がさうであつたといふことである。人は幾年と無く、行詰りも無く、世間から追窮せられることも無く、妖術者として通して行けるものでは無い。生前に傳說を有つてゐるものは、その傳說によつて强制せられるものである。最初は無邪氣、輕信、絕對的無我の心で始めるが、終にはあらゆる迷惑に會ふことになる。さうして、神力を無理に支持しようとして、絕望的方法を講じ、その窮境から脫するのである。停滯すると、卽ち神がその姿を現すのが晩い時は、神の事業を遺棄してしまはねばならぬかとおもふやうになる。ジヤンヌ・ダルクはその時々の要求に應じて、自己の聲を再三告げさせはし

なかつたか。彼がシヤルル七世に告げた秘密な天啓の話が、若し多少現實性のあることであるならば、否定し難いことは、彼女が內密に聽いたことを超自然的直觀の結果であるとして提出したのであつたに相違無い。何日かこの種の假定に門戶を多少なりと開かぬ宗敎史の叙述があるとしたら、そのことだけからして完全で無いものとして咎められるべきものである。

だからして事情の眞實なもの、プロバブルなもの、ポシブルなもの、何れもそれぞれプロバビリテの色合をもつて、自分の叙述中にその地位を占むべきものである。かやうな歷史に於ては、事實あつた事柄ばかりで無く、眞實起つたらしい事柄をも述べなければならぬ。自分が問題を取扱ふ時の公平は、不快な推測すら回避することをさせなかつた。何となれば、現實に行はれた事件には、甚しく不快なものも必ずあつたに相違無いからである。自分は敢然として一々同一の方法を適用した。自分は史料の暗示した好い印象を言つた。自分は惡いものを默殺して行くわけには行かなかつた。自分は自分の書物が價値を有つてゐることを欲した。人々が或程度の欺瞞を宗敎史には不可分離の一要素と目するやうになつた曉にも、自分は價値のあることを欲した。その主人公を美しく魅力(疑も無く彼はさうであつた)あるものにする必要があつ

た。今日では、不都合なものとされるやうな行爲のあつたにも拘らず、敢て自分はさうしたのである。人は活々した人間的のポシブルな物語を作りあげようとしたことで自分を賞讃した。若し基督教の起源を清淨無垢のものとして示したら、自分の物語がその賞讃に値したであらうか。それは奇蹟の最大なものを認めることになつたであらう。その結果としては、最も感興の無い描寫になつたかも知れない。缺點が無いからそれを發明したといふのでは無い。少くも史料の一々をして愉快な或は不調和な音調を生ぜしめる必要があつた。若しゲエテが生きてゐたら、彼は自分のこの配慮を賞讃してくれたであらう。あの偉人は全然神のやうな人物描寫を自分に赦さなかつたであらう。彼は反感の趣をそれに欲したであらう。何となれば、慥に現實に於ては、實見することが許されれば、われらには不快を覺えしめるやうな事實があつたのであるからである。

しかしながら、使徒の歴史にも同樣の困難がある。その歴史は獨特の美しさがある。けれども、拒否することのできない聖パウロの文書によつて證明せられてゐるグロソラリイ程不快なものは無い。自由主義の神學者は、イエスの肉體の紛失したことが復活信仰の基礎となる一つであつたことを認めてゐる。當時の基督教の信仰が二重のものであつたといふこと、その信仰の一半が他の一半の幻想を作つたのであるといふ意味で無いとしたら、それは何を意味するものであらうか。若し同一の弟子等が死體を奪ひ去り、町に呼んで『彼は復活せり』とふれ廻つたのであつたら、その欺瞞は特筆すべきものであらう。しかしながら、その二つの事をしたのは疑も無く同一人では無かつたのであらう。奇蹟信仰が信用を博する爲めには、誰か最初に噂を立てる責任を負はなければならぬ。けれども、普通それは主要な俳優のすることでは無い。後者の役目は、他人が彼に對して成す評判に抗辯しないだけにすることである。假に抗辯したところで、それは單に損失に過ぎないであらう。俗論の方が彼よりも有力であらう。サレツトの奇蹟の時に、人は明かに技巧であるとおもつた。しかしながら、それが宗教に利のあることだといふ確信ですべてに打勝つたのである。多數に分擔される欺瞞は、無意識化し、或は欺瞞で無くなつて、誤解となるものである。その場合に、誰も熟慮して欺くことをしない。誰も何心無く欺くのである。昔一個の傳說には、欺かれる者と欺く者とが豫想されてゐた。われらの見るところでは、傳說作者は、何れも欺かれる人と欺く人とを兼ねてゐる。他の言葉でいへば、一

個の奇蹟は、三つの條件を豫想してゐるのである。第一には衆人の輕信、第二には或者の阿諛第三には原作者の暗默の同意である。十八世紀の粗暴な解釋に對する反動から原因の無い結果を含むやうな臆說に陷ることは避けよう。傳說は獨りで生れるもので無い。人が助けてそれを生ませるのである。傳說のその支持點は往々極めて輕微なものである。民衆の想像が雪達摩のやうにするのである。けれども、それには最初の中核がある。イエスの二つの系圖を作つた二人は、その表の大して公正なもので無いことを十分よく知つてゐた。經外書、所謂ダニエルの默示錄、エノクの默示錄、エスドラの默示錄は、非常に確信のある人から出てゐる。しかるにそれらの作者は十分自分達が、ダニエル、エノク、エスドラで無いことを知つてゐた。テクラの小說を作つた亞細亞の僧侶は、パウロを愛するあまり作つたのであると公言した。慥に第一流の人物であつた第四福音書の作者についても、同樣にいはなければならぬ。宗教史の幻想を一方の門から驅逐すると、それは他の門から歸つて來る。要するに、過去に於て全然立派な態度を以て出來上つた大事實なるものを、われらは殆ど指摘しかねるのである。佛蘭西が不義の幾世紀かによつて建設されたからと言つて、われらは佛蘭西人たることを廢めるであらうか。大革命が幾多の罪惡を犯したからと言つて、われらは大革命の恩澤を利用することを拒むであらうか。若しカペエ家が英國のそれのやうな善良な秩序的段階を設けることに成功してゐたら、癩治療に關してわれらは同家を嘲笑するであらうか。

科學のみが純粹である。何となれば、科學は實用と無關係であるからである。それは人を感動させない。プロパカンダはそれを目標としない。その義務は證明することであつて、說伏せ改宗させることでは無い。定理を發見した者は、それを了解し得る者の爲めに證明を公けにする。彼は敎壇に上らず、身振をしない。彼は眞理を認め得ない人々にそれを採用させる爲めに、辯舌の技巧を弄しない。慥にその熱心は確信をもつてゐる。しかしながら、それは無邪氣な信念である。それは學者の深遠な反省的の確信では無い。無學者は惡い道理にのみ讓步する。若しラプラアスがその宇宙體系に、群衆を味方として引入れようとするのであつたら、彼は數學的證明に止まることはできなかつたであらう。リツトレ氏はその師と仰ぐ人の生活を叙述する時、この人を無愛相な人とするやうなことをも一つも默殺しない程度迄眞摯を進めることができた。それは宗敎史に於て前例の無いことである。唯科學が純粹の眞理を追究する。唯科學が

眞理の十分な理由を與へ、確信の手段を使用する時嚴正な批評を運ぶ。そこが疑も無く、今日迄科學が民衆の上に影響の無かつた所以である。恐らく將來に於て、われらの希望する通り民衆が教育せられた曉には、民衆も、演繹の十分完全な證明に對してで無ければ讓歩しないことになる。しかしながら、過去の偉人をこの原理によつて批判することは、公平を缺くことになるであらう。無能力であることを諦められない、その弱點とともに有の儘に人類を受取る性質の者が幾らもある。多くの大事は、虚僞と暴力とを缺いた時成就されなかつたのである。若し明日にも、化身の理想が、人々を統治する爲めに臨み來るとしたら、その理想は、欺かれることを欲する愚劣、驅せられることを欲する惡意と、互に對面することになるであらう。唯批難の無き者は、眞を發見することのみを志し、それを勝たせよう、それを應用しようとする念の無い觀照の人々であらう。

道德は歴史では無い。描寫叙述は賞讃では無い。蛹の變態を記述する博物學者は、蛹を非難せず、賞讃しない。蛹が衣を脱ぐからと言つて忘恩をもつと課することをしない。それが翅を作つたからと言つて、それを危險としない。それが空中を飛ぶことを欲するからと言つて、狂をもつてそれを咎めない。人は眞と美との熱烈な友人となると同時に、それにも拘らず、民衆の無邪氣さに對して寛容な態度をも示し居るのである。理想のみが曇無きものである。われらの幸福は、われらの父祖に涙の瀧と血の波とを費させたものである。敬虔な人々が、己等を活かせる心の慰安を祭壇の下で味ふ爲めには、傲然たる幾世紀、教會政策の神祕、鐵竿、刑臺を必要としたのである。あらゆる偉大な制度に負ふ尊敬は、歴史の誠實に何等犧牲を要求しない。昔は善良な佛蘭西人たらむが爲めには、クロヴイスの鳩、サンドニの寶藏の民族的古物、赤旗の功德、ジヤンヌ・ダルクの神の使命を信じなければならなかつた。佛蘭西が國民としての第一位であり、佛蘭西王の位があらゆる王位の上にあること、神がその王冠の爲めに特別の愛をもち、常にそれを保護することを志してゐるものと信じなければならなかつた。今日われらは、神が何れの王國、何れの帝國、何れの共和國をも平等に保護してゐることを知つてゐる。われらは佛蘭西の諸王があはれな人であつたことを知つてゐる。われらは外國から來た多くの物を憚るところ無く賞讃する。その爲めにわれらは劣つた佛蘭西人であらうか。之に反して、われらは優つた愛國者であると言ひ得るのである。何となれば、われらの缺點に對して盲目とな

らないで、われらはそれを匡正しようとして居り、外國を蔑視することの代りにその善きところを眞似ようとしてゐるからである。われらは齊しく基督敎徒である。不謹愼に中世の王權を輕蔑し、ルイ十四世、大革命、帝政を侮蔑する言葉を吐く者は、惡趣味の行爲を成す者である。基督敎及び自己の屬してゐる敎會に毒舌を弄する者は、忘恩の罪を犯す者である。しかしながら、恩に感謝することで眞理に眼を閉ぢる迄に至つてはならぬ。人間の中にある矛盾の要求を滿足させることができなかつたといふことを忠告しても、政府に對して敬意を失ふものでは無い。科學が超自然の信仰に對して擧げてゐる怖しい異論から、宗敎も免れることができないことを言つたからといつて、宗敎に對して非禮では無い。或社會的要求に應じて他の要求に應じない政府は、其政府を建設し其力となつたものと同じ根據によつて顚覆する。理性の要求を無視して、心の要求に應ずる宗敎は、今日迄何等の力と雖も理性を窒息せしめ得なかつたといふ理由からして、次いで倒壞するものである。

理性が宗敎を絕息させる日には、また理性に禍が來るであらう。われらの遊星は、惟ふに或深遠な事業に努めてゐるのである。その或部分が無用のものであるなどと危險なことをいふべ

きでは無い。表面他の作用を妨げるばかりであるから此機關を廢すべしといつてはならぬ。無謬の本能を動物に授けた自然は、人類に何等誤りのものを加へてはゐない。その器官をもつて、われらは大膽にその運命の結論をいふことができる。Est Deus in nobis 神はわれらの中にあり。それらが無限を證明し、無限を決定し、無限を化身としようとする時、誤謬に陷る宗敎も、無限を斷定する時眞實のものであると敢て自分は主張しよう。この斷定に混ずる最大の誤謬も、宗敎の宣言する眞理に比すれば、何物でも無い。若し心の宗敎を行へば、單純中の單純なる者も、事物の現實性について、偶然と有限とによつてすべてを解釋し得ると信ずる物質主義者よりも知識の明かな人間である。

序論

主として本書の史料について

『基督教起源』の歴史は、この宗教の最初の起源から、その存在が何人の眼にも明白顯著な公けの事實となる時迄の、はつきりしない、いはば地の下にあつたやうな全期間を包含すべきものであらう。かやうな歴史は四篇から成立つであらう。今日自分が世に問ふその第一篇は、この新宗教の出發點となつた事實そのものを取扱ふ。それは全然創始者の崇高な人格によつてみたされてゐる。第二篇は、使徒及びその直弟子、もつとよくいへば、基督教の最初二代の間の宗教思想が蒙つた革命について論ずる。自分は、それをイエスの最後の友が死んで、新約の全體がわれらの現に讀んでゐる形に定つた時代の、紀元百年頃に止めるであらう。第三篇はアントニウス帝系の下に就ての基督教の狀態を叙述する。此時期には、帝國に對して殆ど不斷の戰が行はれ、且發展するのを見るであらう。その帝國は、此時代に最も完全な程度の行政に達し、

哲學者が政治を握り、他方執念く帝國を否定し、絶えず帝國を侵蝕し、祕密な神政的社會を形成してゐる發生期の宗教を抑壓する。その書は第二世紀全部を含むであらう。最後の第四篇はシリヤの諸皇帝以後、基督教の成した決定的進歩を示すであらう。此時期には、アントニウス帝系の賢明な施設が崩壞し、古代文明の廢頽が收拾すべからざるものとなり、基督教はその廢頽を利用し、シリヤが西歐全部を征服し、イエスが亞細亞の神々及び神化された聖人達を伴つて、哲學と單純な行政的國家では不十分になつてゐる社會を占領するのを見るであらう。その時が、地中海沿岸に據つてゐる諸人種の諸宗教が根本的變化を受ける時であり、東洋的宗教が到るところで優越の地位を占め、分派の多い教會となつた基督教が、全然千年期說の空想を忘れ、猶太教との最後の連鎖を斷ち、全然希臘羅馬の世界に移る時である。既に中天の下に現れた、第三世紀の紛爭と文學的勞作とは、事實一般的の特色となつて現れてゐる。自分は尙、帝國が國家內の全地位を、宗教的組合に拒否する舊い原則に立歸らうとしての最後の努力であつた、第四世紀當初の迫害を概略述べるであらう。最後に、コンスタンチヌス皇帝の下で、任務を顚倒し、最も自由で最も自發的な宗教運動をもつて、認定せられた宗教——國家に隸屬し軛て

國家を迫害することになる――となる政治上の變化を自分は豫感することに止めるであらう。

果して、自分はこれ程廣大な計畫を成就するだけの十分の生命と氣力とを有つか否かを自分ながら知らない。若しイエスの生活を書いた後に、思ふ通りに、使徒の歴史、イエス死後數週間の基督教の信仰狀態、復活傳說の由來、エルサレムの教會の最初の行爲、聖パウロの生活、ネロ時代の危機、默示錄の出現、エルサレムの頽廢、バタニヤの希伯來的基督教の建設、福音書の編纂、小亞細亞の大派の起源等を叙述することができたら、それで自分は滿足である。この奇蹟的な最初の世紀に比較せられると、あらゆるものが光彩を失ふ。史上に稀な奇怪なことであるが、われらは八十年から百五十年に至る間よりも、紀元五十年から七十五年迄の基督教の世界に起つた事柄の方をよりよく認めることができるのである。

この著述のために採つた計畫では、議論のある諸點に關して批評的の長い考察を本文中に入れることができなかつた。その代りに常に註釋を附し、讀者のために、出所について本文の諸論を確められるやうにして置いた。その註釋としては嚴密に原書の引用に止めて置いた。つまり、斷言や推測の由つて出る章句を引いたといふ意味である。この種の研究に慣れてゐない人々にとつては別個の叙述が必要であることを知つてゐる。しかしながら、自分は出來上つたものの、しかも十分出來上つてゐるものを作り直す習慣を有つてゐない。佛語で書いた書物だけを指摘するが、次の著述を手に入れられる人々、その書物――大部分は立派な書物である――を參考とされる人々は、自分があまり簡略にした多くの諸點がその中に解釋されてゐることを發見されるであらう。

アルベエル・レギイル著――聖マタイ福音書の批評的研究
ロイス著――使徒時代基督教神學史
同――基督教會内の聖典史
ミシエル・ニコラス著――基督前二世紀間の猶太の宗教學說
同――聖書の批評的研究
ストラウス著――イエス傳(譯)
同――イエス新傳(譯)
ギユスタアヴ・デイクタアル著――福音書

コラニ著――基督と當時のメシヤ信仰

スタプ著――基督教起源の史的批評的研究

ランテル・ド・リエツソル著――福音傳記研究

コラニ主幹の基督教の神學哲學評論（一八五〇――五七）並びに新神學評論（一八五八――六二）神學評論（一八六三以後）

殊に福音書の本文の詳しい批評は、殆ど完全にストラウス氏によつて成されてゐる。ストラウス氏（この人の最初の福音書編纂の所論中に誤がある。それは自分の見るところでは、その書があまりに神學方面を重視して、史的方面を輕視した過失である）が自分の多くの微細な點に指導をしてくれた動機を明かにするためには、自分の同僚リツトレ氏の立派な譯にかかる――時にはいささか穿ち過ぎたところがある――書物の常に公正な議論を見る必要がある。

古い資料には自分は一切遺漏の無かつたことを信ずる。五大叢書――その他の多くの斷片的のものは別としても――がイエス及び彼の活きてゐた時代に關して殘つてゐる。卽ち第一には福音書及び新約諸書、第二には舊約經外書と稱せられるもの、第三にはフイロンの著書、第四にはヨゼフスの著書、第五にはタルムツドである、フイロンの著書は、イエス時代に於て、宗教的大問題に專心であつた人々に發酵しつつあつた思想を、われらに敎へてくれ、評價のできない程利益を與へてくれる書物である。尤もフイロンは、イエスとはまるで別個の猶太の圈內に生活してゐた。しかし彼と同樣に、エルサレムに覇權を占めてゐたパリサイ的精神からは非常に解脫してゐた人である。フイロンは眞にイエスの長兄である。ナザレの豫言者が活動の頂上にあつた時、彼は六十二歲であつた。さうして彼は少くも十年イエスより後まで生きてゐたのである。生活の偶然が彼をガリラヤに導かなかつたことは、何たる殘念なことであらう。さうであつたら、彼がどんなことをわれらに敎へたことであらう。

ヨゼフスは、主として異敎徒の爲めに筆を執り、文體に於ては前者と同じ眞摯な調子をもつてゐない。イエス、バプテズマのヨハネ、ゴオロニチのユダに關する短い覺書は、乾燥なものであり、色彩の無いものである。性質情神に於て根本的に猶太的であつた之等の運動を、彼は希臘人及び羅馬人に理解し得られる形式で表現しようとしたものであることが感じられる。自分はイエスに關する語句を全體に於て公正なものと信じる。それは全くヨゼフス趣味のもので

あり、此歴史家がイエスのことを記したとすれば、慥に彼がいふべきことはかくあるべきものである。唯、ある基督教徒の手が、その斷片を補綴し、それに若干の言葉――それが無かつたら殆ど冒瀆のものになつたらう――を附加したことが感じられる。恐らく、また其中の若干の言葉を補綴し或は變化したことであらう。ヨゼフスの文學的運命が基督教徒によつて成され、その基督教徒が彼の著書を聖史の根本資料として採用したことは記憶すべきことである。多分基督教思想によつて訂正された版が、二世紀に擴まつたのである。要するに、われらの目的とする問題に、ヨゼフスの書物が大變興味を與へるのは、それが當時のことに投ずる潑剌たる光によつてである。この猶太の史家のお蔭で、ヘロデ、ヘロデヤ、アンチパス、ピリピ、アンナ、カヤパ、ピラトが、いはばわれらを感動させ、われらの前にさながらの現實味をもつて活きてくるのである。

舊約の經外書、とりわけ、託宣詩の猶太の部分、エノク書、モオゼ昇天記、エスドラ第四書バルク默示錄、並にダニエル書――これも眞の經外書である――は、メシヤ理論發展史及び神の王國に關するイエスの所論を知る上に重要なものである。殊にエノク書及びモオゼ昇天記は

イエスの周圍で盛に讀まれたものである。共觀福音書によつてイエスのものとされてゐる或言葉は、エノクのものでありながら、聖バルナバのものとして使徒書の中に出てゐる。この長老のものとされてゐる書中の各篇の年月を決定することは甚だ困難である。その中の何れも慥に紀元前百五十年より古いものでは無い。或物は基督教徒の手によつて書かれてゐる。「類似」と題されてゐる三十七章より七十一章迄の篇は基督教徒の作と疑はれてゐる。しかし、それも證明されたものでは無い。恐らく、此部分だけは改竄されたものであらう。其他の補綴附加も諸所に認められる。

託宣詩の集も同樣の鑑別を要する。しかし、これはもつと決定し易い。最も古い部分は、第三篇五の九十七より八百十七に至る間に含まれてゐる詩である。それは紀元前約百四十年から現れてゐる。エスドラ第四書の時代については、今日のところ、此默示錄を紀元後九十七年とすることに誰も一致してゐる。それは基督教徒によつて改竄されてゐる。バルクの默示錄は酷くエスドラのそれと類似して居り、その中には、エノク書に於ける如く、イエスのものとされた或言葉が發見される。ダニエル書は何うかといふと、それが二通りの言語で書かれてゐるこ

との特徴、希臘文字を使用してあること、アンチオクス・エピフアネスの時代に至るまでの事件を、年代も記してあり、しかも明確に示してあること、昔のバビロニヤのことを叙した情景の間違つてゐること、俘囚時代のことを毫も聯想させないで、却てセルウクス時代の信仰風俗想像の運びかたなどに大變類似があつて一致してゐる全體の調子、幻影が默示的形式であること、希伯來の聖典には豫言書以外に此書を置いてあること、その名が示されてゐるものとなつてゐながら、傳道の書四十九章の讃詞中にダニエルの名の略されてゐること、尙其他の幾度も引出されてゐる多くの證據からして、本書がアンチオクスの迫害によつて猶太人間に生じた大なる昂奮の結果であることに疑を挿むことができない。古い豫言者の文學中にこの書を置くべきものでは無い。その地位は默示文學の劈頭に置くべきもので、この書の次に、託宣書、エノク書、モオゼ昇天記、ヨハネ默示錄、イザヤ昇天記、エスドラ第四書等が來べきものである。

基督敎起源の歷史に、今迄あまりにタルムツドが閑却されてゐた。ガイゲル氏と同樣に、自分は、イエスが生れた環境の眞の觀念は、最もつまらぬ煩鎖哲學に混じて、澤山貴重な資料のある、此奇怪な編纂物の中に求むべきものであるとおもふ。基督敎の神學と猶太敎の神學とは根柢に於ては並行して進んだものであるから、一方の歷史は、他方の歷史無しには十分理解されるものでは無い。それに福音書中の無數の外的事實は、タルムツドの中にその註解を發見することができる。ライトフウト、シエツトゲン、ブクストルフ、オトオ氏等の拉丁語の尨大な纂輯には、既にこの點に幾多の資料が含つてゐる。自分は原書に就いて一も洩さぬやうに、自分の引いた例證を照し合せて見た。自分のこの部分の仕事に對しては、イズラエル學者でタルムツド文學に精通してゐるノイバウエル氏の協力のお蔭で、自分の問題の或部分を新たな對照によつて更に明かにすることができた。時代を識別することは、この際非常に大切である。それは、タルムツドの編纂が紀元二百年から約五百年に至る迄の間に亘つてゐるからである。此方面の研究では、現在できるだけの多くの能力を使用することができた。かやうに年代の晩いものであるといふことは、それが書かれた時代のことについてで無ければ、その資料の價値を認めないことにしてゐる人々に、多少の疑懼を起させるであらう。けれども、かやうな懸念は此處では無用であらう。アスモニヤ家から第二世紀迄の猶太の敎育は、主として口頭でされたものである。さういふ種類の知的狀態を、筆で書くことの多くなつた時代の習慣に基いて批判す

べきものでは無い。ヴエエダ經や、ホオマアの詩や、アラビヤの古詩などは、數世紀間記憶で保存されたもので、それにも拘らず、極めて微妙な極めて一定した形式を示してゐる。之に反して、タルムツドでは、形式に何等の價値が無い。尙附言すべきことは、聖ユダのミシユナ、——これあるによつて他のものはすべて忘れられた——以前に、編纂の試みがあつて、その古いものになると、一般に人の想像してゐるよりも恐らくずつと古いものである。タルムツドの文體は講義のノオトのそれで、即ち編纂者が、幾代かの間種々の學派で集積した莫大な記錄を若干の見出しの下に分類したに過ぎないものである。

尙資料の記錄のことに就いていふべきことがある。基督教の創始者の傳記となるものは、イエスの生活に第一位を保たせなければならぬ。福音書編纂に關する完全な論文は、それだけで一書になるであらう。三十年來この問題を對象とした立派な著作が數々あるので、昔は手の着かぬ物と判斷された問題が、無論尙幾多不正確なところはあるしたところで、歴史の要求には十分應ずるだけの解釋に達してゐる。後にわれらはそれに就いて反覆することがある積りであるが、福音書の編纂は、一世紀の後半に起つたことで、將來の基督教にとつて最も重要な事實の

一つであつた。此處では、自分等の話の確實といふ上に必要欲くべからざる、問題の一面だけに觸れて置かう。使徒時代の叙述に屬するものは別として、われらは、福音書によつて與へられたものが、如何なる程度に於て、合理的原理に從つて作られる歴史中に使用され得るかといふことだけを究めたいのである。

福音書が一部分傳說的であるるいふことは、それらが奇蹟や超自然的のことで充滿してゐる點からして明白である。しかし、聖人傳と架空談とがある。超自然のことが一歩毎に出て來るけれど、誰もアツシジオのフランシスコの生活中の主要點を疑ふ者は無い。之に反して、主人公のずつと死後に書かれ、しかも純小說の條件の下に出來上つたところからして、誰も『チヤナのアポロニウス傳』に信用を置く者は無い。如何なる時代に、如何なる人の手によつて、如何なる條件の下に福音書は編輯されたものであつたか。其處に信賴性の出來上る意見のよつて繫がつてゐる主要問題がある。

四福音書の各は冒頭に、使徒の歴史或は福音書の歴史其物に有名な一人物の名前を附してある。若しこの標題が正確であれば、福音書は一部分傳說的であることは依然としても、高い價

値を得ることになる。といふのは、それらがイエス死後半世紀の古いものであり、尙、兩方の場合に、イエスの行爲の實見者のものであるからである。

ルカに對しては、その疑問が殆ど不可能である。ルカ傳は、前の資料に基いた規則正しい作品である。それは選擇をし、無駄を省き、結合の法を知つてゐる人の作である。この福音書の著者は、慥に徒使行傳のそれと同人である。ところが、使徒行傳の作者は聖パウロの同僚の一人らしく、それは全くルカに相應する資格である。この推論に對して一二の異論のあることは知つてゐる。しかし、少くも一つの事柄は疑問外のことである。それは、第三福音書及び使徒行傳の作者が、使徒時代の第二期の人であるといふことで、それだけでわれらの目的には十分叶ふのである。此福音書の年代は、要するに、書物其物から取出される考察によつて、かなり精確に決定され得るのである。ルカの二十一章――他の部と分離することのできない――は慥にエルサレム包圍後に書かれたもので、しかもさう後のことでは無い。それ故、われらが茲に確實な地磐の上にあるといふのは、それが全部同一人の手に成るもので、しかも最も完全な統一を示してゐるからである。

マタイとマルコとの兩福音書は餘程同一の個人性に缺けてゐる。それは全然作者を殺した非個性的作物である。かういふ書物の冒頭に書いてある固有名詞は、大して意味のあるものでは無い。尙茲ではルカに對するやうな推論を下すわけには行かぬ。或章から出て來る年代（例へばマタイ二十四章、マルコ十三章）は嚴密に作全體に適用のできないものである。作全體が種々の時代及び非常に差異のある出所から出來てゐるからである。概して第三福音書が前二書より後と見えてずつと進んだ編纂の性質を呈してゐる。しかし、それからして、マルコ、マタイの兩福音書が、ルカの執筆當時に今のやうな姿で存在してゐたといふ結論は出て來ない。マルコ、マタイのこの二書は、實に久しい間整つてゐない、いはば修補を加へ得られる狀態にあつたのである。此點について、われらは第二世紀前半の重要な證據を有つてゐる。それはパピアスから出るもので、この人は嚴格な人であり、傳統の人であつて、一生涯イエスの人となりに就いて知り得られるものを拾集することに注意深かつた人である。かういふことには書物よりも口傳の方が歡迎すべきものであると宣言した後に、パピアスは、基督の行爲言說に關する二書について述べてゐる。即ち第一は使徒ペテロの代辯者であつたマルコの作、それは簡潔不十

分であり、年代を追うて無いが、使徒ペテロの記憶と資料とに則つて作つた話説を含んで居り第二はマタイによつて希伯來語で書かれた格言集、『さうしてそれは各人がおもひおもひに譯した』ものと言つてゐる。確かにこの二つの記事は、今日マタイ傳、マルコ傳と言つてゐる二書の一般的特性にかなりよく當嵌まるもので、前者は長々しい話説が特徴となつて居り、後者は取別け逸話的であり、些細な事實には前者よりも正確であり、乾燥といつてよい程の簡單なものであり、話説の乏しい、かなり拙文である。しかしながら、われらが讀んでゐるこの二書が、絶對的にパピアスの讀んだものと類似のものであつたとは主張しがたい。第一パピアスによるとマタイの書は、專ら希伯來語で説話を書いてあり、その譯が幾通りも擴つたもので、第二にはマルコの書とマタイの書とは、彼から見て、何等の歩調を合せること無しに編纂されたものであり、しかも異つた言語で書かれたものらしいからである。しかるに現今のところではマタイの福音書もマルコの福音書も、全く同一の非常に長い並行した部分があり、それは前者の決定的編者が後者を目前に置いて行つたか、後者の決定的編者が前者を目前に置いてゐたか、さも無ければ兩者とも同一の種本から寫したものと想像しなければならぬ程である。最も眞相に近いことと想像せられることは、マタイ、マルコ雙方とも、われらが編纂の原書を有つてゐないといふことである。われらの第一第二福音書は、甲乙の本文中の缺陥を互に補ふやうにした改訂增補書といふべきものである。事實、古代の人々は完全な一部を所持したいと希望したのである。自己の書中に説話ばかりしか無い者は、記事をも所有することを希望し、同樣にその反對の希望もあつたのである。そこで、マタイ傳はマルコの殆ど全部の逸話を收錄することになり、マルコ傳は今日マタイのロギヤから生ずる多くの特色をも含んでゐるのである。要するに、何れもまだ周圍に繼續してゐた口傳の中を廣く漁つたのである。その口傳は福音書によつて漁られつくすところ迄行かなかつたので、使徒行傳や最も古い教父が、公正のものと見られて、しかもわれらの所有する福音書中に無いイエスの多くの言葉を引用してゐる程である。

われらの目的から見れば、この分析をこれ以上に進め、いはば一方に於ては、マタイの原書のロギヤを作り直し、他方では、マルコの筆から出た儘の原始的記事を書き直すことは、さう必要なことでは無い。ロギヤは第一福音書の大部分を埋めてゐるイエスの大説教によつて代表されてゐるに相違無い。事實その説教は、他と引離すと、一個の十分完全な一體となる。マル

コの最初の記事は、本文が時には第一福音書に、時には第二福音書に略出てゐる。他の言葉でいへば、共觀福音書中のイエス傳の體系は、二個の第一史料に基礎を置いてゐる。第一には、使徒マタイによつて集められたイエスの說教、第二には、ペテロの記憶によつてマルコの書いた逸話や個人的の資料を集めたものである。われらはこの二通りの資料を『マタイ傳』『マルコ傳』といふ標題を有つてゐる――その理由がある――前の二福音書中に、異つた出所のものと混じた儘有つてゐるものといふことができる。

要するに、議論の無いことは、取も直さず、極めて古くから、アラム語でイエスの說教を誰かが書いて置いたことと、また早くから彼の顯著な行動を書いてゐたことである。其處には一定の正文も無ければ、敎義的に定つた本文も無かつたのである。われらに迄達した福音書以外に、同樣に實見者の傳統を代表するものと主張するものが若干あつたのである。人々はそれらの記錄をあまり重要視しなかつたのであり、パピアスのやうな保守主義の人は、尙二世紀前半に於て口傳の方を歡んでゐたのである。この世が終に近づいてゐることを皆信じてゐたのであるから、人々は將來のために書物を作ることをさう念頭に置かなかつたのである。唯心中に、

軈て雲の間で再會する希望のあつた人の、活きた姿を保存すればよかつたのである。それ故約百年間福音書の有する權威は乏しかつたのである。誰もそれに章を挿入し、種々に記事を結合し、相互を完全にするなどといふ配慮を毫もしなかつたのである。唯一部しか有つてゐない貧民は、自分の心を動かすすべてのことが己の本にあることを希望した。人々は互に小冊子を貸借し、各自その餘白に、他書にあつて自己の感動した言葉や譬喩を書入れたのである。世界中最も美しいものが、斯くして誰とも解らぬ全く民衆的の精選によつて生れたのである。何れの集も絕對的の價値のあるものは無かつた。クレマン・ロマン(クレメンス)のものとされてゐる二通の書簡に著しく差のあるイエスの言葉なるものが引いてある。『使徒備忘錄』と稱するものを每度楯にとつたユスチヌスは、われらの有つてゐる福音書の記錄とは多少異つたものを座右に置いてゐた。要するに、彼はそれらを本文の儘其通りに引證する意志を持つてゐなかつたのである。元來、貧者福音宗のものとされる福音講話――クレメンスの名を借りてゐる――の中にある福音書の引用にも、同樣の性質を示してゐる。精神が全部で、文字は顧みられなかつたのである。二世紀の後半に、傳統が衰へる時になつて、始めて使徒の各或は準使徒の名を冠し

てゐる經典が決定的の權威を有つやうになり、法律的の力を獲るやうになつたのである。その時になつても、自由な編著を飽くまでも禁止したのでは無かつた。ルカの例に倣つて、人々は依然として古い種々の聖文を一緒に集めて、それに基いて特殊の福音書を作つてゐた。

かやうに基督教の初の二代の間――まだ偉い創始者の生んだ強い印象が溢れて居り、しかも人よりも長く後に殘つた印象の存してゐた時代――の、床しい追憶や率直な記事などから出來上つた資料の價値を誰が認めないであらうか。尙附言すべきことは、此處でいふ福音書は最もイエスに接近した基督家の一分派から來たものであるらしいことである。マタイの名を有つてゐる本文編纂の最後のものは、ゴオロニチ、ハラン、バタニヤなどのやうな、羅馬人の戰爭時代に多く基督教徒の逃走した地方で、其處にはまだ二世紀にイエスの親族がゐたところであり、最初のガリラヤの覇權が他よりも長く殘つてゐたパレスチナ東北部の一州に於て成されたもののやうである。

今迄、われらは共觀福音書といはれる三福音書のことについてだけ語つて來た。尙第四卽ちヨハネの名を持つてゐるものに就いて論じなければならぬ。今度は問題がずつと困難である。

ヨハネの最も親しい弟子で、ビリビ人に與へた書簡中に每度共觀福音書を引用してゐるポリカルプスが、第四福音書のことには觸れてゐない。同樣にヨハネ派に執着してゐて、イレネが欲するやうに、ヨハネの說教を聞いたことは無かつたとしても、ヨハネの弟子等と直接交通したパピアスが、しかもイエスに關するあらゆる口傳を拾集した彼が、使徒ヨハネによつて書かれた『イエス傳』のことについては一言もいつてゐない。若し彼の著述中にそんな記事があれば、使徒時代の文學史に役立つものを悉く彼の中に指摘してゐるユウセビウスが、必ずそれを記したに相違無い。ユスチヌスは恐らく第四福音書を知つてゐた。しかし、慥に彼はそれを使徒ヨハネの作と看做してゐなかつた。といふのは、特に默示錄の著者として態々此使徒の名を擧げてゐる彼が、『使徒備忘錄』から引いてゐるイエスの生活に關する幾多の例證中に、少しも第四福音書のことを言つてゐない。のみならず、共觀福音書と第四福音書とのすべての相違點に關して、彼は後者に全然反對の意見を採用してゐる。第四福音書の教義的傾向が、非常にユスチヌスの意に適したものであるだけ、一層それは驚くべきことである。

クレメンスのものとしてある福音書講話についても同樣にいはなければならぬ。この書によ

つて引用されてゐるイエスの言葉は共觀福音書の樣式のものである。二三個所には、第四福音書から藉りて來たものとおもはれるものがある。しかしながら、慥に福音書講話の作者は、この福音書に使徒のものといふ權威を與へてゐない。何となれば、それは諸種の點に於て、それと著しく矛盾の態度を取つてゐるからである。マルキオン(百四十年頃)も件の福音書を知らなかつたらしく、さも無ければ天啓書として何等の價値をそれに附してゐなかつたらしい。若し彼が知つてゐたら、この福音書を必ず欣んで採用したに相違無く、理想的の福音書を作るために、ルカ傳の訂正版を是非しなければならぬとはおもはなかつたらうと想はれる程、彼の思想に適つてゐる。最後に、ヤコブの先宣福音書とか、イズラエルのトオマスの福音書などのやうな、二世紀のものとなつてゐる經外福音書は共觀福音書を基礎にして細工を施してゐるが、ヨハネ福音書を顧慮してゐない。

第四福音書其物を讀んで出て來る主要な困難は中々前に劣らぬものである。明確な、そして時々實見者のものと感じられることを除いて、何うしてその話をマタイのそれと全然異つたものと人々が認めるか。何うしてこの福音書は一個の譬喩も魔術をも示してゐないか。イエスの

生涯に就いて、全體のプランは別として或點は共觀福音書よりも、より精確でより滿足の得られるものであるが、作者獨特の教義的興味を感ぜしめる不思議な其章句、イエスのとは非常に異つた思想、時としては說話者の善信を警戒せしめるやうな徵候は、何う解釋をしてよいものであらうか。最後に極めて純粹、極めて正確、極めて眞の福音的な見解以外に、人々が、熱烈な一宗派人の書込みを喜んで見ようとする形跡は何うしたものであらうか。共觀福音書に比類を見ない、抽象的哲學論を希臘語で書き得たのは、慥にゼベダイの子で、ヤコブ――ヤコブのことは一度も第四福音書中に問題となつてゐない――の弟であつたヨハネであつたらうか。默示錄に根本的の猶太風を見せてゐる作者が、文體及び思想上に、極めて少しの年月で自己解脫をし得たであらうか。パウロのものよりも猶太精神に反對な書物、猶太人といふ言葉が『イエスの敵』と同意味になつてゐる一書を編纂したのが『割禮の使徒』であつたらうか。猶太人の逾越節や猶太人の祭を一種の侮蔑をもつて語り得た者を、猶太の逾越節を祝ふことに贊成する連中が、自己の意見に利益を與へる例證として引用するであらうか。すべてこれらは重要なことで、自分から見れば、第四福音書がガリラヤの昔の漁夫の筆に成つたといふ思想を否定するも

のである。しかしながら、要するにこの福音書が、ヨハネ派に屬した小亞細亞の一派から、一世紀の終頃か、二世紀の初頃に出たものであること、それがわれらの考慮に値する、しかも往々推賞すべきものである位の立派な師の生活叙述をわれらに提供してゐることは、外的の證據によつても、件の資料を檢して見ても、事實らしいことである。

第一に誰も百七十年頃に、第四福音書の存在してゐたことを疑問としない。此年代に、リコス河畔のラオヂケアに於て、逾越の節に就いて爭論が起り、それに第四福音書が決定的の役目を演じてゐる。アポリナリス、アテナゴラス、ポリクラテス、ヴイエンヌ及びリヨンの教會の手紙の作者等が、ヨハネのものと想像された記錄によつて、聽て正統のものとなる思想を教へてゐる。テオフイラ・ダンチオケヌスは百八十年頃に、使徒ヨハネがその作者であると積極的にいつてゐる。イレネウス(イレネ)及びムラトリの宗規は、第四福音書の完全な勝利、十分疑問の生じない以上の勝利を摘錄してゐる。

しかしながら、若し百七十年頃に、第四福音書が使徒ヨハネの記錄と見られ、十分權威を獲たとすれば、その年代に、直ぐ昨日生れたといふやうなもので無いことは明かである。ヂオグ

ネツスに與へた手紙の作者、乃至タチアヌスは慥にそれを使用してゐるやうである。ノスチツク教に於ける、殊に、ヴアレンチヌスの體系に於て、モンタヌス教に於て、無拘束論に於て、第四福音書の役目は同じく顯著なものであり、二世紀後半から、この福音書があらゆる論爭に參加して、教義の發達に柱石として用ひられたことが示されてゐる。ヨハネ派は二世紀を通じてよくその跡の見えてゐる派である。イレネウスはヨハネ派から出た。彼とこの使徒との間には唯ポリカルプスがあつただけであつた。ところで、イレネウスは第四福音書の公正なことに一點の疑義をも挿んでゐない。附言すべきことは、聖ヨハネのものとなつてゐる最初の手紙はどちらから見ても、第四福音書と同作者のものである。然るにその手紙はポリカルプスの知つてゐるもので、それはパピアスによつて引用されたとのことである。イレネウスはそれをヨハネのものとして認めてゐる。

若し、今われらが作其物を讀んで、これに光明を希望するとしたら、第一に作者が常に實見者として話してゐることとの認められることである。彼は使徒ヨハネとして見られむことを希望してゐる。明に作者がヨハネの利益になるやうに書いてゐることが認められる。各頁にゼベダ

イの子の權威を強くし、彼がイエスに最も愛せられた者であり、弟子中で最も明察の人であつたことを證據立てようとした意志が現れてゐる。尙あらゆる壯嚴の時に際して（最後の晩餐、刑場、墓場）彼が常に第一位を占めてゐる。一種の競爭心があるけれども、ヨハネとペテロとの親しい關係、之に反して反逆以前からのユダに對する憎惡が此處彼處に現れてゐる。ヨハネが老年になつて、當時普及してゐる福音書を讀み、一方では、それらの種々の不正確なところに書入れをし、他方では、人々が彼に基督史中に重要な地位を與へてゐないことを見て不快としたこと、そこで彼が他の者よりもよく知つてゐた澤山の事實を物語り始め、多くの場合ペテロだけのことを言つてゐる場所に、ペテロと一緒にしかも先に自己のあつたことを示さうとする意志が働いたのであると信じたくなることがある。既にイエスの生存中から、この輕い嫉妬心がゼベダイの二子と他の弟子との間に現れてゐた。兄弟のヤコブが死んでから以後、ヨハネこそ委任を受けた二使徒の一人であり、內密の記憶の唯一の繼承者であると、誰の目にも映じてゐた。その記憶はヨハネの左右に殘されることもあり得た筈であり、それに善良な文字通りの信仰に就いて、當時の思想が大變われらのそれとは異つてゐたから、一人の弟子、もつと適切にいへば、基督の思想を根柢から變更しかけてゐた一世紀の末以後の、既に半分ノスチツクになつてゐた小亞細亞の幾多の宗派中の一派が、この使徒のために筆を執り、彼の福音書の自由編纂者となりたいといふ念を出したといふ事も無いとはいへない。ペテロの名で一通の書簡を書くことが、その手紙の敬虔な筆者に、面倒なことでは無かつたやうに、否それ以上にヨハネの名によつて話しをすることも面倒では無かつたに違ひ無い。そこでイエスに愛せられた使徒と一になつて、彼はあらゆる自己の感情を、詰まらないものに至る迄加味したのである。そこからして、彼が實見者の最後の生存者であるといふことに、常に筆者をして注意させたのであり、彼一人のみが知り得た事情を話すことに興味があつたのである。そこからして註解者の註解とおもはせるやうな些細な事の明確が生じたのである。卽ち『六時であつた』『夜であつた』『この人はマルコスといふ者であつた』『寒かつたから爐に火を焚いた』『その着物は縫目が無かつた』といふ類を生じたのである。また、それだから、編輯の不統一、進行の不規則なこと、最初の數章の支離滅裂なことなどの生じたわけであり、この福音書が歷史的價値の無い神學論に過ぎないものとなつて居り、推測說明のつかない澤山の事柄の出る所以であり、さうして、

それは、若しその人以外にあつて、その老人の記憶として見れば、時には驚くべく潑剌たるものがあり、時には妙な改訂を加へられたところがあるのも首肯されるのである。

事實、ヨハネ傳は重要な鑑別をする必要がある。一方に於て、この福音書は共觀福音書のそれとは酷く異つたイエス傳をわれらに示してゐる。他方に於て、筆者はイエスの口に、調子、文體、態度、學說の共觀福音書の載せてゐるロギヤと一向共通點の無い言葉を吐かせてゐる。この第二の點に於けるその差は、劃然と選擇をしなければならぬ程度のものである。若しイエスがマタイの想ふやうに話したとすれば、ヨハネの欲する通りに話す筈は無かつたのである。兩者の權威の間にあつて如何なる批評家も躊躇したこと無く、今後も躊躇することは無いであらう。簡素、無私、客觀的の共觀福音書の調子とは甚しく異つてヨハネ傳は絕えず辯護者としての心配と宗派人のわだかまりと、問題を證明し反對者を說き伏せようとする意志とを見せてゐる。イエスが自已の神の事業を築いたのは、拙い重苦しい、衒示的の繰言によつてでは無い。マタイがイエスの言葉を原語のまま書いたといふことを、パピアスがわれらに敎へないとしても、共觀福音書の自然な趣と、打消すことのできない眞理と、言葉の無比な魅力と、その言葉の飽く迄も希伯來調子なところと、當時の猶太の學者の文と對して類似の點のあることと、ガリラヤの自然と完全な調和をしてゐることなどの、そのすべての性質を、若しヨハネの言葉に充ちてゐる曖昧なノスチツクのもの、哲學的輪廓のものと比較したら、隨分明瞭に解る事である。と言つてヨハネの言葉の中に立派な光が無いといふ意味では無く、眞にイエスから出たものが無いといふ意味でも無い。しかしながら、その言葉の神秘的な調子は、共觀福音書によつて人の想像するやうなイエスの辯舌の性質と、一向對應するやうなものでは無い。それには新精神の呼吸が通つてゐる。神秘哲學が既に始つてゐる。神の天國のガリラヤ時代は終を告げてゐる。基督の近く來る希望は遠く退いた。人々は形而上學の荒地に入り、抽象的敎義の闇の中に入ることとなつてゐる。イエスの精神は其處には無い。若しゼベダイの子が眞にこれらの頁を書いたものとすれば、ゲネザレの湖や、その湖畔で聞いた面白い話を、彼が書く時になつて忘れてゐたものと想像しなければならぬであらう。

要するに、第四福音書によつて傳へられた話は、歷史的の斷片では無く、イエスの權威をもつて、編者に親しみのある或學說に被せるのを目的とした作物と見るべきことを十分證明する

一事情がある。即ちそれらの書かれた時代の小亞細亞の知的狀態と完全な調和のあることがそれである。小亞細亞は當時混合哲學の奇怪な運動の舞臺であつた。ノスチック教のあらゆる萠芽が既に存在してゐた。ヨハネと同時代人のケリンツスは、クリスツスといふエオンが、洗禮によつてイエスといふ人間と合體し、それをまた十字架の上で棄てたのであると言つた。ヨハネの弟子の或者は、これらの奇異な泉で水を飲んだらしい。使徒彼自身は同樣の影響を受けなかつたとか、聖パウロには行はれ、コロサイ書がその主要證據となつてゐるやうな、さういふ變化は使徒のヨハネには起らなかつたと斷言ができるであらうか。無論否である。紀元六十八年（默示錄の年代）及び七十年（エルサレムの滅亡）の危機の後に、この老使徒――熱烈な移りやすい、雲の間に人の子が近く出現するといふ信仰の迷ひを悟つた使徒――は、自己の周圍にあつた思想の方に、しかもその中の多くは、基督教の教義のある物とかなりよく合體してゐたその思想の方に傾いたといふことはあり得ることである、これらの新思想をイエスに與へて、彼は唯極めて自然の傾斜を辿ることをしたに過ぎないのかも知れぬ。われらの追憶はその他と俱に變化する。われらが識つてゐた人物の理想も、われらと俱に變化する。イエスを眞理の化身と考へたヨハネが、眞理として受取るべきものとなつたものを彼に歸したといふことは十分あり得ることである。

しかしながら、尙眞に近いこととおもはれることは、ヨハネ自身がそれには何等與かつてゐなかつたこと、變化は彼によつてといふよりも、寧ろ彼の周圍に於て、しかも必ず彼の死後に行はれたものであるといふことである。此使徒の久しい間の老境時代は、略周圍の思ふが儘になるやうな老衰の狀態で終を告げたかも知れない。ある秘書が彼の文體に則つて、何人も特に老大人と敬して呼んでゐた人をしていはせる例のやうに、其老境を利用したのかも知れない。第四福音書のある部分は後から附加したものである。例へば二十一章全部の如きは、筆者が彼の死後ペテロの名譽をあらはすために、またヨハネ其人の死から人々が既に引出し或は引出さうとしてゐた異論に答へる目的との爲めに書かれたやうである。尙其他の數箇所にも削除訂正の痕跡が見える。何人からもヨハネの作と受取られなかつたので、此書は五十年間不問に附せられてゐたといふこともあつたらう。後段々夫に慣れて、遂に人々がそれを承認するやうになつたのであらう。それが聖典となる前にも、多くの人がそれを十分權威のある書としては用ひ

ないまでも、大變修養になる書物として用ひてゐたと想はれる節がある。他方に於てずつとよく普及してゐた共觀福音書と對比して見ると、此書の矛盾してゐることが、人々の想像してゐたやうなイエスの傳を組織する資料の中に、この書を算入することを妨げたのである。

かやうに、ユスチヌスの記錄やクレメンスの福音書講話なるもの――それには第四福音書の痕跡が見えるけれども、確に共觀福音書とは同じ立脚點に立つてゐたもので無い――の提供する奇怪な矛盾の說明がつく。其處からして、百八十年頃迄率直な引用に用ひられず、それとなく暗示のやうに引かれてゐたのである。またそれ故、第四福音書が二世紀に徐々と教會の運動から現出するやうになり、最初はノスチック教徒によつて採用され、正統の教會に於ては、逾越節の論議によつて見られる通り、僅に部分的の信用しか無かつたものが、更に普く認められるやうになつたのである。自分は時として、パピアスがイエスの生活に關し、正確な資料に對抗して、他の人々から彼の言葉と信じられてゐる長い說話や妙な教訓を引いてゐる時、彼は第四福音書を念頭にかけてゐたのであると信じたい。パピアスと古い猶太基督教黨とは、この種の新說を極めて排斥すべきものとして取扱つてゐたに相違無い。最初異端であつた書が正統基

督教會の入口を犯し、その中で信條とならうとしたのは唯の一度だけでは無かつたであらう。

少くとも、最も眞相に近いものと自分の看做してゐる唯一の事柄は、この本が紀元百年以前卽ち共觀福音書が十分聖經とならぬ以前の時代に書かれたものであるといふことである。この時代を過ぎると、最早『使徒備忘錄』の輪廓から作者が脫却し得ると誰も考へないであらう。ユスチヌス乃至パピアスにあつても、共觀書の輪廓がイエス傳の眞實唯一のプランになつてゐる。百二十年或は百三十年の頃、想像的福音書を書く僞作者は、經外福音書のしてゐるやうに、與へられた文を自己の欲するが儘に取扱ふことで滿足し、イエス傳の根本の筋と目せられてゐるものを、根柢から顚倒さすやうなことはしなかつたであらう。二世紀の後半からして、これらの矛盾が基準を無視する者の手にも非常に困難のこととなり、第四福音書の辯護者をして非常に窮した解釋をしなければならぬやうにさせてゐる。第四福音書の著者が執筆中共觀書の何れをも左右に置いてゐなかつたことを證明する物は何も無い。他の三福音書と比して、イエス受難のところに第四福音書の物語の著しく類似してゐることは、その頃から最後の晩餐に對すると同樣に、受難の方にも、人々が暗記してゐる程の略一定した話があつたものと想像させられ

るのである。

遠く離れては、すべてこれらの奇異な問題を説明することが不可能である。若しエフエジヌスの神秘的の派――再三好んで明瞭で無い道に馳せた――の秘密に通ずることができたら、必ず多くの驚くべきことがわれらに與へられるであらう。しかしながら、次のことがその主要な經驗であらう。即ち福音書の相對的價値に關して一定の理論を有たず、專ら主題の感じに曳かれてイエス傳に筆を染める人は、誰でも多くの場合に、共觀福音書よりも第四福音書の物語に引込まれることである。殊にイエスの生活中最後の數ケ月は、この福音書によつてゞ無ければ解釋されない。受難のことに就いて共觀書では不可解なことになつてゐる幾多の樣子が、第四福音書の話には眞實性と可能性とを持つてゐる。之に反して、所謂ヨハネがイエスのものとしてゐる言葉を眼中に置いて、ある意味を持たせたイエス傳を書く人があつたら、自分はそれが誰であつても敢て信用しない。絶えず自己を說敎し、自己を現さうとするその態度、絶えず論議を續けること、無邪氣さの乏しい叙景、一々の奇蹟についての長い推論、ぎごちない言葉つき――その調子は每度僞のもので不平均である――などは、共觀福音書の示すイエスの敎訓的生命と

なつてゐる立派な格言と比肩すべき趣味の人によつて吐かれたものでは無いやうである。茲には明かに技巧的のものがあつて、それはプラトンの對話がソクラテスの話をわれらに示してゐると同じやうに、イエスの說敎をわれらに示してゐるのである。それは與へられた題で勝手に即興的に奏する音樂家の變調に略似てゐる。當の場合には、主題は幾分公正で無いといふことは無い筈であるが、演出法に於て、藝術家の空想が十分活躍する。人々は故意の技巧修辭虛飾を感じる。尙イエスの語彙がわれらのいふ斷片中には認められない。彼の非常に好んでゐた『神の王國』といふ言葉が唯の一度しかその中に出てゐない。その代りに、第四福音書によつてイエスの言葉とされてゐる話の樣式は、同じ福音書の叙事の文體、及びヨハネの手紙といはれるものの文體と最も完全な類似性を呈してゐる。その話を書きながら、第四福音書の作者は、自己の記憶を辿るので無く、自己獨自の思想のかなり單調な進みかたを辿つて行つた事が解る。全く新しい神祕語が其處に展開されてゐる。即ち『世界』、『眞理』、『生命』、『光明』、『闇黑』といふ言葉の每度使はれることが特色になつてゐる言葉であつて、それは箴言書やフイロンやヴアレンチヌス派のそれよりも、更に共觀福音書には乏しいものである。若しイエスがさういふ

文體、希伯來的の所の全く無い、猶太的のところも無い文體で話したとしたら、何うして、イエスの聽衆の中で一人だけが、そんなによくその內密な點を保ち得たであらうか。

しかしながら、文學の歷史は、われらが今述べた歷史的現象と或類似を示し、それを說明する役に立つ一例を提供してゐる。イエスのやうに、筆を執らなかつたソクラテスが、二人の弟子クセノフオンとプラトンとによつてわれらに知られてゐる。前者は淸澄透明客觀的なところで共觀福音書に對應して居り、後者は力强い個性によつて第四福音書の作者を聯想させる。ソクラテスの敎を陳べるためには、プラトンの『對話篇』を追ふべきか、それともクセノフオンの『話集』を追ふべきか。その點に就いては何等疑の可能性が無い。何人も『話集』に就いて『對話篇』に就く者は無い。しかし、プラトンはソクラテスに就いて何一つ敎へぬであらうか。ソクラテスの傳記を書く時に、『對話篇』を閑却して善き批評のものが出來るであらうか。出來たとしたら、誰がそれを推賞することを敢てするであらうか。

如何なる人の手が第四福音書を書いたかといふ、外的の問題について陳述しないで、又それはゼベダイの子のもので無いと信ずるにしたところで、それでも尙此作はヨハネ傳と稱せられる資格のあることを容認することができる。自分の見るところでは、第四福音書の史的背景は、直接のヨハネの周圍で人々の知つてゐた通りのイエスの生活である。尙附加していへば、自分の意見では、この派が、追憶をもつて共觀福音書を作り上げた群よりも、創始者の生活の種々の外面的境遇をよく知つてゐたことである。殊にイエスのエルサレム滯在のことに關しては、この派が他の敎會の所有しなかつた資料を有つてゐた。多分使徒ヨハネと異人物で無いプレスビテロスヨハネスは、マルコの話を不完全亂雜なものと目してゐたとのことである。ヨハネの傳統が反響のやうに入つてゐるルカの或章は、尙第四福音書によつて保存された傳統が其餘の基督敎界に全く知られてゐなかつた物では無かつたといふことを證明してゐる。

惟ふに、次々の物語に於て、イエス傳のためにわれらの所有する四つの案內書中の、甲或は乙を選ばしめるやうに自分を決定させた動機を見ようとするには、以上の說明で十分であらう。要するに、自分は四聖典を眞面目な史料と認める。何れもイエス死後直ぐの世紀に出來た古いものである。しかしその史的價値は非常に樣々である。マタイ傳の敎訓の言葉に非常に信用の置けることは明かである。そこにはロギヤがあり、イエスの敎訓の鮮明な記憶から取つた調子

其物がある。溫和であると同時に威嚴のある一種の光彩、いはば一個神聖な力がその言葉に力を與へ、それを前後の句から引放して居り、批判者に容易く識別することを得しめる。福音の歴史と規則正しい構圖を成すことを任務としてゐる人物が、この點に關して立派な試金石を持つてゐる。イエスの眞の言葉がいはば自然に現れてゐる。均等で無い傳統の混沌たる中で、それに觸れると、人は直ちにその震動を感じる。その言葉はさも自然にあらはれ、自づと物語中に位置を占めて無比の鮮かさを保つてゐる。

この第一の中核を中心として、第一福音書に集められてゐる物語の方は、同樣の權威を有つてゐない。その中には第二代の基督教の信仰から出た、かなりはつきりしない輪廓の傳說が澤山ある。マタイがマルコと共通に所有してゐる物語は、パレスチナに就いての凡庸な理解を暴露する寫し誤りが幾らもある。多くの挿話は二度繰返されて居り、或人物は重複してゐる。そのことは異つた材料が利用されたこと、並びに粗雜に同化されたことを證するものである。マルコの福音書はずつと確りした明晰なもので、後に挿入された事情のものが少い。共觀三福音書中で最も古いものであり、最もオリジナルなものであり、後世の要素の加はつたことが一番少いものである。マルコの中には、些末の外的事實が、他の福音書の中では探しても無い程の明瞭さを有つてゐる。彼はイエスの或言葉をシリヤカルデヤの語に引直すのが好きである。それには疑も無く實見者から出たものに相違無い細かい觀察が多い。その實見者は明かにイエスに隨つてゐた人で、彼を愛し、親しく會つた人であり、イエスの姿を鮮かに記憶してゐた人であり、それがパピアスの欲する通りに、使徒ペテロ其人であるかも知れぬといふことに、何等反證となるものは無い。

ルカの作は何うかといふと、その歴史的價値はずつと乏しくなる。それは間接史料である。これでは物語がずつと熟してゐる。イエスの言葉がより反省的となり、組立がよくなつてゐる。或格言は極度に誇張されて、誤謬に墮ちてゐる。パレスチナ以外の地で書き、それも確にエルサレム包圍後のことで、作者は他の共觀二福音書よりも不精確に場所を指摘してゐる。あまりに殿堂を祈禱の場所としすぎて居り、神に奉仕するために赴くところとしすぎてゐる。彼はヘロデ黨のことを口にしてゐない。彼は異つた記事の中に一致を齎らせやうとして細かいところを加減してゐる。彼はイエスの神性論について、自己の周圍で人人々が成してゐた昂奮的の思想

に從つて、邪魔となつてゐる章句を和げた。彼は不可思議を誇張した。彼は年代と地理とに誤謬を敢てしてゐる。彼は希伯來の註解を略して居り、希伯來語を殆ど知らなかつたらしく、イエスの言葉を一つもこの言葉で引用してゐない。すべて地名を希臘語で擧げ、時として拙くイエスの言葉を改訂してゐる。編纂者らしい感じがあり、直接實見者に遭つたことの無い人らしく、原文によつてつとめ、それを一致さすためには非常な無法をも行つてゐる。ルカは、多分マルコの最初の記事とマタイのロギヤとを左右に備へてゐた。しかし、彼はそれらを大變自由に取扱ひ、時には二個の逸話や二個の譬喩をもつて、それを一つにする爲に融合させたり、或は一つを分解してそれを一つにしたりしてゐる。彼は自己獨自の精神によつて史料を解釋してゐる。彼はマタイやマルコの絶對的な冷靜を缺いでゐる。人は彼の趣味や彼の特殊の傾向について若干の事を言ひ得る。卽ち彼は極めて正確な敬神者である。彼はイエスが有ゆる猶太の儀式を行つたことを重要視する。彼は貧に感激する民衆主義者である。換言すれば、所有權に甚だ反對の人であり、貧者の復讐がやがて來ることを信じた人である。彼は何よりも罪人の改宗を高調する種々の逸話を喜び、己を卑うする者の殊勝な心懸を喜ぶ。彼は屢その趣を添へるた

めに古い傳說を改變する。彼はその冒頭の數頁に、經外福音書の特色となつてゐる慣用手段、聖歌、長々しい誇張などをもつて語つてあるイエスの幼年時代の傳說を收めてゐる。尙彼はイエスの晩年を物語つてゐるところに、優しさの溢れた或情景や、より公正な物語中に無くて傳說の作と感じられる、非常に美しいイエスの或言葉を收錄してゐる。ルカは、多分それを敬神の情を唆ることを主要目的とした新しい編集中から藉りて來たのであらう。

かういふ性質の史料に對しては、當然大なる保留を强ひらるべきものであつた。彼は、無差別にそれを使用する位に、それを閑却することにも無批判であつたのであらう。固よりルカはわれらの有つてゐない第一史料を左右に置いてゐた。唯彼は福音記者といふよりも、イエスの傳記作者であり、ハルモニストであり、マルキオンやタチアヌス流の校正者である。けれどもそれは第一世紀の傳記作者であり、更に古い資料から取つた報告を離れて、いい特色があり全體の感じの纏つた、しかも他の二共觀書に無い鮮かさをもつて、開祖の性格をわれらに示す崇高な藝術家である。彼の福音書は讀んで最も面白いものである。といふのは、共通の素材が無比の美を有つてゐる上に、彼は酷く眞實を害はないで、著しく寫象の効果を增す一部の技巧

と構圖とを附加してゐるからである。

要するに、共觀書の編纂は三階段を通過したといふことができる。第一には、マタイ、マルコのオリジナルな史料の、最早今日存在してゐない最初の編輯記錄のあつた時代、第二にはオリジナルな種々の史料が何等構圖をするといふ努力も無く、作者側の何等個人的の見解の加はることも無しに融合した時代（マタイ、マルコの現存のものの如き）、第三には、ルカ傳、マルキオン、タチアヌス福音書のやうな種々の作品を調和させる努力の感じられる結合時代、意識的反省的編纂時代である。ヨハネの福音書になると、前にも述べたやうに、別種の全く異つた構圖になつてゐる。

自分が一切經外福音書を使用しなかつたことを人々は認めるであらう。それらの作は、毫も聖經と同じ足場の上に立つてゐるものでは無い。それは平板な幼稚な誇張で、屢聖經を基礎として居り、しかも價値のあるものを毫も附加してゐない。之に反して、教會の教父によつて保存された、聖經と並行して存した昔の福音書でしかも今日は亡くなつてゐるヘブライ人による福音書、埃及人による福音書、所謂ユスチヌスの福音書、マルキオンの福音書、タチアヌスの

福音書などの斷片を採集することには、自分は非常に注意した。就中最初の二つは、それがマタイのロギヤのやうに、アラム語で編纂され、この使徒の福音書となつてゐるものの別冊となつてゐたらしいのと、それがエビオニム即ちシリヤカルデヤの慣習を保存し、或點に於てイエスの系統を引いてゐたらしいことで重要なものである。しかしながら、われらの手にあるやうなそれらの福音書は、批評的の權威から見ると、われらの有するマタイ福音書の編纂よりも低級のものであるといふことをいはなければならぬ。

おもふに、人々は自分が福音書に與へた歴史的價値のどんなものであるかを今理解するであらう。それはスエトニウス風の傳記でも無く、フイロストラツス風の架空な傳說でも無い。それは傳說的傳記である。自分は好んでそれらを聖人傳や、プロチヌス、プロクルス、イシドルスの傳記や、其他同種類の記錄の、歴史的眞理と德の模範を示さうとする意志との、種々の程度に結合してゐるものに比較するであらう。あらゆる民間の作品の一特色たる不正確が、それには著しく感じられる。十五年乃至二十年前に第一帝政時代の三四の老兵が各自に記憶を辿つてナポレオン傳の起草に取りかかつたと想像しよう。彼等の物語が幾多の錯誤と甚しい不一致と

を呈することは明かである。彼等の或者はマレンゴオよりもヴアグラムを以前に持つて行くであらう。他の者は躊躇無くナポレオンがロベスピエルの政府をテユイルリイから追拂つたと書くであらう。第三の者は最高の意義のある遠征を省略するであらう。しかしながら、それらの無邪氣な物語の中から、一つの事實が高い程度の眞理をもつて現れるであらう。それはこの英雄の性格とその周圍に與へた印象である。この意味に於て、かやうな俗史も嚴かな官憲の歴史よりも必ず勝つてゐる。專ら師の優越を鮮明にすることを心掛けた福音書記者は、イエスの精神其物で無いことは、何に拘らず全然冷淡の態度を示した。時代、場所、人物などに關する矛盾はつまらぬ事と看做されてゐた。といふのは、イエスの言葉に高度の感興を與へれば與へるだけ、人々はこの感興を編者に與へることが遠くなる。編者は唯單なる學者として自己を觀るだけで、彼等の知つてゐることを一つも洩すまいといふ一事だけを重要視するのであつた。

無論、一部先人の思想が、さういふ記憶に混じたに相違ない。多くの物語、殊にルカの物語はイエスの風貌の或特色を著しく現さうとして發明されてゐる。その風貌其物も毎日變化を受けた。若しイエスがその果した任務をもつて早速容を變へなかつたら、彼は歴史中の唯一の現象となつたかも知れぬ。アレヾサンドル大王の傳説は、その戰友の時代の過ぎぬ内から始つてゐた。アツシジオのフランシスコのそれも生前から始つた。同様にイエス死後の二三十年間、に變化の急速な事業が行はれて、何處までも理想的傳説の調子を彼の傳記に强制したのである。死は最も完全な人をも完全にし、その人を愛した人々に對して、全く缺點の無い人にする。同時に、師のイエスを描寫しようとする時、人々は彼を證明することにつとめた。メシヤに關するものとされた豫言の、彼に於て完成されたことを證明するために、多くの逸話が考へ出された。けれども、その意義を否定することのできなかつた方法も、悉くを説明することにはならなかつた。當時の猶太の作は、一として、メシヤが成就すべきことを正確に記した豫言集を有つてゐなかつた。福音書の作者が指摘した、メシヤに關する幾多の暗示は、すべてそれが一般に認められた學説に應ずるものと信じられない程、穿ちすぎたもの、側道に外れたものである。時にはかやうな推論がある。『メシヤは某の事を成すべし。しかるにイエスはメシヤなり、故にイエスは某の事を成したり。』ある時はその反對の推論をした。『某の事イエスにありたり、しかるにイエスはメシヤなり、故に某の事はメシヤにあるべきものなり。』無限の變化と豐富とによつて、す

べての體系を失敗に終らしめる民衆的感情の深遠な創造の經緯を分析しようとする時、あまりに單純な說明は常に誤である。

かやうな史料をもつて、議論の餘地の無いものだけを出さうとすれば、大綱に正めて置かなければならぬことは、殆んど言ふ必要の無いことである。あらゆる古代史には、これ程傳說的で無いものに於ても、枝葉に入ると無限の疑が出て來る。われらが同一事實について二個の物語を有つてゐる時、二つが一致することは極めて稀である。唯一つだけに限られてゐる時、尠からず當惑に陷る一理由は其爲ではあるまいか。諸の歷史家によつて齎らされた逸話、話說、有名な言葉などの中に、嚴密に公正なものは一つも無い。立ろに消える言葉を固定させるために速記術があつたらうか。俳優の態度、身振、感情などを記すために常に立合つてゐる記者があつたらうか。現代の某事實が起つた狀況に關してすら眞相に達しようと試みる時に、われらはそれに成功するものでは無い。實見者の手に成つた一事件の二個の物語すら根本的に差異がある。そのために物語のあらゆる色彩を棄て、全體の事實の指摘に止めて置くべきものであらうか。さうしたら歷史を廢することにならう。慥に自分は信ずる。若し、短いもので、殆ど

記憶補助の或公理を除外したら、マタイの告げる言葉は一として原形のものでは無い。われらの今日速記によつて行ふ調書が辛うじて原形を寫す位のものである。あの受難の立派な物語に「あやふやの澤山あることは自分も進んで認める。しかしながら、彼の言葉の趣を鮮明にわれらに傳へる說敎を略して、ヨゼフスやタキツスとともに、『彼は祭司の指嗾によりピラトの命によりて殺されたり』といふに止めて、それでイエスの歷史が完成するであらうか。自分の見るところでは、それでは、われらに聖經の供給する詳細の言葉を認容して陷る不正確よりも、もつと惡い不正確に陷ることである。微細の事實は文字通りに眞なものでは無い。しかしながらそれはもつと高級の眞理をもつた眞實である。眞理を表現的にし、活ける話の如くにして思想の高さに運ばれた眞理であるといふ意味からして、それは赤裸々の眞理よりも眞實のものである。大部分傳說的な物語に對して、過度の信賴を自分が與へてゐるとおもふ人々に、自分の述べたところを參照せられんことを乞ふ。若し物質的外的の確實に限つたら、アレキサンドル大王傳は何うなるであらう。一部誤謬のある傳說も、歷史の閑却し得ない眞理の一部を含んでゐる。マホメットの傳を書いて、この豫言者に關するハヂト卽ち口傳を參考し、この方から知られて

ゐるばかりの言葉を、言葉通りに屢その主人公に藉してゐるといふことで、敢てスプランジエ氏を人は咎めなかつた。しかし、マホメツトに關する諸傳說は、福音書を構成してゐる話說物語以上に優れた性質のものでは無い。それは回教紀元五十年から百四十年迄に書かれたものであつた。基督教發生の直ぐ前後の數世紀に於ける猶太諸派の歷史を書かうとする時、ヒレルやシヤンマイやガマリエルに、ミシユナやゲマラが彼等のものとしてゐる格言——これらの大記錄は件の諸博士の死後數百年を經て集められたものであるにも拘らず——を附與して誰も何等憚らないであらう。

之に反して、歷史はわれらに傳はつた史料を無解釋のまゝ書き直せばよいのであると信ずる人々には、こんな主題にはそんなことは許されないといふことを認めて貰ひたい。四つの主要史料は互に明かに矛盾してゐる。それにヨゼフスは時にそれらを訂正してゐる。故に選擇をする必要がある。一事件は同時に二通りの現れかたも無く、不條理に現れるものでも無いといふことを主張するのは、歷史にアプリオリの哲學を課することでは無い。人々が同一事實について幾多の異れる記錄を有することからして、またすべてそれらの記錄には、輕信の念が童話的

の狀景を混入させたといふことからして、歷史家がその事實を誤謬であると結論を下すべきでは無い。しかし、さういふ場合には用心をし、本文を吟味し、歸納的方法を取らなければならぬ。殊に此原則をして必要な適用をさせなければならぬ種類の物語がある。それは超自然的の物語である。それらの事實を說明しようとするか、或はそれを傳說としてしまふかにしても、それは理論の名で事實を殺すことでは無い。それは事實の觀察其物から出發することである。古い歷史の中に滿ちてゐる奇蹟の何れとして、科學的條件の下に現れたものは無い。唯の一度も打消されたことの無い觀察の敎へるところによると、われらに、人々がそれを信じてゐた時代と、またさういふ國とに於て、それを信ずる傾向のある人々の前に於てで無ければ、奇蹟は起るもので無いといふことである。如何なる奇蹟も、事實の奇蹟的性質を指示し得る能力の人の集りの前では起らぬ。民衆人も社會人もそれに對する時能力は無い。それには大なる注意と科學的研究の長い習慣とを必要とする。今日大抵の人々が見え透いた威光や子供らしい幻影に欺かれるのを見ないであらうか。小さな町全部によつて證明された不可思議の事實も、嚴密な調査のために否定すべき事實と化することがある。現代の奇蹟は悉く議論を支持することのでき

ぬものだと解つて來たのであるから、民衆的會合の中ですべて成就された過去の奇蹟も、同樣に若し仔細にそれらを批評することが可能であつたら、その錯覺の部分をわれらに暴露するであらうといふことは、あり得べきことでは無いであらうか。

それ故、われらが歴史から奇蹟を排するのは、某々の哲學の名に於てでは無く、恒常の實驗の名に於てするのである。われらは『奇蹟は不可能である』といふのでは無い。われらは『今日迄證明された奇蹟が無い』といふのである。假に明日論議されるだけの眞面目な保證をもつて神通力の人が現れ、死人を甦らすことができると自稱するとしたら、人は何うするであらうか。生理學者物理學者化學者乃至史的批評に經驗のある人々から成る委員會が任命されるであらう。その委員會は死骸を選擇し、死の十分現實なことを確め、實驗の行はるべき室を指定し、一切の疑の起らぬやう、必要の注意方法を規定するであらう。若しさういふ事情の下に、復活が行はれたら、確實に殆ど近いプロバビリテが獲られることになる。しかしながら、實驗は常に反覆さるべきものであり、一度成し得た事を繰返す能力が無ければならぬ物であり、また奇蹟の範圍に於ては、難易は問題となることのできぬものであるから、神通力の人は他の場合にも他の死

骸に對して別個の環境の下で、その行爲を再現することを乞はれるであらう。若しその都度奇蹟が成功したら、二つの事柄が證明されるであらう。第一は卽ち超自然の事實が世界にあるものだといふこと、第二には、それを現す能力は或人にあり、或はある人に授けられてゐるといふことである。しかしながら、嘗てさういふ事情の下に起つた奇蹟ばかりを見た者があるか。今日迄神通力のある人が、常に實驗の主題を擇び、環境を選び、公衆を選んだのは何ういふ理由か。尙又、大抵は民衆其物が大事件大人物中に何かしら神的のものを見たいといふ抑へられない要求からして、後から不可思議の傳說を創造するのでは無いか。それ故、新しい世界の來る迄、超自然の物語は其儘認容することのできないものであり。それは常に輕信欺瞞を含むものであり、歴史家の責務はそれを解釋して、如何なる部分が眞理誤謬を洩すものかを研究することにありとする歴史的批評の原則をわれらが維持して行く所以である。

かくの如きものが本著を構成する上に從つた法則である。史料を讀んだ上に、自分は大なる光明の泉、卽ち事件の起つた場所を實見したといふ利益を附加することができた。自分が一八六〇年と一八六一年に主宰した科學委員會は、古代フェニキアの探險を目的とし、自分をして

ガリラヤの國境に住はせ、またガリラヤに毎度旅行することを得させた。自分は福音の地方をあらゆる方向に横切つた。自分はエルサレム、ヘブロン、サマリヤを見物した。イエスの歴史に大切な地方は一として洩したところが無かつた。遠くにゐては、現實で無い世界の雲の間に漂うてゐるやうな歴史が、自分を驚かす程具體的のものとなり、堅固なものとなつた。聖書の本文と場所との著しい一致、福音の理想と、その背景となつた景色との奇異な調和などは、自分にとつて一個の啓示であつた。自分は眼前に、破棄されてはゐるが尚讀める程度の一個の第五福音書を有つてゐたやうなものであつた。從つて爾來マタイ、マルコの物語を透して、嘗て存在したものでは無かつたともいへる抽象的存在の代りに、自分は生き動いてゐる一個の立派な人の顔を見たのである。夏の間、多少の休息を獲るために、レバノン山中のガジイルに登らねばならなかつたので、自分は自己に現じた姿を早急に纏め、それからして此歴史を產出したのである。殘酷な試錬が自分の出發を早めた時、自分は最早餘すところ數頁であつた。さういふ次第で、この書は、イエスが生れ且生活した場所其物に非常に近い所で出來たのである。佛蘭西に歸つてから、自分はシリヤ加特力教徒の小屋の中で、左右に五六部の書を備へて大急ぎで

書きあげた素描の、枝葉の點を補ひ添削することに絶えずつとめたのである。

恐らく、多くの人々は、かやうに自分の作がとつた傳記體を遺憾とすることであらう。始めて基督教起源史をおもひついた時、自分のしたいとおもつたことは、取も直さず、實は人々が殆ど着手しない教義の歴史を書くことであつた。もしそれにしたら、イエスの名は殆ど出て來なかつたであらう。主として、如何にして彼の名の下に生じた思想が芽を吹き世界を蔽ふやうになつたかを示すことに執着したことであらう。しかしながら、その後自分は、歴史は單に抽象の遊戯で無いこと、教義よりも人間が大事であることを悟つた。宗教改革を成就したのは、聖寵とか贖罪などに關する或理論では無く、それはルウテルであり、カルヴァンである。波斯教、希臘精神、猶太教などは、あらゆる形に於て互に結合し得たであらう。復活やロゴスの教義は基督教と名のつく、唯一、壯嚴且充實した事實が無くとも、幾世紀かの間發達したことであらう。その事實はイエスの事業であり、聖パウロの事業であり、使徒の事業である。イエス、聖パウロ、使徒の歴史を作ることは、取も直さず基督教起源史を作ることである。それ以前の運動は本題には僅にこれらの異常人――これらの人は無論先立てる者と無關係ではあり得なかつた――

を說明するに役立つことに入つて來るばかりである。

過去の崇高な人々を蘇せらるための、かういふ努力の中には、一部の洞察推測は許されなければならぬ。偉大な生活は、小事實を單に集積しただけでは出來上らない有機的の全部である。深刻な感情が全體を抱擁し、それを統一する必要がある。かやうな問題には、藝術の理性が善良な指導者である。ゲエテのそれのやうな秀れた手法がそれに適用せられるであらう。藝術創造の根本條件は、各部分が互に呼應し、互に統御する體系を作ることである。この種の歷史に於ては、人がそれを眞とする大なる手懸りは、論理的であり、眞實的であり、何一つ調子外れの無い物語を構成するやう本文の繫ぎ合せに成功してゐることである。生命の內的法則、有機體の進行法則・調子漸層の法則が刻々顧みられねばならぬ。といふのは、發見さるべきものが、證明の不可能な外的の事情では無く、それは歷史の精神其物である。研究すべきものは、一般感情の正鵠であり、色調の眞理である。古典的談話の法則から出る一々の特色は、注意して警戒しなければならぬ。といふのは、語るべき事實は物の必然に一致したものであり、自然的のことであり、調和のあるものである。若し人々がその物語によつて有の儘を表現することに

成功してゐなかつたら、それは慥にそれを十分見得るところに迄達してゐないといふことである。フィディアスのミネルヴを原作通りに再現しようとして、乾からびた、尖々しい、技巧的のものが出來上つたと假定しよう。何をそれから結論として引出すべものであらうか。唯一つの事實、それは原作が趣味の解釋を必要とすることであり、原作と接近して、あらゆる與件が都合良く融け合つた一體を呈するやうになるまで、靜かに原作を懇望しなければならぬといふことである。さうしたら、一點一畫希臘の彫像其儘を得られること確實かといふに、さうでは無い。しかしながら、少くもさうすれば、カリカチュウルを獲ることは無いであらう。作全體の精神、その作品の存在し得た一面は獲られるであらう。

活きた有機體の感じを、自分は物語全體の組立に於ける指針とすることに躊躇しなかつた。福音書の編者が精神中にイエスの生活の極めて正しいプランを持ちながら、十分嚴正な年代上の與件に指導されてゐないことを證明するには、唯福音書を讀むことだけで十分であらう。しかし、パピアスはそのことを態々われらに敎へてゐる。さうして、使徒ヨハネから出たらしい證據で、自說に根據を與へてゐる。『その時』『その後』『この時』『それからかういふことがあつ

た』などは、異つた話を互に連續させる爲めの單純な中間語である。傳說がわれらに傳へてゐる混雜の裡にあつて、福音書によつて提供せられるすべての資料を除外するとしたら、青年時代、中年時代、老年時代の逸話や手紙を無秩序に與へて、一個の有名な人の歷史を書くのと比較して、敢て優れるイエスの歷史は書けなくなるであらう。同樣に、此上の無い程無秩序にマホメットの種々の時代の斷片を提供してゐるコオランは、その秘密を巧妙な批評に委ねることになつた。人々は略確實にその斷片の集められてゐる年代順を發見した。かういふ整理は、イエスの公生活がイスラム敎の創始者の生活より、比較的短く事件も少いのであるから、福音書に對してはずつと困難である。それにも拘らず、この迷宮に分け入るための糸を發見しようとする企は、無報酬の穿鑿と相場を定められるべきものでは無い。宗敎の始祖が、最初からして當時普及してゐた道德的の訓言と流行の勤行とに愛着を感じ、更に成熟して自己の思想を十分把握するやうになつてから、一種沈着な詩味のある、あらゆる論辯から遠ざかつた、純粹感情のやうな、爽かで自由な辯舌を好むやうになり、更に徐々と心が昂り、反對に會うて却て活氣を生じ、最後に論義となり、惡罵を敢てするやうになつたと想像しても、臆說としての大なる弊

害は無い。さういふのが明白にコオランの中で識別される諸期である。共觀福音書によつて極めて精妙な敏感をもつて採用された順序は、同じやうな進行を想像させてゐる。注意してマタイを讀むと、話說の配置に今指摘したやうな漸次的變化と非常に類似したものが認められる。

尙人々は、イエスの思想の進步を叙述しなければならぬ時に、われらの使用する言葉の不足を認めるであらう。この點について採用してある分類は、唯深遠複雜な思想を秩序的に示す上に必要缺くべからざる切目としてであることを讀者は認められるであらう。

若し主題を愛することが、それに光を與へることに役立つものであるとすれば、同樣に人々は其條件を自分と雖も缺いでゐない事を認めていただきたい。一宗敎史を作るには、第一にそれを信仰してゐたことが必要なことである。さうで無ければ、人々は何故この宗敎が魅力を有ち、人の信仰を滿足させるかの理解がつくまい。第二には、最早絕對的にそれを信仰してゐないことが必要である。何故かといふと、絕對信仰は眞摯な歷史と相容れることのできないものであるからである。けれども、愛は信仰無くとも間に合ふものである。人間の尊信を强ひる何れの形式にも屬しないからと言つて、其形式の含んでゐる善なり惡なりのものを味ふことを斷念する

のでは無い。刹那的出現のものは一として神性を盡したものが無い。神はイエス以前にも啓示された。イエス後にも神は啓示されるであらう。非常に不等であるが、またそれらが偉大であればあるだけ、自然發生であればあるだけ、益々神性があり、さうして人の意識の底にかくれて存在する神の表現は、何れも同一種類のものである。それ故、イエスは單にその弟子と自稱する者にのみ屬するといふ理由は無い。彼は人間の心をもつてゐるものの共同の名譽である。彼の榮光は歴史の外に斥けらるべき筈のものでは無い。彼無くしては歴史は解することのできないものであるといふことを證する時、人々は一層眞實の信仰を彼に捧げるであらう。

耶蘇

第一章

世界史上のイエスの地位

世界の歴史に於ける第一の事件といふべきものは、人類の最も優秀なる部分が、異教といふ漠とした名稱の下に含まれる舊い諸の宗教から、神性統一、三位一體、神子化身論の上に築かれた一宗教へと移つたその革命である。此改宗は成就するまでに約一千年を要したのである。しかしながら、件の革命の起源は、アウグスツス及びチベリウス皇帝の治世に起つた一つ

の事實である。當時、一個の傑れた人物が生活して居り、その人の大膽な創意とその人物の鼓吹した愛とによつて、人類將來の信仰の對象が創造せられ、その出發點が定められたのである。

人間は、動物と差別の出來たその時から、宗教的であつた。即ち自然の裡に現實以上の或物を認め、自已の爲めに死以上の或物を認めたのである。數千年の間、この感情は極めて奇怪な有樣で彷徨してゐた。多くの人種にあつては、それが今日尙オセアニイの或部分に認められるやうな、粗雜な形式の魔法者信仰以上に出なかつた。或民族にあつては、其宗教的感情がメキシコの舊い宗教の特性となつてゐるやうな、汚らはしい屠殺の場面を示すやうになつてゐるものもあつた。また他の地方は、殊にアフリカに於ては、拜物教即ち物質的の物に超自然の能力を與へて、それを禮拜する以上に出でないのがあつた。時に最も凡俗な人間を自已以上に高めることのある愛の本能が、往々凶惡殘忍に變ずることがあると同じやうに、宗教のその神聖な能力も、久しい間、人類から除去すべき病毒、賢者は廢滅を圖らねばならぬ誤謬罪惡の一原因といふやうに見えることもあつた。支那、バビロニヤ、埃及の、非常に遠い古代から發達した立

派な文明は宗教に或進步を遂げさせた。支那は速に一種の凡庸な常識に達して、それが此國に偉大な迷妄を禁ずることになつた。支那は宗教的天才の利益をも弊害をも知らなかつた。要するにこの國は、この方面からして人類の大傾向の方向に何等の影響をも與へなかつた。バビロニヤ及びシリヤの宗教は妙に肉感的の素質から解脫することが無かつた。これらの宗教は耶蘇紀元の四世紀五世紀に滅亡する迄、不道德の敎育場として殘つて、それでも時には一種の詩的直觀からして、神の世界に關する光を隙間から洩すこともあつた。表面は一種の拜物敎であるにも拘らず、埃及は疾くから哲學的敎義及び高級の象徵主義を有してゐた。疑がひもなく、無論それらのある洗錬された神學の解釋は原始的のものでは無かつた。明確な觀念を有つてゐる人間は、決して象徵を觀念に被せて喜ぶものでは無い。大抵、長い反省の結果、及び人の精神が不條理を以て我慢することの不可能なところからして、意味不明になつてゐる舊い表象を辿つて思想を求めるのである。しかしながら、人類の信仰が生れて來たのは埃及からでは無い。ある基督敎徒の宗敎中に、幾多の變化を經て、埃及とかシリヤなどから來てゐる要素は、大した結果の無い外形か、さも無ければ最も純化した宗敎が常に把持してゐるやうな、殘りの滓である。

われらのいふ諸の宗教の大缺點は、その迷信的な性質であつて、それらの宗教が世界に投じたものは、取も直さず幾百萬の護符と石符とであつた。俗界の專制主義によつて愚にせられ、個人から殆どすべての自由を奪つてゐる制度に慣らされてゐた人種から、何等偉大の精神的思想は出ることができなかつたのである。

靈の詩歌、信仰、自由、誠實、献身は、ある意味に於て人類を作り上げた二大種族と共に世界に現はれたのである。その種族は、印度歐羅巴種族とセミチツク種族とである。印度歐羅巴種族の最初の宗教的直觀は、根本的に自然主義のものであつた。しかしながら、それは深遠な精神的自然主義であつた。人間によつて自然を戀ひ抱かれるものであり、無限感の溢れた甘い詩歌であり、後に、沙翁ゲエテの人達が表現するすべてゼルマンセルトの天才の原理となるものであつた。それは反省された宗教のものでは無かつた。それは沈鬱、溫藉、想像のものであつた。それは何よりも眞摯が第一のものであり、それが道德宗教の根本條件であつた。けれども人類の信仰は其處から來ることにはならなかつた。何となれば、これらの舊信仰は多神教を解脫することの甚だ困難なものであつて、十分明確な信條に到達しなかつたからである。婆羅門教は、印度の所有してゐると見られる驚くべき保守の特權によつて、僅に今日迄生命を存したのである。佛教は西方に向つての企圖に悉く失敗した。ドルイド教は全く國民的の形となり、世界的の力の無いものになつた。希臘の宗教改革の企であつたオルフオイス教、神祕說などは人々に確實な慈味を供給するものとしては不十分であつた。波斯だけは殆ど一神教で聰明な組織の教義的宗教を成就する迄になつた。しかしながら、その組織其物は、模倣或は借物であつたとする方が極めて眞相を穿つてゐるやうである。要するに、波斯は世界を改宗させなかつた。反對に波斯の方が、回教の宣布した神性統一の旗の國境に現れるのを見た時之に改宗した。

セミチツク種族(1)こそ人類の宗教を作つたといふ光榮を荷つてゐる。歷史の限界外で、既に腐敗せる世界の混亂に染まぬ淸い天幕の中で、遊牧民の長老が世界の信仰を準備したのである。シリヤの肉感的宗教に對する激しい反感、儀式の非常に單純なこと、殿堂の全然無いこと、偶像が低下して詰らぬ天使になつてゐること、以上がその優れた點である。遊牧のセミイトの部族の中で、ベニ・イズラエルの部族は既に將來の莫大な運命を有つてゐる物と看做されてゐた。埃及との古い關係——其處から廣さの測定し難い採用と參考とがある——は、益彼等の偶像崇

拜撰斥の念を増すばかりであつた。太古に石表に書かれたもので、この部族の偉大な解放者モオゼのものとされてゐる『律法』即ちトラが、既にその一神教の宗典であつて、埃及乃至カルデヤの制度に比較すると、社會的平等と道德性との有力な萠芽を含んでゐた。スフンクス(2)を題畫としてある携帶のできる記錄があつて、その兩側に挺を挿入する爲めの耳の附着してゐるものが、彼等の宗教資料の全部であつた。それに民族の神聖物、遺物、記念物、及び『書物』――常に部族の公開書であるが極めて愼重に記載してゐた――を一緒にしてあつた。挺を管理し携帶記錄を守護することに當つた家柄が、常にその書の傍に居り、それを管理するところから、急速に重んぜられることになつた。けれども、其處から將來を決定する制度は生れなかつた。希伯來の祭司は古代の他の祭司とは著しく異つてゐる。イズラエルを神教的政治の諸民族中から根本的に別個のものとした性質は、聖職者が常に個人的靈感に從はせられることであつた。祭司以外に、一々の遊牧の部族は各ナビ即ち豫言者といふ一種の活きた神託者を有してゐて、解決に高級の洞察力を要する困難な問題に際してその意見を聽くことになつてゐた。團體或は派に組織されてゐるイズラエルのナビは非常に優越の地位にあつた。民主的の古い精神の擁護者で

あり、富者の敵であり、あらゆる政治組織及びイズラエルを他民族の方向に導きさうなことには反對者であつた彼等が、猶太民族に於て宗教を第一位とする眞の機關であつた。夙くから、彼等は無際限の希望を表白してゐた。さうして幾分その非政治的忠告の犧牲となつて、この民族がアッシリヤの勢力によつて紛碎された時に、彼等は無限の世が猶太に保留されて居り、他日エルサレムが世界の首都となり、人類は悉く猶太人となるといふことを宣言した。彼等から見れば、彼等の殿堂の在るエルサレムは、山上の一都會であり、そこを目指してあらゆる諸民族の馳せ參ずるところであり、また其處から世界の捷が出づべき神託の所として、またイズラエルによつて平和になつた人類が、エデンの歡喜を見出す理想的天下の中心として映じたのである(3)。

未曾有の調子が既に殉教者を興奮させ、『かなしみの人』の力を祝ふためのやうに響いてゐた。エレミヤのやうに、エルサレムの街路を彼等の血で彩つた崇高な忍耐者の一人に關して、ある靈感を受けた者が、『神の召使』の苦腦と勝利との讃歌――それにはイズラエルの天才の豫言力が悉く凝集してゐるやうに見える――を作つてゐる。『彼はかよわき矮樹の如く、燥きたる土よ

り出づる芽生の如く育ちたり。彼はうるはしさ無く、美しさ無し。彼は侮られ、人に棄てられ、面を向くる人無かりき。辱めを負ひて空しき人の如くおもはれたり。そは彼われらの惱みを負ひたればなり。そは彼われらの哀みを擔ひたればなり。されど汝等彼を神に打たれ、神の御手に苦しめらるる人とおもへるならむ。彼はわれらの罪のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、身に懲罰を受けてわれらに安きを與ふ。その打たれし痍によりて癒えたるなり。われらは迷へる羊の如くにして、各迷ひたり。然るにエホバわれらの凡ての者の不義を彼の上に置き給へり。彼は苦めらるれども、自らは謙だりてその口を開かず。屠殺に牽かるる羊の如く、毛を切る者の前に默す羊の如くにして其口を開かざりき。彼の墓は惡しき者のそれとおもはれその死は穢れたる者のそれとおもはる。されど、彼生命を献げたらん時より、彼は數多の子の生るるを見、エホバの幸彼の手に榮えゆかん。』(4)

同時に深刻な改訂がトラの中にも行はれた。例へば申命記のやうに、モオゼの眞の律法を示すものと主張する新しい章句が生れて、實際には舊時の遊牧民の精神とは非常に異つたものを創めたのである。その精神の主なる特色は、甚しい狂熱のある事であつた。狂的の信者はエホ

バの信仰から離れるものを、何でも構はず反對して、絶えず暴動を惹起してゐた。宗教的犯罪者に死刑を課する一個の血の法典が遂に出來上るやうになつた。敬虔心は、大抵の場合、劇烈と穩和との不思議な對立を示してゐる。士師記時代の粗雜單純の頃には無かつた此熱心が、それ迄世界に無かつた感激的說教の調子や、優しい感動の言葉を皷吹することになつた。非常に社會問題に向ふ傾向も既に感じられてゐた。ユトピヤと完善な社會を夢想することが法典の中に加はるやうになつた。家長道德と熱烈な信仰と原始的直觀と、エゼキヤ、ヨシヤ、エレミヤなどの精神に溢れてゐる敬虔と精緻との混合してゐる所謂五書が、今日われらの見るやうな決定的の形になり、幾世紀にも亘つて、この民族の精神の絕對的基準となつたのである。

この偉大な書物が一旦作られてから、猶太民族史は遮ぎることのできない勢にひかれて開展する。西亞細亞に繼續して現れる諸の大帝國が、地上の王國を建てる希望を全くこの民族に失はせ、更に一種の暗い情熱をもつて宗教的空想にこの民族を投ずることになつた。民族的王統とか政治的の獨立などはあまり顧みないで、自由に自己の宗教を行ひ、自己の慣習を續けて行くことを得させてくれる政府であれば、如何なるものでも承認するやうになつた。イズラエルは、

今後最早自己の宗教的熱心家以外の指導を仰がず、神性統一のそれ以外の敵を持たず、律法以外に祖國を有たないことになる。

ところで、注意しなければならぬことは、この律法なるものは全く社會的であり、精神的であることである。それは現在生活の高い理想に徹して居り、それを實現するために最良の方法を發見してゐると信じてゐる人々の事業であつた。凡ての人の確信は、十分トラを遵守する時必ず完全な幸福を獲られるといふのである。このトラは、殆ど抽象的の權利ばかりに携はつて、個人の幸福、道德の問題には觸れない希臘羅馬の『法典』とは何等共通點が無い。猶太法から生ずる結果は、社會的のもので、政治的のもので無いこと、及びこの民族が目標として努めてゐる事業は、神の王國であつて、行政的の共和國とか、世界的の制度とかで無く、民族主義でも祖國でも無いといふことを人々は第一に感ずるのである。

幾多の逆境を通じて、イズラエルは感心にこの天職を維持し繼續してゐる。エスドラ、ネヘミヤ、オニア、マカベ家の人々などの敬虔な人達、律法熱に浮かされた人達が、昔の制度を擁護する爲に相續いて現れてゐる。イズラエルは聖者の民族であり、神から選ばれ、契約によつて神に結びつけられてゐるといふ思想が、漸次に動かすことのできない根を張つて來た。莫大の企圖が人々の頭に滿ちてゐた。印度歐羅巴の古代は悉く起源に樂園を置いてゐた。その詩人は何れも消え去つた黃金時代を嘆き悲んだ。イズラエルはその黃金時代を將來に置いた。宗教的の人々の不朽の詩歌、詩篇は、この敬虔の昂奮から花を開いたものであり、聖い且憂鬱な悔調をもつてゐる。イズラエルは眞に神の民族となり、之に反して、その周圍では、異教の諸宗教が漸次に衰へ、波斯ハビロニヤでは、公然の香具師的のものに墮し、埃及とシリヤでは、粗雜な偶像崇拜に陷り、希臘拉丁の世界では滑稽物に化した。耶蘇紀元の最初の數世紀間に基督教の殉教者の成したこと、及び迫害をした正統派の犧牲者が現代迄基督教の內部で成したことを、猶太人は、基督紀元前の二世紀間に行つた。彼等は宗教的の迷信及び物質主義に抗する生ける駁擊者であつた。異常な思想運動が最も反對な結果に到達して、その時代に、彼等をもつて世界中の最も顯著な、最も獨創的な民族とした。彼等が地中海のあらゆる沿岸に散亂したことと、パレスチナ以外の地で採用した希臘語の使用とが、小民族に切斷されてゐた古代社會の一つも例を示したことの無い宣傳の道を準備したのである。

マカベウス家に至るまで、猶太教は、他日人類の宗教となることを飽迄告られてゐたにも拘らず、古代の他の凡ての諸宗教と同じ性質を帶びるやうになつた。それは家族及び部族の宗教となつたことである。イズラエル人は自己の宗教を最良のものであると確信し、異國の神々のことについては輕蔑した口つきであつた。さうして眞の神の宗教は、唯己等のためにのみ出來てゐるものであると信じてゐた。人々が猶太の家庭に入ると(5)、エホバの信仰を受納れてゐた。しかし、唯それだけのことであつた。一人のイズラエル人も、外國人をアブラハムの子孫の世襲財産であつた宗教に、改宗させようとは毫も想はなかつた。之に較べると、エスドラ、ネヘミヤ以來の敬虔派の精神の發達は著しく、確固な且論理的な考方を生じつつあつた。この方の猶太教は絶對的の眞宗教となつた。希望する者には人は、何人にも其中に加入する權利を與へた(6)。間も無く、それは出來るだけ多數の人を招致する敬虔な事業となつた(7)。バプテズマのヨハネ、イエス、聖パウロ等を、低級な種族觀念以上に出させた立派な感情は、無論まだ存在してゐなかつた。奇怪な矛盾であるが、さういふ改宗者は尊重せられること殆ど無く、輕蔑をもつて遇せられてゐた(8)。しかしながら、唯一宗教の觀念、祖國、血液、法律以上の或物が世界にあるといふ觀念、及び後に使徒殉教者を作ることになる觀念は、既に築き上げられてゐた。世俗的の幸運如何に拘らず、異教徒を深く憐む情が、これ以後全猶太人の感情である(9)。確固不拔の模範を供給する目的となつた種々の傳說(ダニエルとその仲間、マカベ家の母と其七人の子アレキサンドリア競馬場物語)(10)によつて、この民族の指導者等は、決定せる宗教制度に狂熱的愛着を成す事卽德なりといふ觀念を人々に注入することに特に意を注ぐやうになつた。

アンチオクス・エピファネスの迫害は、この觀念を情熱化して殆ど狂亂に至らせた。それは二百三十年前後のネロの下に起つたことと幾分酷似したところがあつた。激怒と絶望とは、信者の人達を幻影と夢想との世界に投じた。玆に最初の默示錄『ダニエル書』が現れた。それは豫言的精神の再生の如きものであつた。しかし、昔のものとは甚しく異つた形のもので、世界の運命について遙に廣い見解のものであつた。ダニエル書は幾分救世主的希望に最後の表現を與へたものであつた。メシヤは最早ダビデ、ソロモンのやうな王で無く、神教政治家のモオゼ風のキロスのやうな者でも無く、それは雲間に姿を現す『人の子』(11)であつて、人類の姿を藉り、世界審判の任務を帶び、黃金時代の主宰者たるべき超自然の人物であつた。恐らく、オル

ムズドの御世を準備する任務を帶びた、來るべき波斯の大豫言者、ソシオシュがこの新しい理想に多少の資質を供給したことであらう(12)。要するに、その名の知れぬダニエル書の著者が、やがて世界を改造する宗教的事件に決定的の影響を與へた。彼は新しい救世主的精神の舞臺面と術語とを創作した。從つて、イエスがバプテズマのヨハネに就いて言つた『彼に至るまでは豫言者、彼以後は神の王國』といふ言葉を彼に適用することができる。それから數年後、同じ思想が長老エノクの名の下に再び現れた(13)。默示派と直接關係のあつたらしいエッセネ主義が、同じ頃に生れつつあつた。さうして、軈て人類教育のために構成される筈の、大なる訓錬の最初の素描の如きものを示しつつあつたのである。

けれども、これ程根本から宗教であり情熱的であつた運動が、基督教中に發生するあらゆる葛藤の中に現れたやうな特殊の教義を、原動力として有してゐたと信ずべきものでは無い。此時代の猶太人は、これ以上の非神學者は無い位の者であつた。彼等は神の本質に關して思索をしなかつた。その最初の萌芽として漸く現れかけてゐた、天使の信仰、人類終末の信仰、神性單一の信仰などは、自由な信仰であり、個人個人が自己の精神傾向に任せて行ふ冥想であり、それは群衆のまだ耳にしたことの無いものであつた。最も正統を受繼いでゐた人々も、すべてさういふ特殊な想像の外に止まつて居り、モオゼ主義の簡素に執着してゐたのである。正統基督教が教會に授けたものに類似する何等の教權も、當時には存在してゐなかつたのである。基督教會の歴史を、老大な論駁の歴史としたあの定義熱の始まるのは、實に三世紀以後のことであつて、基督教が辯證と形而上學とに熱中する理屈好きの種族の手に移つた時からである。猶太人の裡にあつても議論はあつた。熱心な各派は、爭ひの有るあらゆる問題に、反對の解釋を齎らした。しかし、タルムッドがわれらの爲めに主要なものを殘してゐる。その論戰の中には唯の一言も思索的神學の言葉があるのでは無い。律法は正しいものであるから、またそれを十分遵守すると幸福を與へるからといふ理由で、律法を遵守し維持するのが、實に猶太教の全部であつた。何等の信條も何等の理論的信經も無かつた。最も極端なアラビヤ哲學の弟子であつた、モオゼ・マイモニデスが猶太會堂の權威となることのできたのは、彼がよく宗法に通じてゐた學者であつたからである。

末期アスモニヤ朝の治下及びヘロデ朝には、宗教熱の一層增大するのが認められた。これら

の治世には宗教運動が間斷無く起つてゐた。政權が俗化し、無信仰の者の手に移るに從つて猶太民族は益〻地上を離れて生活し、漸次に、民族中で行はれた奇異な努力に引込まれるやうになつた。他の光景に氣を奪はれてゐた世界は、東方の忘れられた此一隅に起つてゐた事柄については、聊かも知らなかつた。それでも、其時代の趨勢に通じてゐた人々は、よくそれに氣がついてゐた。溫和で洞察の明のあつたヴイルギリウスは、隱れた反響によつてであらうか、第二のイザヤに響應してゐた觀がある。卽ち一子の誕生が、彼を世界的新生の夢に投げ込んでゐる(14)。その夢は尋常のものであり、一種の文學の如きものとして、人々は託宣詩の名をもつて覆うた。最近に羅馬帝國の出來上つたことは人々の想像を逞しうさせてゐた。平和に入つた大紀元と、長い革命期の後に人々の感じた沈鬱の感じが與へる印象とが、無際限の希望を四方に生れさせつつあつたのであつた。

猶太に於ては、その期待が絕頂に達してゐた。幾多の神聖な人物、その中にはイエスを抱いたと傳說の指摘してゐるシメオン、パヌエルの娘で女性豫言者と考へられたアンナなどが、イズラエルの希望成就を見ずして、此世から引取られることのないやうに神に願つて、斷食祈禱をし、一生を殿堂の周圍で過してゐた。人々は强大な孵化作用を感じ、未知の或物の近づいてゐることを感じてゐた。

明察と空想との交錯してゐるこの混合、希望と失敗との交代、及び絕えず怖るべき現實に蹂躙される憧憬の念が、最後に、無比の人物に彼等の代辯者を發見した。この人物に對して、世界の信念は『神の子』の尊稱を授けた。それは全く正しいことであつた。何となれば、彼は他の何人にも比較されることのできない、また恐らく到底今後も比較されることの無い一歩を宗教に成就させたからである。

第二章

イエスの幼年時代と青年時代　彼の最初の印象

イエスは、彼より以前には一向有名なものの無かつた、ガリラヤの小さな町ナザレ(1)に生れた。彼は一生涯『ナザレ人』の名をもつて呼ばれた。彼を一代記中にベツレヘムで生れさすことになつたのは、かなり苦しい故事つけによつてなされたに過ぎない。われらは、この想像說の發生した動機と、及び、如何にそれがイエスに附せられた救世主としての任務のやむを得ない結果であつたかを後に見ることにしよう。彼の誕生の精確な年月は解らない。それは、多分羅馬曆の七百五十年頃、卽ちあらゆる文明國民が彼の生れたと信ずる日から起算してゐる紀元元年の數年前、アウグスツス皇帝の治世中に起つたことである。(2)

彼に與へられたイエスといふ名は、ヨシユヤの轉化したものである。それは極普通の名前であつた。しかし、自然に人々は救世主の役目に對する暗示や神秘などを、後になつてそれに索めるやうになつた。恐らく、イエス自身も、あらゆる神秘家のやうに、この事について興奮したことであらう。かやうに、何の氣も無く子供につけた名前が機緣となつて、歷史上に大使命を果した例が再三で無い。熱烈な性質の者は、自己に關する事柄を決して偶然視して等閑に附するもので無い。その人達にとつては、萬事が神によつて定められてゐるのであつて、極めて詰まらない事情の中にも、優越な意志の證跡を認めるものである。

ガリラヤの住民は、土地の名前(3)が示してゐるやうに、非常に雜多であつた。この地方はイエス時代の住民間に、猶太人で無い者――フエニキヤ人、シリヤ人、アラビヤ人、及び希臘人――が澤山算へられた。かういふ混合地では、猶太教に改宗することも決して稀で無かつた。だから、此處で人種問題を惹起し、人類間の血の差別を打消すことに最大の功獻をした人の血管中に如何なる血が流れてゐたかを研究することは不可能である。

彼は民衆の列から出た(4)。彼の父ヨセフ、母マリヤは、平凡な身分の人であつて、勞働によつて生活する職人であつた。それは近東地方で極普通の、氣樂でも無ければ窮迫といふ程で

も無い境遇であつた。われらの國で生活を愉快便利にする物に對して成す要求を悉く斥けるかやうな國々の極端な單純生活は、富者の特權を殆ど無用にして、何人をも自發的の貧民とするのである。一方に於ては、藝術趣味、及び物質生活を優美化する事物に對する趣味の、全く缺けてゐることが、何不足無い家に殺風景の感じを與へた。回教が聖地全部を通じて各所に齎して來た卑俗不快な或物を別にすると、ナザレの町はイエス時代に於ても、恐らく今日現存のものと大した差異は無かつたであらう。子供の時彼の遊戯した街を、われらは石ころの小路とか小屋を距ててゐる小さな露地の中に認めることができる。ヨセフの家は、入口から明りを取つてあり、仕事場にもなれば、同時に臺所にも寢間にもなり、道具といつては、一枚の吳莨と、土間に敷く若干の座蒲團と、陶燒の瓶一つ二つと、彩色した一個の櫃のある位の、あはれな店舗に必ず酷似してゐたことであらう。(5)

その家族は、一組の結婚からか、それとも數組の結婚から出たものか、かなり大勢であつた。イエスは兄弟もあり、姉妹もあり、彼はその長子であつたらしい(6)。何れもこれといふ者にはならなかつた。といふのは、彼の兄弟として擧げられてゐる四人の中の、少くもヤコブといふ一人は、基督教發達の初年に大變重要な位地に達してゐるが、何れも彼の從兄弟であつたらしいからである。事實、マリヤには同じくマリヤといふ一人の姉妹があつて、それがアルピヨ或はクレオパといふ者(この二つの名前は同一人を指すらしい)と婚し、數人の子の母となり、その子供等はイエスの最初の弟子の中で重要な役目を演じた。眞の兄弟等が彼に反對してゐた間に、この若い師に弟子入りした彼の從兄弟等は『主の兄弟』といふ肩書を得た。イエスの眞の兄弟、並びに彼の母も、彼の死後始めて有名になつた。その時になつても、改宗がより自發的でありその性格もより多くの獨創性に富んでゐた從兄弟等に比して、彼等の尊重されかたが同じであつたとは想はれない。福音書の記者がナザレの人々を口にする際に、兄弟の列擧を人情通りにすると、クレオパの子等の名前が、まづ第一に記者の頭に浮ぶくらゐの程度に、實の兄弟の名は有名で無かつた。(7)

彼の姉妹はナザレで結婚した。彼は最初の青年時代の數年を此處で過した。ナザレは、エスドレロンの平野を北に塞いでゐる群山の頂上に、廣く開けてゐる地面の襞の中にある小さな町であつた。人口は現今三千乃至四千の間であり、昔と大して變つた筈は無い。當時の猶太のあ

らゆる市邑のやうに、ナザレは、樣式も無い建築の小さな家々の集合であつて、セミチツク諸國の村落の示す、あの貧弱な沒趣味の光景を呈してゐたに相違無い。想像するところ、今日レバノンの最も富裕な地方に立ち並んでゐる、内も外も雅致の無い、しかし葡萄や無花果の木と交叉して非常に快感を與へずには置かぬ、あの石造の立體の多くと異つたものでは無かつたのであらう。固より郊外は美しい。さうして世界中何處にも、絶對的幸福の空想をする上に、こんなによく出來てゐる所は無いであらう。今日でも、ナザレは愉快な滯在地であつて、非常な荒廢の中にあつて、壓迫して來る重荷から多少心の安まる、恐らくパレスチナ唯一の場所柄である。人民は親切で快活である。庭は瑞々しい綠である。六世紀の末に、殉教者のアントニウスが郊外の豐饒を美しい繪のやうに書いて、之を樂園に比較してゐる。西方の或谷などは十分彼の叙述を裏書してゐる。この小さな町の生命と樂みとの昔の中心地であつた泉は、今は破壞されてゐる。その龜裂した堀割には、最早僅に濁つた水があるばかりである。しかしながら、夕方其處に集る婦人の美しさ、既に六世紀に記され、娘マリヤの天資を認められるといつた、その美しさは著しく殘つてゐる。倦怠の趣のこもつた優美さは全くシリヤ型である。マリヤが毎

日のやうに其處に居り、瓶を肩にして、世に出ないで埋もれた女達の行列の中に加はつたことは必定である。殉教者アントニウスは、他所では基督教徒を馬鹿にする猶太の婦人が、此處では親切であるといふことを記してゐる。今日でもナザレでは、宗教的憎惡の念が他の土地よりも激しく無い。

町の眼界は狹いが、少し登つて、一番高い家を見降すくらゐの高地の、不斷に微風を受けてゐる邊に達すると、遠近の眺めが立派である。西には、海に飛び込むやうな險しい端を果てとしてゐるカルメルの連峰が續いてゐる。次に展開して來るのは、マゲドオを見晴してゐる雙つの峯、長老時代の聖地のあるシケムの地の山々、ゲルボアの連峰の繪のやうな小さな群の、スレムやエンドルの床しい或は怖しい記憶が纏はつて居るもの、古代に乳房と譬へられた、圓い形のタボルなどである。スレムの山とタボルとの間の低地から、ヨルダンの谷と、東の方に連續の一線を成してゐるペレアの高原とが見え隱れしてゐる。北には、サフエドの山々が海の方に傾斜して、サン・ジヤン・ダアクルの港を隱してゐるが、カイフアの灣を見せてゐる。かういふのがイエスの眼界であつた。神の王國の搖籠地であつたこの樂しい一圓の地が、幾年かの間

彼の世界であつた。彼の一生も殆ど幼年時代の親しい範圍以外に出なかつた。といふのは、遠く北の方には、ヘルモンの山腹に、異邦人の世界に最も突出してゐる先端のカイザリヤ・ピリピが見えるかとおもはれ、南の方には、既に美しさの劣るサマリヤの山々の背後に、抽象と死との熱風によつて乾き切つてゐる寂しい猶太を豫感することができるからである。

依然として基督教で、しかも起源を尊重させることに就いて、もつと善い觀念に達した世界が、幼稚な時代の敬虔な人々の執着したつまらぬ僞の靈場を、公正な聖地によつて代へようといふ希望を起すとしたら、ナザレのこの高地にこそ、當にその殿堂を建つべきである。基督教發現の地點であり、また、その開祖の活動が輝き出たその中心地たるこの場所こそ、あらゆる基督教徒の祈禱し得る大なる教會の聳ゆべき所である。また、大工のヨセフと、彼等の谷間の地を越えなかつた、忘れられた數千のナザレ人との眠つてゐるその地上に於てこそ、世界の何處よりも、人事の流を冥想し、最も親しい本能に浮世の與へる無情を慰め、無數の蹉躓を通じてまた、常に徒勞であるにも抱らず、世界の追究してゐる神の目的に關しての確信を獲る上に哲學者にとつて此處に勝る場所は無いであらう。

第三章

イエスの教育

明媚と壯大とを兼ねたこの自然が、イエスの全教育であつた。無論、東洋の風習に從つて、子供の手に一冊の書物を渡し、それを暗誦するまで小さい友達と調子良く繰返す方法で、彼は讀み書きを學んだ。けれども、彼が希伯來の書物を、その原語の儘で十分理解したかは疑はしいことである。傳記作者は、アラム語の飜譯によつて、彼に希伯來文書を引用させてゐる。彼の舊約解釋の原則は、われらが彼の弟子によつて想像するところでは、當時流行してゐたタルグミム及びミドラシムの如き猶太の聖書譯註の精神となつてゐるものと大變類似してゐた。

猶太の小都市にある學校教師は、ハザン即ち會堂の讀經者であつた。イエスは、學者即ちソフエリム（ナザレには多分それが無かつた）のもつと高い學校には殆ど通はなかつた。從つて、俗人の目に對して知識の權利を示すやうな肩書を一つも有つてゐなかつた。と言つても、イエスを

われらの無學者と呼ぶやうな者であつたと想像するのは大なる間違であらう。學校教育の有無は、われらの間では、人としての價値の上に、有る者と無い者との間に甚しい差別をつけるものである。東洋に於ては、また一般に、ずつとの古代に於ては、われらと同樣で無かつた。われらの國で學校に行かぬ者が、孤獨且全く個人的生活の結果から、依然としてつづけてゐる粗野の狀態は、常に個人間の接觸によつて、精神的教化及び殊に時代精神の繼承せられる社會に於ては迚も見られない光景である。一人の教師にも就かなかつたアラビヤ人が、それにも拘らず非常に知名の人となることが毎度ある。それといふのは、天幕が、一種公開の常設學院のやうなもので、修養の十分ある人々に遭遇することからして、其處に知的乃至文學的大運動が生れるからである。學動の優雅なこと、理智の精妙といふやうなことは、東洋に於ては、われらが教育と呼んでゐるものと、何等の共通點が無い。之に反して、所謂學校上りの人々こそ却て衒學者とか無教育者と見られるのである。われらの國に於ては、人を下級に墮とす無學といふことが、かういふ社會狀態では、反對に大事を成す條件であり、大なる獨創の條件である。

イエスが希臘語に通じてゐたといふことも信じられない。此言葉は、政權に參與する者とかカイザリヤのやうに、異教徒の住んでゐる都市以外にはさう普及してゐなかつた。イエス自身の用語は、當時パレスチナで話されてゐた希伯來語の混つたシリヤの方言で(一)あつた。況や彼は希臘の文化に就いては全く知らなかつた。その文化はパレスチナの博士達に擯斥されてゐた。博士達は『豚を飼ふ者とわが子に希臘の學問を教へる者』とを同じ呪詛の中に容れてゐた。要するに、それはナザレのやうな小さな町には侵入してゐなかつたのである。尤も博士等の呪詛にも拘らず、既に若干の猶太人は希臘文化を受け容れてゐた。希臘精神と猶太精神とを混融させる目的の企を、二百年近くも以前から繼續してゐた埃及の猶太派のことは言はずとしても、ダマスのニコラスといふ猶太人は、當時最も知名な、最も教育のある、また最も其世紀に重んぜられた一人であつた。間も無く、ヨゼフスも完全に希臘化した猶太人の他の一例となるのであつた。もつともニコラスは、唯血統上の猶太人であつただけであり、ヨゼフスは當時の人の間で例外であつたと言はれて居る。それに埃及の分離派は、タルムッドにも、猶太の傳統にも、何等の記憶を有つてゐない位に、全くエルサレムから絶緣してゐたのである。確實なところ、エルサレムでは希臘語の研究は微々たるものであり、希臘語の研究は危險なもの、進

んでは恥辱とまでも考へられ、高々髪飾りとして婦人の役に立つ位のものであると云はれてゐた。さうして律法の研究だけが、高尚なもの、眞面目な人士に相應しいものとおもはれてゐた。子供に『希臘語』を教へるに適した時を尋ねられた或ラビの學者は『汝日夜學ぶべし』と律法について記されてゐるから、晝でも夜でも無い時にせよと答へたとのことである。(2)

だから、直接にも間接にも、希臘の學説の要素は、一つもイエスには觸れてゐなかつた。彼は猶太教以外のことを全く知らなかつた。彼の精神は、廣く變化のある教養があれば、却て微弱にする憂の常にあるその天眞爛漫なところを保つてゐた。猶太教の中にあつても、彼のそれと屢々と並行してゐた多くの努力に對して、彼は沒交渉であつた。一方に於て、エッセネ教徒やテラプウト教徒(3)の禁欲主義は、彼に直接の影響は無かつたやうである。他方に於て、アレキサンドリヤの猶太派によつて企てられた宗教哲學の立派な論文——彼と同時代の人たるフイロンがその優秀な代辯者であつた——は彼の知ることろでは無かつた。彼とフイロンとの間に認められる多くの類似、福音書とアレキサンドリヤの有名な思想家の著述との間に、反響の如く現れてゐる、神の愛、慈悲、神の中に入つて休息することなどの、優れた訓言は、時代の

要求があらゆる大思想家に鼓吹した共通の傾向から來てゐるものである。

彼にとつて幸なことには、尚更彼は、エルサレムで教へられてゐて聽てタルムッドを構成することになる、奇怪な煩鎖哲學を研究してゐなかつた。假に、或パリサイ人が既にそれをガリラヤに傳へてゐたとしても、彼は其人々とは交際してゐなかつたのである。彼が後にその幼稚な教學に觸れた時、それは唯彼に嫌厭の情を起さすだけであつた。けれども、ヒレルの教訓だけは彼も知らずにはゐなかつたと想像することができる。ヒレルは彼よりも五十年前に、彼のものと多大の類似點のある訓言を述べてゐる。已を卑うして耐へたその貧困、その性格の溫和、僞善者及び祭職者に反對したことなどによつて、若しイエスの如き高遠な獨創性についても教師といふ言葉を用ひることが許されるとしたら、ヒレルは正にイエスの先生であつた。

それよりも舊約書を讀む事の方が彼に多くの印象を與へた。聖典は主要なる二つの部分、即ち今日われらの所有する如く、律法の五書と豫言書とから成つてゐた。夥しい譬喩的解釋がその何れの書にも適用せられ、實際には無いものであるが、當時の要求に應ずるものをそれから引き出さうとしてゐた。この國の舊法で無く、ユトピヤや、作爲的法律や、敬虔な列王時代の信仰

から出た欺瞞などを現してゐる律法が、この國民の最早自ら政治をしなくなつてから以後、細かい解釋の盡きない主題となつた。豫言書と詩篇との、殆ど其中の隨所に見出される多少神秘的なところが、メシヤに關するものと信じられ、人々は此民族の希望を實現すべき者の典型を豫めこの中から究めようとしてゐた。イエスも、此譬喩的解釋に對しては、すべての人と趣味を同うしてゐた。しかしながら、エルサレムの低級な解釋家には洩れてゐた聖書の詩歌が、彼の立派な天才に啓示の豐かなものであつた。律法は彼にとつて多く興味が無かつたやうである。彼はもつと優れたものすら作り得ると信じてゐた。しかしながら、詩篇の宗教詩は、彼の叙情的の心とともに譬へやうも無い調和を示したのである。その崇高な歌詞は、一生涯彼の食料となり支持となつた。豫言者、殊に、イザヤ及び俘囚時代の彼の繼承者の、輝かしい將來の夢、其熱烈な雄辯、恍惚たらしめる形容の混つてゐる悪罵の言葉などは、眞に彼の教師であつた。彼は無論多くの經外書――それはかなり近代の著述で、それらの作者が、最早極めて古い者にで無ければ與へられてゐなかつた權威を獲ようとおもつて、豫言者や長老などの名を冠してゐた――をも讀んだ。就中ダニエル書(5)は彼を感動させた。アンチオクス・エピファネス時代の熱情のある猶太人によつてつくられ、昔の賢人の名を冠せられたこの書は、近代精神の摘要であつた。歴史哲學の眞の創始者であるところの此作者は、世界の運動と諸帝國の相續とを唯猶太民族の運命に隷屬する一事實と認めることを敢てした始めての人である。イエスは青年時代からこの崇高な希望に囚はれてゐた。また彼は當時聖書同樣に崇められたエノク書及び民衆の想像に大運動を養つた同種類の他の書物をも多分讀んだことであらう。メシヤの君臨、並びにその光榮と恐怖、交互に崩壞する諸民族、天地の大變動などが、彼の想像を養ふ日常のものであつた。さうして、これらの變事は、近い將來のものと看做されてゐたので、また多くの人々がその時機を豫測しようと力めてゐたところからして、われらが誘つて行かれると、超自然的の幻影と見えることが、彼にとつては、何よりも完全に單純な且當然の事と見えたのである。

彼が世界全般の狀態を少しも知らなかつたことは、最も正確なものと認められてゐる彼の言説の一句一句から認められることである。地上はまだ數個國に分れて、互に戰爭をしてゐるものと彼は想つてゐたのである。彼は『羅馬の平和』をも、彼の時代に既に始つてゐた社會の新しい狀態をも、全く知らずにゐたやうである。彼は羅馬帝國の權力について明確な觀念を毫も

有つてゐなかつた。唯『カイザル』の名前だけが彼の耳に達してゐた。ガリラヤ及びその附近のチベリヤ、ユリヤ、ヂオカイザリヤ、カイザリヤに、彼はヘロデ王家の豪奢な工事の行はれるのを見た。諸王はその壯麗な建築によつて、羅馬文明に對する諂歌と、アウグスツス皇帝の一家に對する忠誠とを證せんとしたのであつた。それらの名は運命に翻弄されて、今日では酷く打つて變つて、ベドウインの見すぼらしい村々を指す役にしか立つてゐない。彼は、恐らく、同じやうにヘロデ大王の作つた自慢の町のセバストも見たことであらう。その廢墟によつて想像すると、この町は、即座に組立さへすればよい機械のやうに、すつかり出來上つたものを其處に持つて來たのであつた。船積で猶太に到着したこの華美の建築、何れも同徑の、幾分趣味の乏しい、『リヴオリ通り』(6)の裝飾のやうな數百の圓柱、それが『この世の王國とその一切の榮華』と呼んだところのものである。しかしながら、この註文して來た奢侈や、そのお役所風の官僚的藝術は彼の氣に入らなかつた。彼の好んでゐたのは、取も直さず、茅屋、麥打場、巖を穿つて作つた壓搾場、井戸、墓場、無花果の木、橄欖樹などの、雜然と交つたガリラヤの村々であつた。彼は常に自然の傍にゐた。王宮は、彼の目には人々が美しい着物を着る場所のやうにおもはれてゐた。彼が王や權勢の人々を舞臺に上す時、彼の譬喩の中に面白い不可能事の澤山あることは、實に無邪氣なプリズムを通して世界を見る若い田舍者のやうに、彼が貴族社會を考へたことのまるで無いことを證明するものである。

況して彼の知らなかつたのは、あらゆる哲學の基礎で、近代の科學が確證を與へる事となる希臘科學によつて創造された新思想であり、舊時代の單純な信仰が、宇宙の統御を行つてゐるものとした超自然的力を排斥することである。彼より約一世紀前、ルクレシウスは自然の一般法則の不易なことを立派に說明した。奇蹟の否定、萬物が優越人の個人的干涉を毫も顧慮しない法則によつて、世界に現れるものであるといふ思想が、希臘の學問を受け容れた諸國の大なる學派に共通の理法であつた。恐らくバビロン及び波斯も之に沒交涉では無かつたであらう。イエスは此進步を少しも知らなかつた。既に實證科學の原理が宣布せられた時代に生れながら彼は全く超自然界に生活したのである。恐らく猶太人一般も、決して奇蹟に對して、彼以上に渴望の念を有つてゐなかつたであらう。知識の大中心地に生活し、極めて完全な教育を受けたフイロンは、僅に一つだけ品質の悪い架空的の科學を有つてゐたに過ぎなかつた。

この點に關して、イエスはいささかも同國人と異るところが無かつた。彼は惡魔を信じ、それを一種の惡鬼とおもつてゐた。また彼は世間並みに、神經病は惡魔の所爲で、惡魔が患者を占領して、患者を動かしてゐるものと想像してゐた。奇蹟は、彼にとつて例外では無くて、普通の狀態であつた。超自然の觀念は、並びにその不可能は、自然の實驗科學の生れた日に始めて現れるのである。全く物理學の觀念の無い人で、祈禱によつて雲の進行を變じ得るものと信じてゐる者は、病氣乃至死をも停め、奇蹟に何等異常のものを認めない。それといふのは、悉く事物の進路は、その人にとつては神の自由意志の結果であるからである。かやうな知識狀態が、常にイエスのそれであつた。しかしながら、彼の偉大な精神に於ては、さういふ信仰も、凡人が到達するのとは全然反對の效果を生じたのである。凡人にあつては、神の特殊の能力を信ずることは、馬鹿げた輕信や香具師の欺瞞を生ずるのであつた。彼にあつては、その信仰が神人の親密な關係の深遠な觀念と、人間の能力を過信することになるのであつた。その美しい誤謬こそ彼の力の原理であつた。といふのは、假にもその誤謬が他日物理學者や化學者の目に、彼を缺陷のある人とするとしても、それが當時の彼に對して、彼の前にも後にも、一切の個人が左右することのできなかつた力を與へたからである。

夙くから彼の特殊の性格は現れてゐた。傳說は、幼少の時から、彼が親權に反抗し、自己の天職に從ふ爲めに普通の道以外に出てゐたことを得意氣に證明する。少くも親族關係が、彼から見て、些末なことであつたことは確實である。彼の家庭は、彼を愛さなかつたらしく、時には家庭に對して酷であつたことが認められる。イエスは、思想に專心なすべての人の如くに、血族關係を殆ど顧みない程度になつてゐた。此種の人が認めるのは、唯思想關係のみである。彼は弟子達に手をさしのべて、『そこにわが兄弟あり。わが父の御心を成就する者こそ、わが兄弟、わが姉妹なれ』(7)と告げた。常人はこんな風に彼れを解釋しなかつた。或日彼の傍を過ぎた女が、『汝を生みし胎、汝の吸ひたる乳房こそ幸なれ』(8)と呼んだとのことである。『寧ろ神の言葉を聽きそを行ふ者こそ幸なれ』(9)と彼は答へた。やがて自然に抗して大膽な叛逆を試みる時、彼は更に遠く進まねばならなかつた。われらは、血液、戀愛、祖國の如き、あらゆる人間のものを眼下に蹂躙し、善と眞との絕對的の形となつて彼に映じた思想に對してのみ靈と心とを保持してゐる彼をやがて見ることになるのである。

第四章

イエスの發達當時の思想界

冷却してゐる大地は、最早當初創造の現象を理解せしめない。何となれば、それを貫いてゐた火が消えたからである。それと同じやうに、人類の運命を決定した創造的時代の革命に、われらの小心な分析的方法を應用しようとする時、反省的の説明では常に幾分不十分のところがある。公生活の部分が率直に行はれ、人間の活動が百倍も危險を冒し得る一時代に、イエスは生活してゐたのである。當時、非常に大きい役目を果すことは、死を伴ふ危險があつた。といふのは、さういふ運動は、自由と拘束處分——怖しい制裁が無くては役に立たぬ——の無いことを想豫するものであるからである。現今の人は危險を冒すことも少いが、從つて得るところも少い。人間活動の英雄時代には、人は何に對しても冒險を行ひ、また何物をも得るので

ある。善人と惡人、或は少くも自他ともにさう信ぜられてゐる人達は、他に對抗するは軍隊を組織する。人々は死刑臺を經て神の地位に達するのである。その性格は一般に特色を具へてゐてそれを人類の記憶に永久の型として刻みこむ。佛蘭西革命以外に、イエスの出現した時ほど、恰も留保されてゐて、熱病的危難の際で無ければ示されない隱れた人類の力を發揮する上に好適な歴史的時機は全く無かつたのである。

若し世界の統治が思索問題であり、最大の哲學者が信ずべきものの何なるかを同胞に向つて告げ得る最適の人であるとしたら、取りも直さず、宗教と呼ばれる精神的教義的の大規範の出るのは、冷靜と反省とからである。しかしながら、實際はそんなものでは無い。釋迦を除けば、諸の偉大な宗教の開祖は哲學者では無かつた。慥に純粋の思想から出た佛教其物も、全く政治的且精神的の動機からして亞細亞の一半を征服した。セミチツクの宗教はといふと、これ位哲學的で無いものは無い。モオゼもマホメツトも思索的では無かつた。それは活動の人であつた。彼等が人類を支配したのは、國人と同時代の人に活動を提供してである。同樣に、イエスも多少組織の立つた體系のある哲學者でも神學者でも無かつた。イエスの弟子となるには、何等の

信條に署名し、何等の信仰告白をいふ必要も無かつた。唯一つ必要なことは、彼に執着し、彼を愛することだけであつた。彼は決して神に關する議論をしなかつた。それは神を直接に自己の裡に感じてゐたからである。三世紀から基督教が衝突することになつた、哲學的穿鑿の暗礁は開祖によつて毫も提供されたものでは無かつた。イエスは教義をも體系をも有たなかつた。彼は一定の自己の決心を有つてゐた。それはあらゆる他の創造された意志を超越して、現に尙人類の運命を指導してゐるものである。

猶太民族は、バビロンの俘囚時代から中世に至るまで、常に緊張した境遇にあつたといふ利益を有つてゐた。それ故民族精神の保管者が、長い時期を通じて、時に神性を超越し、時に神性の下に沈み、中庸のところにあることの稀な位に強い熱に浮かされて執筆してゐるやうである。決してこれ以上絶望的に、極端に馳せる覺悟をもつて、將來の問題と自己の運命問題とを捉へた者は無かつたのである。猶太の思想家は、人類の運命を自己小民族のそれと區別しないで、人類進行の全般的理論を念とした最初の人達である。常に自己の裡に閉籠つて、その小都市間の紛爭に專ら注意してゐた希臘には、優秀な歴史家があつた。ストア派は、世界人としてまた大なる同胞の一員としての人間の本務について、最も立派な格言を示してゐる。しかし、羅馬時代以前に全人類を包容する歴史哲學の體系を古代文學中に索めようとするのは徒勞であらう。之に反して、猶太人は、時にセミイトをして不思議な程將來の大筋を認め得るものとする一種の豫言感によつて、宗教の中に歴史を取入れた。多分彼等は此精神を多少波斯に負ふところがあるのであらう。古代から、波斯は世界史を進化の連續と考へ、その一々に、一人の豫言者を主宰者の地位に置いた。一々の豫言者は、各ハザル卽ち千年の治世を保ち、印度の一佛毎に數百萬世紀を經ると同じやうな、その治世の繼續からして、オルムヅドの治世を準備する事件の經緯が成立するのである。竟に時代の終局に、千年治世の環の盡きる時に、決定的の樂園が來るのである。その時になると、人々は幸福な生活をし、地は大野の如く平坦になり、最早すべての人々にとつて、唯一つの言葉と、一つの法律と、一つの政府だけがあることになるのである。しかしながら、此時代の到來する前に、怖しい災禍が數々ある筈である。ダアク——波斯の惡魔——は繫いである鎖を斷つて世界を襲擊する。次に二人の豫言者が來て人々を慰め、大時代の準備を整へるといふのである。これらの思想は世界に擴つて、羅馬にも侵入し、其處

で豫言詩の數々を鼓吹した。その根本思想は人類史を時代時代に區分し、神々の繼續がその時代時代に相應し、完全な世界の革新が出來、最後に黄金時代が現れるといふのであつた。ダニエル書、エノク書及び託宣書の或部分は、同じ理論を猶太風に表現したものである。無論それらの思想が、すべての人の思想とまではならなかつた。その思想は、最初數人の強い想像の人々で、外國の教義に志した人々によつて受取られただけであつた。狹量浚趣味のエステル書の著者は、已以外の世界を考へる時には、唯それを輕蔑し、その國々の禍を願ふ爲めばかりであつた。傳道の書を書いた、迷の覺めた快樂主義者は、子孫のために働くことは無益だとさへする程、將來のことを殆ど想つてゐない。利己的の此獨身者の眼には、知慧の最後の言葉は、自己の財産を濟しくづしにして使ひ果すことである。けれども、一民族中の大事件は通例少數者によつて成されるものである。酷薄、利己、嘲笑、殘忍、狹量、陰險、詭辯の夥しい缺點のある猶太民族は、それにも拘らず、歴史の教へる最も美しい利害無視の運動の熱心な發頭人である。反對は常に一國の光榮を成す。一民族中の最大な偉人は、往々その國民が死刑に處する者である。ソクラテスは、己と俱にあることのできないものと判定した雅典の名譽であつた。

スピノザは近代猶太人中の最大な者であつたが、猶太會堂は面目を汚す者として彼を除斥した。イエスは、彼を十字架にしたイズラエル民族の名譽であつた。

數世紀前から、莫大な空想が猶太民族を狙つてゐて、絶えず腐朽に瀕した際に、この民族を若返らせてゐた。希臘が靈魂不滅の名の下に普及させた、個人的報酬論を知らなかつた猶太は、その民族の將來に愛欲の全力を注いでゐた。猶太は無限の運を與へられるといふ神の約束があると信じてゐた。然るに紀元前九世紀から、漸次に世界王國を武力の方に渡した苦い現實が、殘酷にもその希望を蹂躙したから、猶太民族は最も不可能な思想の組合せに舞戻つて、最も奇怪な方向轉換を試みた。俘囚時代以前に、この民族の地上的將來が、悉く北部諸州の分離によつて消滅した時、人々はダビデ家の復興、民族二部の妥協、偶像教に對するエホバ教の勝利、神教政治の勝利などを夢想した。俘囚時代に、調の豐かな一詩人が、諸の民族、遠き島々の貢物を奉る未來のエルサレムの壯觀を見てゐる。その色彩の優雅なことは、六世紀を距ててゐながら、イエスの眼の光がその詩人に徹してゐたかともいへる程であつた。

波斯のキロス王の勝利は、暫く人々の期したものを現すやうに想はれた。アヴエスタの眞面

目な弟子と、エホバの禮拜者とは、互に兄弟であると信じてゐた。波斯の無數の神を驅逐し、それを惡魔として、本來自然主義的の舊いアリヤの想像から、一種の一神教を引出す迄になつてゐた。イランの多くの教訓中の豫言的の調子は、オゼア及びイザヤの或章句と非常に類似してゐた。イズラエルはアケミヌス家の下に安息を得、クセルクセス王の下ではイラン人からすら怖れられてゐたとのことである。次いで、希臘羅馬の文明が揚々として、しかも、屢殘酷な態度で亞細亞に侵入したことは、再び彼等を空想の世界に投じた。以前よりも勝して、この民族は各民族の審判者復讐者として、メシヤを勸請するやうになつた。この民族にとつては、自己の優越感と屈辱を眼前に見ることとから穫られる莫大な復讐欲を滿足させるために、地を根柢から全く攪亂する一個の革命、完全なる革新が必要であつた。(1)

若しイズラエルが、人間を肉と靈との二つの部分に分け、肉體が腐敗しても、靈は生殘ることを當然とする精神主義といふべき教義を有つてゐたとしたら、激怒と强烈な駁擊との熱は、その存在の理由を有つてゐなかつたであらう。しかしながら、希臘哲學から生れたかういふ學說は、猶太精神の傳說中には無かつた。希伯來の古文書は、未來の報酬痛苦の何等の痕跡を含んでゐない。部族の共同責任の思想があつた間は、各人の功績による嚴密な報酬といふことに想ひ到らぬのが當然であつた。無信仰な時代に廻り合せた信仰家こそ災難であつた。その人は、一般の無信仰の結果から來る公難を、他人と同樣に蒙るのであつた。長老派の賢人によつて傳へられたその學說は、日毎に堪へ難い矛盾に到達した。既にヨブ時代から、その學說は非常に動搖してゐた。それを教へてゐたテマンの老人等は、舊時代の人々であつて、この人達を論駁しに現れて來た若いエリフは、最初の言葉からして根本的革命思想の『知慧は最早老人の間に無し』(2)といふ言葉を發してゐた。アレクサンドル大帝以後、世界に加はつた複雜とともにテマンやモオゼの原則は一層許容しがたいものとなつた。嘗て、此時以上イズラエルの律法に忠實であつたことは無かつた。それにも拘らず、人々はアンチオクスの殘虐な迫害を蒙つた。その不幸がこの民族の無信仰によるものだといふことを敢て主張したのは、無意味な舊い文句を繰返すことに慣れた一人の拙劣な辯士だけであつた。何たることであらう。その信仰のために、死を迎へるこれらの犧牲者、勇敢なマカベ家の人々、七人の子とその母、これらをエホバは、永久に忘れ、墓穴の中で腐敗に委して置くであらうか。無信仰で且俗的なサドカイ人な

らば、そんな結果の前に逡巡しないでも濟んだ。ソコのアンチゴヌスのやうな完全な賢人は、報酬を目的とする奴隷のごとくに德を行ふべきものでは無く、希望を置かないで德行の人となるべきだと主張することもできたであらう。しかしながら、一般國民はそれでは滿足ができなかつた。或者は、哲學的不滅說に歸依して、神の記憶中に常に活きてゐる正義の人、人々の追憶に永久に光榮を受ける者、彼等を迫害した背教者を審判する者となるものと自分達を想像してゐた。『彼等は神の目に生き……彼等は神に識られたり』(3)といふのが彼等の報酬であつた。他の或者は、就中パリサイ人は復活の教義に救を仰いでゐた。義人はメシヤの世に參加するために再生し、しかも肉の身を受け、自己が王となり審判者となるべき世界のために再生し、自己の思想の勝利と敵の屈辱とを見るであらうと信じてゐたのであつた。

古いイズラエル民族中には、此根本的教義の全く漠とした痕跡が認められるばかりである。それを信じなかつたサドカイ人は、實際に猶太の昔ながらの教義に忠實な者であつた。パリサイ人、卽ち復活の信者の方が革新者であつた。しかしながら、宗教に於ては、常に熱烈の徒が革新をするのであり、その人達が進んで行くのであり、その徒が結果を取出すのである。靈魂の不滅とは全然異る觀念の復活が、要するに、將來の教理とこの民族の境遇とから極自然に、出て來たのである。玆にも多分波斯が多少の要素を供給したことであらう。要するに、メシヤ信仰と近く萬物が革新せられるといふ教理とが結合し、復活の教義で默示錄のやうな理論の基礎となつたのである。この理論は信仰個條とはならないで――エルサレムの正統猶太教議會がそれを採用したとはおもはれない――しかしすべての人々の想像中に行渡つて、猶太の世の隅々まで極端な發酵狀態を現出してゐたのである。教理的の嚴密なところのまるで無いことが非常に矛盾してゐる種々の觀念を、同じ主要な一點にすら同時に據ることを得させるのであつた。時には、義人は復活を期待する人であり、時には、死んでからアブラハムの懷に受取られる者であつた。時には、復活は全般的であり、時には、唯誠實な者にのみ保留されてゐた。或はそれは更新された地と新しいエルサレムを豫想して居り、或は宇宙がまづ絕滅されるものと想像されてゐた。

イエスが一個の思想をもつやうになつてから、前述のやうな思想がパレスチナに作つてゐた靈えるやうな雰圍氣の中に、彼は入つたのである。それらの思想は何の學派に於ても教へられ

てゐたものでは無かつたが、それは空中に漂つてゐたものであつて、此若い改革者の頭も夙くからそれに浸つてゐた。われらの躊躇や、われらの疑惑は、決して彼には無かつたのである。近代人は、誰も自己の果敢無い運命に、恐らく不安の念を抱かないでは座し得ないとおもはれるナザレの山巓に、イエスは、一個の疑惑すら無く幾度も座したのである。德とは沒交渉の利益を執念く追究させ且われらの悲哀の源となる利己主義から解脫して、彼は只管自己の事業、自己の民族、人類のことばかりを考へたのである。その山々、その海、碧きその空、遙かの高原などは、彼にとつては、自己の運命に就いて自然を訊す人の寂しい幻では無く、目に見えぬ世界と新しい空との透明な影であり、確實な象徵であつた。

彼は當時の政治的事件を、決してさう重要視しなかつた。多分、彼はその種の事をよく知らなかつたのである。ヘロデ王家は、多分彼が名だけしか知らなかつた位、ひどく彼の世界とは異つた世界に住んでゐた。ヘロデ大王は、彼が生れたと同年頃に、最も惡意を有つた後世にも、彼の名をソロモンのそれと聯想させずには置かぬ（しかし繼續不可能な未完成の事業ではあるが）數多の記念物や不滅の記憶を殘して沒したのである。俗的野心家で、宗教的紛爭の迷宮に

迷ひ込んで、この老獪なイドメヤ人は、熱狂者の中で、道德觀念の無い冷靜と理性との與へてくれる利益を有つてゐた。けれども、彼の俗的イズラエル王國の思想は、それを考へた時の世界の狀態に、時代錯誤が無かつたとしても、ソロモンの企てた同じ種類の計畫のやうに、この民族の性格其物から來る障礙のために失敗したことであらう。彼の二子は、英國の支配下にある印度の太守同樣に、羅馬人の傀儡に過ぎなかつた。ガリラヤとペレアとの封王であつたアンチパアテル卽ちアンチパス——イエスは一生その國民であつた——は、チベリウス皇帝の寵を得た佞人で、柔弱怠惰な君主であり、後妻のヘロデアの惡感化で每度失策をばかりしてゐた。ゴオロニチとバタニヤとの封主ピリピ——その領內にイエスは每度旅行した——は、前者よりもずつと勝れた君主であつた。エルサレムの州長であつたアルケラウスのことは、イエスはそれを知るところまでに至らなかつた。柔弱で特徵の無い、時に暴虐であつたこの男がアウグスツス皇帝のために廢せられた時、イエスは約十歲であつた。獨立政府の最後の名殘がこんな風にエルサレムには無くなつた。サマリヤとイドメヤとに併合された猶太は、シリヤ州の一種の藩地となつた。シリヤには上院議員のプブリウス・スルピキウス・クイリニウスといふ非常に

名高い執政官が羅馬帝國の代表者であつた。大問題にはシリヤの代表者に裁決を仰ぐ羅馬の代官、コポニウス、マルクス・アムビヰウス、アンニウス・ルフス、ヴアレリウス・グラツス、及び最後に（紀元二十六年）ポンチウス・ピラツスがエルサレムで相繼承して、絶えず足許に爆發する噴火を消すことに從事してゐた。

モオゼの教に熱中してゐる人達に煽動された間斷の無い一揆が、此期を通じてエルサレムを常に騒がしてゐた。一揆に與みした者の殺されることは確實であつた。しかしながら、律法の完全といふことに關してならば、人々は死も貪るが如くに迎へるのであつた。羅馬の旗を引倒し、ヘロデ諸王の建てた藝術品――それには必ずしもモオゼの掟が守られてゐなかつた――を破壞し、代官の掲げた紋章――その記銘には偶像崇拜の痕跡があると目せられた――に反抗することが、生命を顧みない程度の興奮に達してゐる狂熱家を常に誘惑するものであつた。サリバの子ユダ、マルガロトの子マチアスといふ非常に有名な律法博士は、さういふ風に既成秩序に大膽な反抗黨を組織し、兩人の刑せられた後にもその反抗が繼續した。サマリヤ人も同じ種類の運動で騒いでゐた。既に自己の天才と大精神との溢れるばかりの權威をもつて、特に律法

を廢さうとしてゐる者が、既に生活を始めてゐたこの時程、律法が熱烈なその信徒を多く算へてゐた時は無かつたやうである。自己の前で律法に背く者を、誰彼の容赦無く殺すことを任務として帶びた信仰のある刺客の決死隊（カナイム）或は刺客（シケイル）が現れ始めてゐた。それとは全然別個の精神の代表者の、神性人の類と看做された神通力のある人々も、超自然と神性とに對してこの世紀が感じてゐる痛切な要求からして人々の信用を博しつつあつた。

イエスにずつと多くの影響を與へた運動は、ゴオロニチのユダ即ちガリラヤ人のそれであつた。新に羅馬に征服された諸國が、甘んじて受けなければならなかつた責務の中で、戸口調査が最も不評判なものであつた。大中央集權の行政事業に慣れてゐない民族を、常に驚かすこの方法――戸口調査――は、殊に猶太人の恐怖するものであつた。既にダビデ王の時、戸口調査が激烈な反抗と豫言者の脅迫とを挑發したことがある。事實、戸口調査は課税の基礎であつた。しかるに、純神教政治の思想では、課税は殆ど非敬虔なことであつた。神が人々の認める唯一の主であるから、俗界の主權者に十分一の税を納めることは、取りも直さず、幾分主權者を神の地位に置くことであつた。國家觀念の全く無い猶太の神教政治は、その點からして最後の結果、

即ち俗社界とあらゆる政治との否定を生ぜしめることとなつた。公金は盗んだ金と目せられてゐた。紀元六年にクイリニウスの命じた戸口調査は、ひどく此思想を喚起して、大騒動を惹起した。一個の運動が北部諸州で勃發した。チベリヤ湖の東岸、ガマラの町のユダといふ者と、サドクといふパリサイ人とが課税の正當性を否認し、多數の黨人を作り、間も無く公けの反亂をするやうになつた。この派の基礎を成す格言は、自由は生命に勝り、神のみのものである『主』といふ稱號をもつて何人をも呼ぶべきもので無いといふのであつた。ユダはまだ他の原則を有つてゐた。常に同信者を誤らせないやうに注意してゐたヨゼフスは、態とそれを口にしなかつた。それといふのは、この猶太の歴史家が、それほど單純な思想のために、ユダに其民族中の哲學者間に伍する地位を與へ、パリサイ、サドカイ、エッセネなどの派と並行する第四派の創始者と見るのであると人々が解せぬかも知れぬからである。ユダは明かにメシヤ主義に熱心な、さうして聽て政治運動に化するガリラヤの一派の領袖であつた。代官コポニウスはゴオロニチ人の反亂を鎮壓したが、その徒は殘存し、領袖連も殘つてゐた。それらはその開祖の子、メナヘムと親族のエレアザアルとの指揮の下に、羅馬人に反抗した猶太人の最後の騒動中に、再び大に活躍した。イエスは、自己の考方とは非常に異つた猶太風の革命思想を有つてゐたこのユダを、恐らく見たことであらう。要するに、彼はこの派を知つてゐた。さうして、彼がカイザルの貨幣に關して、自己の標準を示したのは、多分ユダの誤謬に對する反動からであつた。あらゆる叛亂から遠ざかつてゐた賢明なイエスは、先驅者の過失に顧みて、別個の王國と別個の救濟とを夢想したのである。

がリラヤは斯樣に巨大な火爐であつて、極めて雜多の要素が沸騰し騒いでゐた。生命を法外に無視すること、もつと適切に曰へば、一種の死の欲求がそれらの騒動の原因であつた。大なる狂的の運動には前者の經驗が何の役にも立たなかつた。佛蘭西の占領した當初、アルジエリイには毎春、異教徒を驅逐する爲めに神から送られた不死身と自稱する靈感者達の起るのを見た。その翌年、彼等の死は最早忘れられて、彼等の繼承者が矢張前にも劣らぬ信仰を有つてゐた。一面極めて嚴酷であつた羅馬の統治は、まだ干渉が少くて、多くの自由を許してゐた。鎮壓の際には怖しいその亂暴な大統治も、守るべき一個の教義を有つてゐる國々よりは陰險で無かつた。是非とも鎮定の必要があると信ずる迄は、すべてを放任してゐた。放浪的生活の間

に、イエスは唯の一度も警察の手によつて捕はれたことは無かつた。かういふ自由、殊に何よりも、パイサイ風の衒學的束縛の非常に寛かであつたことと、ガリラヤの有してゐた幸福とがこの地方をして、エルサレムよりも事實遙に優秀な地としてゐたのである。革命、更に他の言葉をもつていへば、メシヤ精神が此地の人々の頭を働かせてゐた。人々は大革新の前日にゐると信じてゐた。種々の意味に曲解された聖書が、最も巨大な希望を達成させる滋養分となつてゐた。舊約の單純な記錄の一行一行にも、義人に新しき平和を齎し、神の事業を永久に完成させる、來るべき世の保證と順序（プログラム）ともいふべきものとを人々が認めてゐた。

常に利害精神の相反した二個の部分に分裂してゐたことが、希伯來民族の爲めに、精神界に於ける力の原理であつた。高い使命を授けられる民族は、その中に反對の兩極を含んでゐる完全な小世界である必要がある。希臘は、數里の距離の所に、皮相な觀察者から見れば、正反對であるが、實際は互に必要な競爭の姉妹であるスパルタと雅典とを有つてゐた。猶太に於ても、それが同樣であつた。或意味では、エルサレムの發達に比すると、光彩の乏しい北部のそれも、結句劣らない內容を有つてゐた。猶太民族の最も生氣のある事業は、常にこの方面から來た。

自然の感情が全く缺けてゐること――それが幾分乾燥、狹量、獰惡にするものである――が、純エルサレム人の事業に或崇高な、しかし寂しい、味の無い厭な性質を帶びさせてゐた。その嚴かな博士達、氣の拔けた宗法學者、僞善で怒りつぽい信者達をもつては、エルサレムは假にも人類を征服することができなかつた。北部は、無邪氣なスラムの女、謙遜なカナンの女、情熱のマグダラの女、善良な養父ヨセフ、娘マリヤなどを世界に與へた。北部のみが基督敎を作り上げた。之に反して、エルサレムは、パリサイ人によつて築かれ、タルムツドによつて決定し、中世を通過してわれらに迄達した頑固な猶太敎の眞の祖國である。

このずつと嚴かで無い、尖々したところの無い一神敎的の精神、敢ていへば、ガリラヤのあらゆる冥想に、牧歌的の面白い調子を與へるものの生れる上に、此麗しい自然が役に立つたのである。世界の最も寂しい地方は恐らくエルサレム附近の地方である。之に反して、ガリラヤは綠の濃かな、樹蔭の多い、極めて明媚な地で、聖歌の中のあの土地であり、戀人の歌の中の地であつた。三四の二個月の間、野は花の毛氈で、無比の彩りに足を踏み入れるところも無い。其處の動物は小さいが、極めて柔和である。品のいい活潑な山鳩、草の葉にとまつても葉の撓

まないほど輕やかなひよどり、殆ど旅人の足許に來てとまる、房毛を被つた雲雀、優しい生々した目の小さな川鵶、仙骨を帶びた、しかつめらしい鵠は、全く怯氣も無く、傍に近寄つても平氣で、人を呼びかけるやうである。世界の何處にも、これくらゐ山々が調和良く並んで居り、高尚な思想を鼓吹する場所はあるまい。イエスは殊にそれを愛したやうである。彼の聖い生涯の最も重要な行爲は、この山々の上で行はれた。それは、彼が最もよい靈感を受けたのが其處であつたからである。彼が昔の豫言者と密かに物語つたものも其處である。また彼が既に姿を變へてから弟子達の目に現れたのも其處である。(4)

土耳古回教が生活を甚しく貧弱化した結果、非常に慘な痛ましいものと今日なつてゐるが、しかし、人間の破壞する事のできなかつたすべての物が、今でも、心やすさと、靜けさと、柔和とを湛へてゐるこの美しい地は、イエス時代には固より愉快と快活とが溢れてゐた。若しチベリウス皇帝に敬意を表して作つた、アンチパスの羅馬式のチベリヤを除くと、ガリラヤには大都市は無かつた。それにも拘らず、土地の人口は甚だ多く、小さな町や大きな村落が諸所にあり、何處も手を盡して耕してあつた。昔の榮華の殘つてゐる名殘によつて、藝術に全く天賦の無かつた、奢侈を顧みない、形式美に無頓着な、全く理想主義の農業民族を感ずることができる。野は清い流れと果物とが豐富であつた。大きな農家は葡萄と無花果の蔭にかくれてゐた。庭には林檎、胡桃、柘榴の大木があつた。猶太人が今もサフェドで獲てゐるものから判斷すると、葡萄酒も優れてゐて、人々は澤山それを飲んだのである。滿足な、さうして容易に飽きることのできるその生活は、ゆたかなノルマンディの大袈裟な歡樂や、フラマンの重苦しい快活などのやうな、佛蘭西農民の濃厚な物質主義にはならなかつた。その生活は、架空の夢や、天地を混同する一種の詩的神秘主義などで精神化されてゐた。嚴肅なパプテズマのヨハネならば、猶太の荒野で悔悟を說敎し、絕えず怒號し、狼を仲間として蝗で生活させて置けばよいのである。何故花婿の友達が、花婿が彼等と一緒にゐる間、斷食をするものであらう。歡びは神の王國にもある。歡喜は心の貧しき者、心懸よき人々の娘で無いといへるであらうか。

發生期の基督敎史は、全部かういふやうな美しい牧歌となつてゐる。婚禮の食事についたメシヤ、その宴會に招かれた妓女、善良なザアカイ、美しい水の精の行列かと見える天國の創始者達、以上がガリラヤの受入れ、受入れさせたものである。希臘は、人生を彫刻詩歌によつ

て立派な繪畫に描き上げてゐるが、常に縹渺とした背景も無く遠景も無い。此處は、大理石も傑れた職人も、優秀精妙の言葉にも缺けてゐる。しかしながら、ガリラヤは最も崇高な理想を民衆的の想像の狀態に創りあげた。といふのは、その牧歌の背後に人類の運命が動いて居り、その畫を照してゐる光は、神の王國の太陽であるからである。

イエスはこの醉はせるやうな環境に生活し成長した。幼年時代から、彼は毎年のやうにお祭の時エルサレムの旅をした。順禮は、田舍の猶太人にとつて嬉しい行事であつた。詩篇の幾章かは、家族的に春の數日の間、小山や谷を渡つて、何れもエルサレムの榮華を偲び、或は神聖な中庭の怖しさ、或は兄弟一緒にゐられる歡びを想ひながら道中する、その幸福を歌ふために費してある。普通、イエスがその旅に取つた道は、今日、ギネアとシケムとを經て行く道であつた。けれども、その近くを人々が通るシロやベテルの古い御堂の附近は、人々の氣を緊張させる。最後の宿場のアイネラミエは、物哀しい、しかし面白い場所であつて、露營する目的で其處に落ちついた時の印象は、他に較ぶべきものがあまり無い。谷は狹く暗い。黑い一筋の水が、墓穴を幾つも穿つてある岩壁から流れ出てゐる。想ふに、それは詩篇第八十四に、途中の宿場

の一つとして歌はれてゐる『涙の谷』もしくは、滲み出る流れで、中世の甘い寂しい神秘主義にとつて生命の象徵となつたものであらう。その翌日は早くエルサレムに著くのである。こんな期待は、今日でも隊商を元氣づけ、夜を短く、眠を輕からしめるものである。

それに集つた國民が、互に思想の交換を行ひ、毎年のやうに首都に大騷動の中心を作つたその旅行は、イエスをして民族精神と接觸を保たせ、且猶太教の公の代表者等の缺點に對して、既に强烈な反感を彼に鼓吹してゐたに相違無い。人々は荒野が彼にとつて別個の學校であり、其處に長い逗留をしてゐたと主張する。しかしながら、其處で彼の見た神は、彼の神では無かつた。それは高々ヨブの神で、酷びしい怖しい神で、誰にも成程とおもはせるものでは無かつた。時には、それは彼を誘惑しに來るサタンであつた。その時には、彼は懷しいガリラヤに歸つて綠の小山や清い泉の間で、胸に歡喜の心と天使の歌を抱いて、イズラエルの救濟を待つてゐる子供や婦人の群に伍して再び彼の天の父に會ふのであつた。

第五章

イエスの最初の訓言　神父及び純粋宗教に關する思想　最初の弟子

ヨセフは、彼の子が公の仕事をするやうになる以前に死んだのである。從つて、後に殘つたマリヤが家長となつた。このことは、イエスを多くの他の同名人と區別しようとする時、屢「マリヤの子」(1)と呼んだ理由を説明するものである。良人の死によつて、ナザレと緣の無くなつたマリヤは、生れ故鄕であつたからと見えて、カナに引つ込んだものらしい。カナといふのは、ナザレから二里か二里半位のところにある小さな町で、アツキの平野を北に限つてゐる山々の麓にあつた。眺望は、ナザレ程雄大では無いが、一帶の平野の上に擴がり、ナザレの山々やセホリスの丘々によつて、宛で繪のやうに限られてゐる。イエスは暫く此處に住つてゐたやうに想像される。此處で恐らく彼の青春時代の一部は過ぎたのであり、彼の最初の光が放たれ

たのであらう。

彼は父の職業であつた大工の職を營んでゐた。といつて、それは卑むべき事情のものでも、厭ふべき譯のものでも無かつた。猶太の習慣は、知的の勤勞に身を委ねる者も、一個の職業を習得すべきものとなつてゐた。極めて名高い博士達も職業を有つてゐた。だから、教育のあれ程行屆いてゐた聖パウロも、天幕製造業者であつた。イエスは結婚をしなかつた。彼の愛の力は全く自己の天職と信じたものに向けられた。婦人に對する彼の極めて優しい感情は、自己の思想に對する彼の傾倒的の熱誠と別のものでは無かつた。アッシジオのフラシンスコや、サアルのフランソアのやうに、自己と同じ事業に熱中してゐる女性を、彼は姉妹として取扱つた。彼は、聖クララや、フランソアズ・ド・シャンタアルに比すべき異性を有つてゐた。唯これらの女性は、事業よりも以上に、彼を愛してゐたもののやうである。疑ひも無く、彼は、彼が愛するよりも以上に愛せられてゐた。極めて氣品の高い性質の人々に、屢ある通りに、彼にあつては心の優しさが限り無き溫和となり、茫とした詩趣となり、普遍の魅力と化したのである。如何はしい行爲の婦人達に對して、全く精神的の、自由親密の交際のあつたことも、彼を「父」の

榮光の愛着させ、またそれに奉仕することのできるあらゆる異性に對して、一種の羨しさを彼に皷吹したその情熱によつて同様に解釋がつく。

彼の生涯中、詳かで無いこの時期を通じて、イエスの思想の進みかたは何うであつたか。如何なる冥想によつて、その豫言者的生活に入つたか。さういふことは、彼の史傳が、斷片的である上に、精確な年代記無しに傳はつたのであるから知る事ができないのである。しかしながら、生命的存在の發達は、何處も同様であるから、イエス程の強い人格の生長が、非常に嚴密な法則に從つたといふことは、疑はしいことでは無い。『神性』といふ高遠な觀念――それは彼が猶太教に負うたものでは無く、彼の偉大な精神の創作にかかつたものらしい――が、いはば彼の全人格の胚であつた。此處に、われらの極めて普通に耳にする思想や、凡庸人の浮身を窶す議論を、最も棄て去らねばならぬ所がある。イエスの敬虔な細かな情の調子を、よく理解するためには、福音書とわれらとの間に挿つてゐるすべてのものを除き去る必要がある。天啓說を排し唯一の神を認める理神論と、汎神論とが神學の兩極端となつてゐる。煩瑣哲學の貧弱な議論、デカルト精神の枯涸、神を狹く縮め、殆ど自己以外のものを排して、神を局限した十八世紀の甚しい非宗教的傾向などが、近代の合理論中に、神性の充實したあらゆる感情を取入れさせず、それを打消したのである。果して神がわれら以外の一定の存在であるとしたら、神と特殊關係を有つと信ずる者は錯覺者である。それに物理學生理學の學は、超自然的の感覺が錯覺であることをわれらに證明するのであるから、多少矛盾を排する自然神教(理神論)の信者は、過去の偉大な信仰を理解することの不可能な狀態に陷る。一方に於て、汎神論は、神格を否定するのであるから、古代諸宗教の神から非常に距ることになる。神に對して最も高遠な理解を有つた人々、即ち釋迦、プラトン、聖パウロ、アツシジオの聖フランシスコ、聖アウグスチヌス――彼の現生活の或期間に於て――等は、理神論者であつたか、それとも汎神論者であつたらうか。こんな問題は無意味である。神の存在に關する物理學的哲學的の證明は、これらの偉人には一向關係の無いことであつた。彼等は彼等自身の裡に神を感じてゐた。故に神の眞の子供であるこれらの大家族の第一位にイエスを置くべきである。イエスは錯覺を有つてゐなかつた。神は、自己以外の誰かに對するが如くに、彼に對して語るのでは無い。神は彼の裡にあり彼は神とともに感じ、天父のことについて言ふべきことを、彼は自己の胸から取出すのである。

彼はある交通によつて、常に神の中に生活してゐた。彼は神を見ない。しかしながら、彼はモオゼの如く雷をも、燃ゆる茨の叢をも要すること無く、ヨブの如く、天啓的の暴風を要すること無く、希臘の古聖人のやうに、神託を、ソクラテスのやうに、守護の靈を、マホメットのやうに、天使ガブリエルをも要しないで、神の聲を聽くのである。例へば、聖テレザの聖像や錯覺などは、玆では何の役にも立たない。神と同一であると自稱する、波斯の神秘家の陶醉も、また全く緣の無いものである。イエスは、自己が神であるといふ冒瀆の考を、一時も口にしたことが無い。彼は神と直接關係にあることを信じ、自己を神の子であると信じた。人類の間に存した神の最高意識は、イエスのそれであつた。

他の一方に於て、かやうな精神狀態から出發したイエスは、釋迦のやうに、毫も思索をする哲學者とならぬ所以も理解されるであらう。福音書ほど煩瑣神學に遠いものは無い。神の本質に關する、希臘學者の思索は、全く別種の精神から來てゐる。直ちに父と考へた神、それがイエスの神學全部である。それも、彼にあつては、理論的の原則では無く、他人に敎へ込むつもりの多少證明のある學說でも無かつた。彼は弟子に對して、一つも推理をしなかつた。彼は彼等

に注意の努力を少しも要求しなかつた。彼は自己の意見を說敎したのでは無く、自己を說敎したのである。往々、極めて偉大無私の精神は、昂奮の進むにつれて、常に自己に注意することと、極端な個性的愛感性とを著しく示すことがある。一般にそれは婦人の特性である。神が自己の裡にあり、斷えず、自己は神によつて顧みられてゐるといふ信念が非常に强く、他人に自己を强ひ課することを毫も恐れない。わらの無力の一部である遠慮とか、他人の意見を尊重することなどは、さういふ人々には無いのである。さういふ昂奮的性格は利己主義では無い。といふのは、さういふ觀念に囚はれてゐる人々は、自己の事業を完成するために、欣んで自己の生命を犧牲にするからである。それは、自己と自己の抱擁せる對象との、最後の限界に達した同一化である。新世の出現を目して、唯開祖の個人的空想であるとする者には、それは傲慢である。その結果を見る者にとつては、それは神の指である。此處で、狂人と靈人とが接觸する。唯狂人は決して成功しない。人類の進步に眞面目に影響を與へることに就いては、今日迄精神錯亂の功は認められてゐない。

無論、一擧にしてイエスがこの高い自己肯定に達したのでは無い。しかしながら、最初の數

歩から、父子の關係に於て、彼は神と顏を見合せたもののやうである。其處に彼の獨創性の偉大なはたらきがある。その點に於て、彼は全く彼の種族中の人では無い(2)。猶太人も同教徒も、この妙味のある愛の神學を了解しなかつた。イエスの神は欲するが儘にわれらを殺し、欲するがままにわれらを罪し、欲するがままにわれらを扱ふ因業な主人では無い。イエスの神は『われらの父』である。われらの胸に、『父』と呼ぶ微かな呼吸に耳を傾ける時、人々は神の聲をきくのである。イエスの神は、その民の爲めにイズラエルを選んで、すべてに對抗して、その民を保護する偏頗な暴君では無い。それは人類の神である。イエスはマカベ族の如き愛國者でも無く、ゴオロニチのユダの如き、神政論者でも無い。大膽に彼の民族の偏見の上にぬきんでて、彼は神の普遍的父性を確立する迄に至つた。ゴオロニチは『主』の名を神以外の者に與へるよりは、寧ろ死すべきことを唱へてゐた。イエスは、この名を取らんと欲る者には誰にでも取るに任せて、神の爲にはもつと快い名を保留した。地上の權力者には、即ち彼から見れば、武力の代表者には、皮肉に滿ちた尊稱を與へて、彼は最高の慰安、何人のためにも天に在す『父』への歸依、何人もその胸の中に運ぶことのできる眞の王國を築いたのである。

眞の王國を築いたのである。

この『神の王國』或は『天の王國』といふ名(4)は、この世に彼が齎らす革命をいひあらはす爲めに、イエスの好んで用ひる言葉であつた。メシヤに關する殆どすべての言葉と同じやうにこれもダニエル書から出たものである。この異常な書の著書のいふところによると、崩壞の運命をもつた四つの俗國の後に、第五の國が繼いで起り、それは聖者の國であつて、永久に繼續するものである。固よりその地上の神の世については極めて多樣の解釋が與へられてゐた。多くの人にとつては、それはメシヤの世か、ダビデの世であつた。猶太の神學から見ると、神の王國は、大抵猶太教其物、眞宗教、一神教、篤信といふことに過ぎない。彼の生涯の晩年にイエスは、その御世が突然な世界の革新によつて物質的に實現されるものと信じてゐた。しかしながら、無論そこに彼の最初の思想があつたのでは無い。彼が父なる神の觀念から取り出した立派な道德は、世界の終りに近づいてゐることを信じ、禁欲主義によつて空想的の大團圓を迎へる準備をしてゐる熱心な人達のそれでは無かつた。それは生きむことを欲し、且生きて來た世界のそれである。『神の王國は汝等の中にあり』と、彼は外的の證徵をほじくるやうに詮

來する人達に告げたのである。神の降臨といふことの現實的觀念は、一個の雲翳に過ぎないものであつて、死が彼に忘れしめることにする、刹那的の誤謬に他ならぬものであつた。神の眞の王國、柔和なる者と心の貧しき者との王國を建設したイエス、それこそ彼の天父の聲がより純粹な響をもつて、彼の胸の中に響いた時代の、清淨な混りけの無かつた初期の彼である。だから、神が眞に地上に住んだ時日は、數個月乃至一年位でもあつたらう。若き大工の聲は、突然異常なやさしみを帶びた。かぎり無き魅力が、彼の體から發して、それまでに彼と會つたことのある者も、最早彼を彼として識別けることができなかつた。彼はまだ弟子を有つてゐなかつた。彼の周圍に群つて來た者は一宗一派の者では無かつた。しかしながら、人々は既に一個の共通精神、何かしら鋭い柔かなもののあることを其處に感じてゐた。彼の親切な性格、それと、猶太民族中に時々あらはれる美しい容貌とが、これらの醇朴の民の間では、殆ど何人も遁れることのできない蠱惑の輪の如きものを、彼の周圍につくつたのである。(5)

もし、若き師のこの思想が、此時まで人類を高めることのできた、凡庸な慈悲線を超えることと甚しくなかつたら、事實、樂園が地上に齎らされることになつたのかも知れぬ。人間間の博愛、神の子、及びそれから出てくる道德的結果は優雅な感情をもつて抽き出されてゐた。當時のすべてのラビの如く、系統的の推論に慣れてゐなかつたイエスは、簡潔なまた表現的な、時には謎のやうな晦澁な金言の中に自己の教義を盛つた。これらの訓言中のあるものは、舊約書から來た。また他のものは、もつと近代の賢人達、就中ソコのアンチゴヌスや、シラクの子イエス、ヒレルなどの思想――それらは學者的研究からで無く、屢反覆される諺のやうなものとして彼に傳つてゐた――から來たのである。猶太の教會は、極めて巧みな言ひあらはしかたの訓言を澤山有つてゐて、それが當時一種の諺文學となつてゐた。イエスはその口傳の教訓を、殆ど全部採用したが、しかし秀れた精神をそれに加へた。大抵は律法や古人によつて示された義務を豐富にして完全なものを求めた。若し眞正の基督教的といふ名で、實際基督によつて說かれたものをいふのであるとしたら、謙虛、寬容、慈悲、犧牲、克己などのすべての德は、正にそれであつて、それらはこの最初の教訓の中に萠芽として存在してゐる。正義に對しては、彼は普及してゐた格言の『汝人の汝に成すを欲せざることを他人に成すなかれ』を繰返すことで滿足してゐた。しかしながら、まだ可成り利己的であつたこの古い知慧位では彼は足れりとし

なかつた。彼は極端にまで進んだ。

『人汝の右の頰を撲たばその左をもこれに向けよ。又、汝を訴へて上衣を取らんとする者には外衣をも與へよ。』

『汝の右の眼もし汝を罪に墮さば、之を抉きて捨てよ。』

『汝の敵を愛し、汝を憎む者に善をなし、迫害する者のために祈れ。』

『審くことなかれ、しからば汝審かるることなからん。赦せ、しからば人汝を赦さん。天に在す汝等の父の憐みあるがごとく、汝等憐みあれ。與ふるは受くるよりもまされり。』

『謙る者は擧げられ、自ら高うする者は卑くせられん。』(8)

施與、憐憫、善行、溫和、平和の愛、完全な無私の心などに就いては、彼は猶太教會の教義以上に加へたものは無いといつていい。しかしながら、彼は感激の力のともつた語調を添へて古くから發見されてゐた金言を新しくした。道德は聊か巧みに言ひ現はされた原理から成り立つものでは無い。教訓を愛せしめる教訓の詩趣か、抽象的眞理としての教訓其物よりも有力である。それ自身に於ては、獨創性に乏しい——即ち古い訓言をもつて殆ど全部を組立てられる

といふ意味で——としても、福音書の道德は、やはり人間の良心から出た最高の創作であり、道德家の書いたものとして、完全な生命のある最も立派な法典である。(7)

彼はモオゼの律法に反抗の言葉を出さなかつた。しかしながら、彼はその不十分なことを認めて、それと無くそのことを洩してゐる。昔の賢人が言つた以上のことをしなければならぬことを、彼は絶えず繰返していつた。彼は最も輕微な殘酷の言葉をも禁じ、離婚及びあらゆる誓を禁じ、復讐の刑を批難し、高利を罪とし色情を姦淫と同じ罪惡と認めた。彼は誹謗を普く赦さむことを欲した。その高い慈愛の根據となる動機は、常に同一のもので、すなはち『……善人の上に又惡人の上にその太陽を昇らしむる汝の天に在す父の子と汝を成さむがために……汝もし汝を愛する者のみを愛せば汝何の手柄かあらんや、稅吏もしかよく成すべし、汝もし汝の兄弟にのみ禮せば如何に、そは異教徒もしかよくせん、完かれ、天に在す汝の父の完きが如く』といふのであつた。(8)

全く胸中の感情に、神の模倣に、又天父と良心の直接交渉に基礎を置く純信仰、僧侶無く外的形式の無い宗教が、これらの原理の結果である。イエスは、自己をもつて猶太教のまつただ中

に於て、革命の首魁とするその大膽な歸結に對して決して逡巡しなかつた。何故、人とその天父との中間に、仲介者が必要であるか。神は人の心をのみ見るのであるから、體を害ふばかりの齋戒沐浴や、儀式が、何の役に立たう。猶太人にとつては、非常に神聖なその傳統も、純粹の感情に較べれば何物でも無い。祈禱をしながら、他人が見てゐてくれるか何うかと脇見をしたり、目に立つやうに施物をしたり、信心家であると人に見わけられるしるしを衣服につけたりするパリサイ人の僞善、あらゆるこの種の僞信仰の擧動は彼に反感を催さしめた。彼はかういつた。『彼等はその報ひを得たり、汝に於ては、汝施しを成す時、右の手の成せることを左の手をして知らしむる勿れ、そは汝の施し隱くされてあらんがためなり、しからば、ひそかに見たまふ汝の父そを返したまふべし、汝祈る時、人に見られむがために會堂の中に立ち、または廣場の片隅にて祈ることを好む僞善者の眞似をなすこと勿れ、われ誠に汝に告げん、彼等はその報ひを得たり、汝にありては、汝祈らむとする時汝の室に入り、戸を閉ぢて隱れたる汝の父に祈れ、しからば隱れたるに鑒たまふ汝の父嘉納したまはん、汝祈る時言葉によりて受けたまふべしと想へる異教徒の如く、言葉多くある勿れ、汝の父なる神は汝の願ひに先き立ちて汝の要むるものを知りたまへり。』(9)

彼は禁欲主義の外的のしるしを毫も裝はなかつた。常に、人の神を求むる山の上とか、寂しき場所で、祈禱する——といふよりも冥想することで、彼は滿足してゐた。彼以後にも、極めて少數の者のみが有つことのできたくらゐの、神人關係の高い觀念——それを爾來彼の弟子達に教へたのであつた——が、唯一つの祈禱に約められてゐる。(10)

『天に在ますわれらの父よ、御名を崇めさせたまへ、御國を來らせたまへ、御心の天になる如く地にもならせたまへ、われらが日常の食を今日も與へたまへ、われらに罪を犯せるものを、われらが恕すごとく、われらの罪をも赦したまへ、われらを誘惑にあはせず、われらを惡魔より救ひたまへ。』 天父が、われらに必要なものを、われら以上によく知つてゐるといふ思想と、人々が或一定の物を神に請ふことは、殆ど神に無禮を加へることだといふ思想に、彼は特に力を入れたのである。

イエスは、この點に於て、猶太教の立つてゐる大原理——しかし猶太民族の指導階級は次第にそれを無視する傾向を示してゐた——から結果を抽き出したに過ぎなかつたのである。希臘

羅馬の祈禱には概ね常に利己主義の色が附着してゐた。決して異敎の祭司は信者に對して、『汝供物を祭壇に持ち來る時、若し汝の兄弟に恨を買へることをあるを想ひ出さば、供物を祭壇の前に遺し置き、往きてまづ汝の兄弟と和らぎ、しかる後來りて汝の供物を棒げよ』と言はなかつた。古代に於ては、ひとり猶太の豫言者達――就中イザヤ――が聖職者に對する反感から、人間が神に對してなすべき儀式の、眞の性質を捕捉してゐた。『汝等の犧牲多しとて我に於て何かあらん、われはそれに飽けり、汝等の牡羊の脂肪に我胸はむかつけり、汝者の香の煙はわれを煩はす、そは汝等の手血に塗れたればなり、汝等の心を淨くせよ、惡をなすことをやめよ、善を學べ、正義を求めよ、しかる後來れ。』(11)後年或博士等、正しきシメオン、シラクの子イエス、ヒレル等は殆どその核心に觸れ、律法の概要が正義であることを宣言した。埃及にゐた猶太人中のフイロンは、イエスと同時代に、道德的神聖の高遠な思想に達した。その結果として、律法的行事をあまり重要視しないことになつた。シエマイア及びアブタリオンも、甚だ自由な敎義學者の態度を再三示してゐた。ラビのヨハナンは、程無く、慈愛の行爲を、律法の研究其物以上としようとした。けれども、イエスのみが殊に際立つて鮮かに、そのことを言つた。曾てイエス程祭司らしく無い祭司は無かつた。保護といふ口實を翳して宗敎を窒息させる形式其物の敵として、彼以上の者は無かつた。その點に於て、われらは、何人も彼の弟子であり、繼承者である。そこに彼は眞宗敎の基礎となる永遠の石を置いたのである。さうして、若し宗敎が人類にとつて本質的のものであるとしたら、その點に於て、彼は人々が彼に允してゐる神の位に値するものであつた。心の淸淨と人類愛との上に建てられた宗敎思想、この全く新しい思想が、彼によつてこの世に入つたのである。それは、この點に於て、基督敎會が完全に彼の所思に背かずにはゐられなかつた程の、また今日若干の少數者のみが漸くその所思に添ふことのできるほどの崇高な思想である。

自然に對する卓越した感情は、彼に刻々目に見えるやうな表現的の形を供給した。時には、われらの機智と稱する著しい慧敏が、彼の訓言を潤飾してゐる。時には、訓言の潑溂とした形が、俚諺を巧みに驅使したところから來てゐることもある。『汝何ぞその兄弟に向つて、汝の目の塵を取らせよと云ひ得んや、見よ、梁木、汝の目の中にあるに非ずや。僞善者よ。先づ汝の目よりその梁木を取り去れ、然る後汝の兄弟の塵を取らんとおもふべし』(21) の類である。

長い間、若い師の胸に秘められてゐたこれらの教訓が、もはや、若干の弟子を集めるやうになつた。當時の時代精神は小さい教會の方にあつた。それはエッセネ派卽ち道士の時代であつた。ラビは各その教訓をもつて居り、タルムッドの金言を作つたシエマイア、アブタリオン、ヒレル、シヤンマイ、ゴオロニチのユダ、ガマリエル、尙其他の者が四方に現れてゐた。當時は書くことは甚だ稀であつた。當時の猶太の博士達は著書をしなかつた。會話や公開講義で、すべてが足つてゐたのであり、從つて、人々は記憶しやすい言ひ廻しかたをすることに苦心してゐた。だから、ナザレの若き大工が、これらの金言——大部分は旣に普及してゐたが、然し彼によつて世界を生れ更らせることになる——を外部に發表しだした時、それは別に大事件では無かつた。いはば一人のラビ——無論最も魅力のある——が多くなつただけのことであつた。さうして、彼の周圍には、珍しがつて彼を聽かうとする、また無名の者を漁らうとする、若干の靑年が出來たのである。人々の無頓着を撓めるには時間が費る。まだ基督敎徒は無かつた。しかし眞の基督敎は建てられてゐたのである。さうして、疑ひも無く、この當初の時以上に、完全な基督敎は嘗て無かつたのである。イエスは、これ以上に何等永續性のものを附加へない。否或意味に於て、彼はそれを危くすることになる。といふのは、すべての思想は、成功するために犧牲を要するものであるからである。人は決して無垢のまま生活戰を通過し得るものでは無い。

善を考へるだけでは、事實まだ足りない。それを人間の間に成就させる必要がある。それには多少不純な道も入用である。若し福音書が、馬太傳や路加傳の數章にとどまつてゐたら、慥にそれはもつと完全であつて、今日多くの異議を挿まれないで濟んだであらう。しかしながら、奇蹟無しであつたら、世界の改宗ができたであらうか。若しイエスが、現にわれらの論じつつある時期に死んだとしたら、彼の傳記中にわれわれを不快ならしめる頁も無かつたであらう。けれども、それでは、神の目から見てより偉大であるにしても、彼は人々に知られないで終つたであらう。最も善き偉大な無名の靈の群の中に、彼は沒してしまつたであらう。さうして、眞理は宣布されなかつたかも知れず、また世界は、彼の天父が彼に頒つた非常に優れた道德を利用することが無かつたかも知れぬ。シラクの子のイエス乃至ヒレルは、イエスのそれと殆ど同程度の高尙な訓言を公けにした。けれども、ヒレルは到底基督敎の眞の創始者と看做され

ないであらう。藝術に於けるが如く、道徳に於ては、言葉は價値のあるものでは無く、行爲が全部である。ラフアエルの畫の中にかくれてゐる思想は、いふに足りないものである。唯畫のみが尊いのである。同様に道徳に於ても、眞理が感情の狀態に移る時に、始めて或價値をもつのであり、それが世界に事實となつて實現される時、始めて全價値を發揮するのである。幾多の凡庸の道徳家が、非常に立派な訓言を書いてゐる。一方では、極めて有徳の人々で、世界に徳の傳統を繼續さす程の何一つ成してゐない者がある。月桂冠は言葉に於ても事業に於ても、力强く善を感じ、自己の血を賭して、それに勝利を獲させる者に與へられるのである。イエスは、この二重の見地よりして比類無き者である。彼の光榮は無缺であり、且永久に更新せられるであらう。

第六章

洗禮者ヨハネ　ヨハネ訪問のイエスの旅行　洗禮の採用

史料の缺けてゐるために、その役目の一部分はわれらにとつて謎となつてゐる、異常な一人物がその時代に現れて、現實にイエスと關係をもつてゐた。その關係は、寧ろナザレの若き豫言者をして、その軌道から逸せしめる傾向のものであつたが、しかしながら、その關係が、彼の宗的施教設に第二義的の必要な事柄を若干彼に暗示した。尙、結局彼の弟子達をして、その師を猶太の或階級の人達に推薦する上に非常に有力な權威を與へる所以となつた。

チベリウスの即位第十五年、紀元二十八年の頃、パレスチナ全土に亘つて、ヨハナン、或はヨハネといふ血氣の旺盛な、情熱のともつた若い禁慾主義者の噂がひろまつた。ヨハネはヘブロン附近のユタか、もしくはヘブロンの町の中に生れたらしく、聖職の家の子であつた。猶太

の沙漠の直ぐ近くで、アラビヤの大沙漠から數時間の距離にある第一の敎長都市であつたヘブロンは、此時代から今日と同樣で、最も嚴肅な形の一神敎の一中心地であつた。彼は若い時から、ナジイル、すなはち願をかけて、或戒律を守らされた人であつた。いはば、取卷いてゐる沙漠に、早くから彼は心を惹かれてゐたのである。其處で彼は駱駝の皮、或はその毛織物を被つて、食としては僅に蝗と野蜜とだけで、印度の瑜珈のごとき生活を營んでゐた。若干の弟子が彼と宗派を同じくし、彼の嚴格な言葉について冥想しながら、その周圍に集つてゐた。若し特殊の風貌が、この隱者にイズラエルの大豫言者の最後の子孫だといふことを示してゐなかつたとしたら、人々は恒河の邊に伴ひ行かれてゐるやうな感じのしたことであらう。(1)

猶太民族が、一種の絶望をもつて、民族の運命を反省するやうになつてから、民衆の想像は喜んで再び昔の豫言者等の方に向ふやうになつた。苦しい夜の夢のやうに、追憶の念によつて民衆を覺醒させ焦慮させた過去のあらゆる人物の中で、最も偉大な者はエリヤであつた。豫言者中のこの巨人は、カルメルの酷い寂寥の中で、野の獸と生活を俱にし、岩の洞の中に住ひ、其處から出ては諸王を翻弄し、漸次に變化して一種の超人となり、或時は見え、或時は隱れ、

竟に死を知らぬ人となつたのであつた。一般に、人々はエリヤが歸つて來て、イズラエルを復興するものだと信じてゐた。彼の營んだ嚴格な生活、彼が殘した、さうして相變らず、その印象の下に東洋がその日を送つてゐる怖しい記憶、今日に至るまで戰慄させたり、生命を奪つたりする暗澹たるその光景、復讐と恐怖とに充ちたすべてのその神話が、强く人々の頭に刻みこまれて、いはば、すべての民衆的の生れの者の先天的特徴になつてゐた。何人でも民衆に大なる影響を及ぼさうとする者は、必ずエリヤを眞似る必要があつた。ところで、隱遁生活が此豫言者の第一の特色であつたから『神の人』を隱者であると信ずる習慣が人々についてゐた。聖者といへば、痛悔、僻陬の生活、業を積む時期を有つてゐるものと誰も信じてゐた。さういふ譯で、沙漠に隱遁することは、貴い使命の條件であり、且序曲であつた。(2)

この摸倣の精神が、隨分ヨハネを支配したことは、毫も疑の無いことである。隱遁生活は、昔の猶太民族の精神とは、甚しく反對のものであるが、それが――これとナジイル、レカビイトなどの猶太の行者の祈願とは無關係であつた――猶太の到る所に侵入した。エッセネ派、即ち道士達は、死海の東岸のヨハネの鄕土の附近に群り集つてゐた。肉食、飲酒、性交などを

斷つことは、天啓を受ける者の修業と看做されてゐた。宗派の長たる者は、一宗の開祖のやうに、特有の戒律制度を有つにゐる隱者であるべきものと人々は信じてゐた。青年の教師達も、また時としては、婆羅門の教師によく似た隱者の類であつた。事實、其處には、印度の佛教僧の遠い影響が全く無かつたであらうか。後の初期フランシスコ派の人達のやうに、教訓を與へる外形によつて說教をし、言葉の通じない人々を改宗させながら、世界を遍歷した托鉢の或佛教僧が、慥にシリヤ、バビロン方面に向けてしたと同樣に、歩を猶太の方面に轉じたことは無かつたであらうか。それは誰も知らぬことである。バビロンは、少し以前から、眞に佛教の一中心地であつた。ブダスブ(ボディサトヴァ)は、カルデヤの聖人であつて、サビ派の始祖であつたとされてゐる。サビ派其物は何であつたか。その語源の示すところでは、バプチスム、卽ち幾回も洗禮をする宗教で、『聖ヨハネの基督教徒』とか、托鉢宗といひ、アラビヤ人がエルモグタジラ――洗禮者――と稱する、今日尙存してゐる一宗のその基である。これらの漠として類推を選擇することになると非常に困難である。紀元當初の數世紀間、ヨルダンの對岸地方にあつた、猶太教、基督教、洗禮教、サビ教などの間に漂つてゐた諸の宗派は、われらに傳はつてゐる史料の混雜してゐることからして、批判の上に最も好奇的な問題である。要するに、ヨハネ、エツセネ派、當時の猶太の精神的教訓家などの、外的行事の多くは、遠い東洋からの新しい影響から來たものであつたと想像することができる。ヨハネ派の特色となり、彼にその名を與へた根本的の儀式は、常に南カルデヤを中心とし、其處に現今迄存續してゐる一宗教を構成したものである。(3)

その儀式は、洗禮卽ち全身を水に沒することであつた。洗禮は、東洋の諸宗教に於けるが如くに、猶太人の間にあつても、既に親しいものであつた。エツセネ派は、これに特殊の廣い意義を與へてゐた。洗禮は、猶太教に新たに歸依する者を加入させる普通の一儀式、一種の入門式となつてゐた。その間に、ヨハネは、死海附近の猶太の沙漠地方に、彼の活動の舞臺を決めてゐた。洗禮のことを司るやうになつてから、彼は移つてヨルダン河の岸邊や、エリコの對岸とおはれる東岸のベタニヤ或はベタバラや、水の豐富にあつたサリム附近のエノン、卽ち『泉苑』といふ名の所などに行つた。其邊では、主としてユダ部落の夥しい群衆が、彼の許へ赴いて洗禮を受けてゐた。かくして數ケ月の後に、彼は猶太の最も有力な一人となり、誰も彼を指